
もういちど、手を繋いで

ふあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もういちど、手を繋いで

【Nコード】

N2877G

【作者名】

ふあ

【あらすじ】

……どこから間違っていたんだろう。おれはただ、手を繋いでいたただけなのに。失ったものは、今更どうしようもないんだってことは、わかってるけど「虐待を繰り返し、出て行った父親。帰ってこない優しい母親。いなくなったあの子。ケンカ。学校。居場所を求めて彷徨う街。世界の隅。消え入りそうな、はかなく幼い影。すべてを失い、すべてを受け入れた、十四歳の軌跡。

プロローグ（前書き）

作品中に、暴力表現を伴う箇所があります。苦手な方はご注意ください。

ブローグ

——あいつが、殺した。

水滴が、強く身体に叩きつけられる。激しい雨が吹き付ける。

——あの子は、死んだ。

誰もいない暗い夜道、豪雨の中を駆け抜ける。ひっきりなしの雨音と、自分の足が水溜りを破る音だけが響いている。雨粒が視界をゆがめ、口へ流れ込み、バットを握る右手を滑らせる。

もう、何もない。何も残っていない。

おれには、あの子しかいなかった。あの子にも、おれしかいなかった。

それが、どうして。

どうして、奪ったんだ。

何で、おれじゃ駄目だったんだ。

あいつは、あの子をつれていった。

あいつが。

あいつが。

あいつが、殺した。

殺した。殺した。

ころした。

誰も通らない横断歩道、信号が点滅を繰り返している。そこを走りぬけたとき、一際大きな水溜りが足の下でつぶれた。

痛いほど強くぶつかる雨粒が、頬を伝い腕を伝い足を伝っていく。ひたすら駆け続けた。

やがて、雨の中、あの工事現場を囲む、黒々とした高い壁が見えてきた。

おれは、一般的に言つと、かわいそうな子どもだ。

自分で言つと、お前馬鹿じゃねえのなんて思われるかもしれない。でもおれは、馬鹿だから否定はしない。

かわいそうだっていつても、今どき虐待なんてそう珍しいことじゃないかもしれない。でも、普通でないことは確かだ。現に、おれは二年前までその被害者で、加害者はおれ以上に馬鹿だった親父だ。今はもう、あの日の夜、玄関ですれ違った母さんに、煙草を買いに行くと言つたきり、二年も帰ってきていない。月の裏側まで探しに行ったのか、自販機がカード式になったのを知らずにぶっ壊して捕まったか。別に兎とけんかしていようが、警察と仲良くしていようが、どうでもいいんだけど。

傷だらけの頃はかわいそうな子で、三人家族になつてからは、不憫な子。まったく、面倒だ。

だけど、今現在の問題は、そんなことじゃない。

「あつそうだ、ねえねえ、歸りに牛乳買ってきてくれない」

まだ台所のテーブルについてパンをモグモグしながら、母さんが言った。娘とおそろいの肩までの髪が、一部寝癖で曲がっている。

「いいけど、何本」

「三本。よかつたわあ、俊也とっやが男の子で。母さんや真理まりだつたら袋が破れちゃう」

袋の強度に性別は関係ないし、マリはまだ小学校に上がったばかりの歳だ。そんなにもって歸らせること自体が過酷だ。

そう思ったけど、嬉しそうに笑ってるから、言わなかった。

「えつと、あとね、卵もお願い、たまご」

「わかつた」

「あとは、えーっと、何かあつたかしら」

三十秒後、ネギが追加された。この時点で、遅刻へのカウントダウン

ンが始まる。

そんな想いとは裏腹に、かあさんは冷蔵庫を開けて中身を入念に調べたす。

「あら何これ、いやだ、賞味期限一昨日じゃない。だれ、このクッキー入れたの。母さん買った覚えはないわよ」

「先週入れてたよ、職場でもらったって」

そう指摘すると、少しの間首を傾げた後、納得して一人で何度も頷いた。

「そうそう、鈴木さんに頂いたんだわ。悪いことしちゃった」

「二日ぐらい大丈夫だって。死にはしないから」

「そうねえ。じゃあ母さんと俊也で分けちゃおうか。真理に食べさせちゃだめよ。お腹こわすかもしれないから」

返事が出来ないでいると、

「うそうそ、冗談だってば、ごめんね。母さんがなんとかしとく」
振り返って笑うと、またそれを冷蔵庫にしまった。

おれが突っ立っている間に、頼まれるものの量は増えていく。

「母さん」

「はい、なに」

到底覚えきれない量に達し、電話の横にあるメモ帳に箇条書きにしながらの返事が来る。

「今五百円しかないんだけど」正確に言えば、五百二十六円。三日前にも牛乳は三本買ってきたはずなのに、あれはどこで消費されたんだろう。

「千円渡しとくから。大切にしなさいよ」

大切なものにも、千五百円で足りるかどうか自体微妙だ。毎度の緊張の為、暗算だけは得意になってしまった。別に自慢できるほどじゃないけど。

やっと部屋を出た頃には、始業時間まで残り十分を切ってしまっていた。走っても間に合わないから、どうせなら堂々と遅刻しよう。というわけで、いつものペースで歩いて学校に行く。

水曜はだいたいこんな感じだ。特別に遅出の日だから、母さんはいつも以上にテンションが高い。時計も見ない。嬉しそうだから、つい、時間がないなんて言えなくなる。

さて、今日は何て言い訳しようか。軽く車に轢かれました、信憑性ないな。ペットが危篤で、なんて嘔泣きできる演技力はないし、あの亀は三年前にこの世を去った。

考えているうちに、正門前についてしまっていた。

もう少し遠かったらいいのに、なんて都合のいいことを考えた。

2 工事現場のゆうれい

ノートはあまりとっていない。気が向けば書いてみる。そんな感じ。

そんな不良生徒をどうにかして改善しようと、新任の若い数学の女教師は躍起になっている。呼び出しも先週くらった。それでも、おれ自身全く黒板に興味がもてない。堪えきれずにあくびをする目ざとく睨まれた。

受験勉強なんてものを頑張ってる同級生には悪いから、教室の隅でひっそりと窓の外を眺める。廊下を通した窓越しに、名前も知らない鳥が飛んでいるのが見えた。

「なあ、なあなあトシ。さっき職員室前通ったらさあ、聞いちまったのよ」

「なにが」

「岡田がさあ、めっちゃキレてたぜ、シーサーに、お前のこと。なんですかあの子、進学する気あるんですかって」

後半は、器用に数学教師の声の裏返し方まで真似してみせた。トシというのは、おれのことだ。

「だって、する気ねえもん」

「だよな、な、ばっかじゃねえの。自分のものさしで計ってばっかだから人気でねえんだよ」

そう、山本海は小難しいことを言い、笑った。

名字はありふれたもののなに、名前は海とやたらギャップがある。大学生の兄貴は純之助というらしい。親のセンスとは、こうも変わるものなんだろうか。

そんな山本は、世界で唯一、おれをトシと呼び続けている。ただ、小学校低学年からの友人は彼しか残っていないというだけ。腐れ縁とかいうやつ。どうやら、おれと山本の縁は、卵よりも腐りにくく出来てしまったらしい。

「シーサーかわいそうに、は、はあなんて言ってるの。担任で面倒だよな。おれ絶対したくねえな」

「山本がしたら学級崩壊だろ」

「なんだよ、オレ、悲しくなるじゃんか。んでもけんかぐらいはするぜ、対等って大事だからな。あ、でもお前みたいなんはやんねえよ。後味悪すぎる。にしても、この席いいよな。オレなんか真ん中だからよ、目に付いてたまんねえよ」

ひと息で言っと、勝手に陣取った前の席から身をのりだし、声をぐつと潜めた。眉間にしわを寄せている。

「けんかつたらさ、トシ最近してんのかよ」

「最近っていつだよ」

「先週だよ、水曜」

「いや」

「だろ、斉藤さんキレてたらしいぜ。トシヤの野郎、最近生意気だつて」

まるで自分が言われた言葉であるかのように、山本は難しい顔をした。

「どーすんだよ」

「どうするっても、おれ、ケンカはせめて月一でしかないって決めるし」

「ばか、大掃除じゃねえんだよ」

そうは言っても、数年前のピークには三日に一度殴り合っていたおれにしては、随分な快拳だ。だけど、山本はそう思わないらしい。

「謝つといた方がいい、絶対」

「なんで謝んだよ、おれ、別に仲間になった覚えはないのに」

「んなこといつても、いつかやられるぜ。三組の伊藤、腕にギプスしてるだろ、あれ、斉藤さんに言われたやつが階段で突き落としたんだ」

それは聞いたことがある。本人は自分で滑ったなんて言うけど、みんな分かってる。あれは嘘だ。

「でも伊藤は、おれとは立場違うだろ」

「だからだよ。あいつは金持ってこなかっただけで骨折だぜ。お前なら、直々に三本ぐらいやられんじゃねえの」

溜め息と呻り声を同時に出しながら、おれは閉め切った右側の窓にもたれかかった。

現在高二の斉藤とは、小学生時代に、気に食わなかった相手と同じだっただけ。他には何の縁も未練もない。だけど向こうは、そう思っていないらしい。

めんどい。本当に面倒なことになった。

「トシも強情だなあ。一回頭下げてこいって」

「そうやってへいこらして、ずるずる引きずってくんだぜ」

それだけは嫌だ。理由もなく、ただ強いものへのご機嫌取りなんてもう勘弁してほしい。ケンカだって、相手と敵対するはつきりした何かがあればまだしも、見えないナワバリ争いだなんて、ただ痛いだけだ。

おれが全然緊張感を示さないので、「好きにしろよ」という風に、山本はそっぽを向いた。だけど、そうそう沈黙に耐えられる性格ではないのだ。

「なあ、幽霊って信じるか」

どことなく神妙な顔で切り出した。この考えの切り替えの良さに、おれは密かに感心していたりもしていた。

「出るんだってよ」

「何が」

「聞けよ、お化けだよ、ゆうれい」

周囲の真面目な生徒が明らかに蔑んだ目で見てくるが、気にしないことにした。

「二丁目とこ、工事現場あるだろ、やたらだだっ広くて鉄骨だけがあるやつ。あそこだよ」

それは分かる。登下校の際、一日二回も前を通っている。いかにも予算不足で工事が中止されてしまったような、骨組みだけの建造

物がある場所だ。今は野良猫も住み着かない、さびれた風景になっている。

「そこで工事に巻き込まれて死んだ人がいるって」

それで化けて出るなら、世の中お化けだらけだ。

「出るって、どんなんだよ」

「なんか、夜中に奥の方が光って見えたとか、足跡がついてるとか」「だれかいたんだろ」

「誰が行くんだよそんなところ」

「知らねえけど、警備とか、巡回とか」

「大変だなあ、そういうシゴトも」

呆れた様子で言うのに、あいまいに頷いた。

「信じるよ。信憑性ねえけど」

「幽霊なんていない」

「そう言うと思った。やだね、現実主義者って」

山本は、露骨に顔をしかめる。

「そういうのは、気の迷いだ」

「つまんねーの。夢がねえなあ」

おれは、山本に嘘をついた。

そうか、あれは、あそこで死んだ幽霊だったのか。

おれは、山本の言うそれを見たことがある。光とかじゃないけど、大分前から、何年も見続けている。でも、あれはおれにしか見えな
いんだ。だから、言わなかった。

夕陽の赤い光を受けるそこは、どことなく不気味で寂しげだ。

高い塀に囲まれているけど、大型トラックが出入りできるほどの
入り口があり、そこから中の様子がよく見える。立ち入り禁止の張
り紙とロープが張ってあるが、ここの子どもは、一度はこれを見
る。

骨組みだけの建物は、なにか巨大な生物の死骸のようで、近付き

難かった。外の音が遮断されて、やけに静かだった。夏休みの頃でも、セミの音も止んで、冷たい風が鉄骨の間から吹きつけてきて、誰からともなく、外に出たのを覚えている。

やけに重い鞆をかけなおす。先程、六リットル以上の重みが加えられたそれが、肩に食い込んでくる。

夕陽に焼かれる錆の浮いた骨を、久しぶりにまともに見た。

あの頃と変わらず、世界と隔絶されたそれは、ひっそりと佇んでいた。

入り口の前を横切る。背を向けた方向に、かすかな気配が生まれる。何がいるか知っているから、普段は振り向かない。だけど今日は、山本の話进行い出し、足を止めて振り返ってみた。

やっぱり、黒い影がロープの前に立って、じっとこっちを見ていた。

おれの視力は悪くない。だから、これぐらいの距離なら、相手の表情は把握できるはず。だけどその顔だけは、いつも、どんなに目をこらしても、はつきりしない。

陽炎のように曖昧で、煙のように判然としない。ただ、あるかないかよく分からない目が、じっとこっちを見ている。それだけは、はつきりと分かる。

背格好から、六、七歳ぐらいの女の子。黒い髪がばさりと伸びているから、多分そうだ。ワンピースのような服から伸びる細い足は、素足。ただ、全てが黒い影。風が吹けばぶれてしまいそうに、はない。

そしていつも、気が付けば消えてしまっている。

何が言いたいのか、分からない。何故おれの前に出てくるのかも、分からない。

影の消えた場所に背を向け、また歩き出した。

3 やくそく

ドラえもんが見たい。

週末の夜、夕飯が終わって暇つぶしの天気予報を見ると、マリが言い出した。

夕飯は三分の一の確率で、母さんが冷蔵してくれている。今日は、運良くその三分の一に当たっていた。五時半から食い始めれば、七時前には片づけやらなんやら全部終わって、早くも眠くなってきた。七つ年下の妹はまだピンピンしているのに。

「兄ちゃん寝ないでよ、はじまっちゃうよ」

突っ伏していると、向かいの席から髪を引っ張られ、眠いながらも頭を上げた。黒目がちな、澄んだ瞳に、電話台の頂上に乗ったテレビからの光が映っている。七年前でも、おれはこんな目をしてなかっただろうな、とつくづく思う。

マリが身を乗り出して見ている画面を振り向いた。鮮やかなアニメの色調も、ありえない夢のような内容も、おれにとってはどこかよそよそしい。つまらない現実主義者って、ほんとにつまらない。

そもそも、おれがかつて慣れ親しんでいた猫型ロボットは、こんなかん高い声はしていなかったのに。でも、こんなのドラえもんじゃないなんて言うと、マリは「そんなことないもん」なんて怒る。

それでもおれが突っぱねると、泣いてしまった。先週のことだ。だから、黙って視聴者の一人になる。

「ねえねえ、なんの道具がほしい」

ネコではなくイヌが人語を操るCMになると、マリが振り向いた。肩までの、茶色がかった柔らかな髪が、さらりとゆれた。

「んー……。道具ねえ」

「うんうん」

頬杖をつくおれの向こうで、大きく頷く。

「ポケット」

「えー、ちがうよ。ぽけつとからぽけつとは出てこないもん」

「じゃあスぺアポケット」

「ちーがーう」

「あれポケットから出てくるだろ」

正直、道具なんて殆ど覚えてない。見る片っ端から忘れていく。

「そうじゃないのに」と、頬を膨らませてそっぽを向いてしまった。丁度、CMが終わった。

やがて、名残惜しそうに次回予告を見ているマリに、

「じゃあ、マリは何がほしい」

そう聞いてみた。

唇を噛んで、かなり真剣に悩んでいる。うーとか言いながら首を傾げる。一分ほどして、にっこり笑った。

「ドラえもん」

一枚上手がいた。未来の子守用ロボットまでつけてきやがった。

「ちがうだろ、ドラえもん、道具じゃないだろ」

「え、ネコがたロボットなんだよ」小首を傾げて言い聞かせてくる。いいのか。あんなに好きなドラえもんを、道具と同列にしているのか。ポケット未満じゃねえか。

「さつき、道具って言ってただろ。ポケットからは出さないだろ」

どういうわけか躍起になって説得すると、目を見開いて口元を押さえた。「ああ」と、しまったというような声を上げる。さすがおれの妹、母さんの娘。本質が適当だ。

「でもかわいもん」

意味不明な理屈をつけて、無邪気に笑った。責めたくなんてないから、おれは反論しないことにした。

「兄ちゃん、ドラえもんつくって」

ふと、彼女はそんなことを言い出した。

「ほかの人に頼めよ」

「やだ。兄ちゃんがいい」

「おれ頭悪いから無理」

投げやりに答えると、マリは膝立ちになって訴える。

「だいじょうぶだよ。悪くないもん」

むきになってフォローする。おれは苦笑する。

「だめだよ。だめなんだよ、そんなこと言っちゃ」

「分かった、分かったって」

そう諫めながらも、やたら嬉しかった。だから、こんな台詞が言えたんだと思う。

「つくってやるよ、な」

「え、ほんとに」大きな目を見開いて、何度も瞬きをする。

こうしておれは、いつかドラえもんをつくらなければならなくなつた。

マリは笑った。とても楽しそうに、全身で笑顔をつくった。ドラえもんが好きな、優しい子だった。

4 斉藤

翌日、あたたかい春の午後の昼下がりに。かの「斉藤さん」が、直々に中学までいらっしやった。おれのクラスの下駄箱前で止まっているから、きつと清々しい母校訪問ではないのだろう。この暇人め。「久しぶりだなあ、トシヤ」

にやにやしながらおれを見下ろす。「どうも」と目を合わせずに呟いた。最悪だ。帰る途中だから、逃げ場はない。

「なんすか」仕方なく上目遣いに見上げた。斉藤は、年の割にも長身だ。だから目を見るには顔をまともに上げなければならぬのだが、それも嫌だった。今のおれは、たいへんに生意気だろう。

「お前、最近付き合い悪くねえか。全然元気してんじゃねえか、なあ」

徐々に、取り巻きが二つに分かれてくる。周囲には、斉藤の傘下の人間。離れたところでは、その他多数がちらちらと様子を窺っている。何もしないから何もしないでという人間だ。

そういう側は、どうでもいい。手を出してはこないんだから。腹が立つのは、この、媚びへつらう周囲の奴ら。一人じゃ何も出来ないくせに、群れるとやたら吠え出す。こいつらも無視していればいいんだけど、どうやらおれも、この中の一人だと見られていたらしい。改めて考えると、無性に腹が立つ。

「もしや、お勉強かあ。んなわけないよな。おまえんち、かわいそうだもんな」

間延びした声が、肌にとわりつく。気持ち悪い。

突発的に殴りたくなったのを、必死で抑えた。こいつは、おれの弱点を知っている。今手を出せば、相手の思う壺だ。

「なあ松川。いや、今は南か。はっ、悪いな、忘れちゃったよ」

笑われる。おれ個人に嫌みを言われてもどうということはないけど、家のことまで馬鹿にされているようで、気付かれないように奥歯を

噛み締めた。普段は名前で呼ぶくせに、ふざけんなよ。

「何か用すか」

「おいおい、分かってんだろ。そこまで馬鹿だとは思ってなかったんだけどなあ」

まとわりつくへびを思わせる声。斉藤の手が右肩に触れる。意外にも、女のように細くて長い指。よつぽど振り払ってぶん殴ってやろうかと思った。

「おれ、帰るんで」

代わりに、全力で睨む。

「ケンカならよそでやっててください。学校訪問なら、さつさとした方がいいですよ」

「言うようになっただじゃねえか」

声のトーンが落ちる。手に若干の力が入る。

「よつぽど痛い目見たいんだな、お前」

「単に縁を切りただけです」

「今更何言ってんだ、てめえ。今まで散々やらかしてきただろうが」
「あんたの仲間になっただ覚えはない」

周囲にさざ波が立った。呼び捨てどころか、あんななんて言ったのは、おれが初めてなんだろう。だけど、はつきり言っておかないと、引き摺り続けることになる。斉藤に従っていくなんて、考えただけで身震いがする。嫌すぎて。

「一度ゆっくり話し合おうぜ、トシヤ」冷静さを貫けず、こめかみが引きつっている。おれは多分、我慢できてる。

無意識の内に緊張していたらしく、手を離されて少ししてから、肩が痛んできた。

靴をコンクリートに叩きつけてから履き、一人で帰りながら斉藤の言ったことを思い出す。話し合いつて言うのは、座って落ち着いてするもんだ。決して、人気のない工事現場でやるもんじゃない。

馬鹿野郎。

信号を待ちながら、ふと視線を横へ向けた。

人の流れの中、いつもの影が、ひっそり佇んでこつちを見ていた。
見てんじゃねえよと内心で暴言を吐く。何度目かに瞬きをしたときには、その姿はどこにもなくなっていた。

5 母さんのこと

「来年学校行きたい？」

麦茶が入るところを間違え、肺に紛れようとしている。床を向いて必死で咳き込んだ。

「あら、喘息かしら。大丈夫」

残念ながら、喘息とは全く縁がない。答えられないから、左手を突き出して、待つてくれと示した。

「兄ちゃん、お咳が止まらないんだって」

元純白、現在灰色に染まりかけているアザラシのぬいぐるみを抱えて隣に座っているマリーに、母さんが説明している。誰だよ、止まらなくしたのは。マリーは、自分の代わりに、アザラシをこくこくと頷かせている。両側を小さな手に握られ、しわが伸びているぬいぐるみの顔は、困っているようにも見えた。

しまった。今日は母さんもテーブルについていたんだ。普通の親の何倍もの頻度で、予想外のことを平気で言う。油断してた。

そういえば、去年の今ごろも同じようなことをした。あれは朝だったけど。

「名字変えちゃおうか」

その一言で吹き出しかけた。いや、実際五分の一ほど牛乳を吹いて流しで出し切った。

「あらあら、大丈夫」少しして、笑顔で言った。「まだ制服じゃなくて良かったね」

それも問題だけど、もっと重要な事があると思う。言いたいことはいろいろあった。

「いいの、親父の痕跡なくして」

かろうじてそれだけ言つと、

「過ぎたことは流しちゃおう。いいのいいの、それでもきれいさっぱり忘れることなんて、できやしないんだから」

笑って手を振った。母さんの人生観、そのままだ。

その日一日学校で怒られるたび。もう何を言われたのかは覚えてないけど、松川という単語を、母さんの旧姓である南に変えて聞いていた。みなみ。南俊也。すっげー違和感。気付けば、先生のこめかみに筋が浮いていた。

その前の年は、夜。電話での第一声。

「事故っちゃった」

あはは、なんてつきそうな明るい声に、持っていたコップをそのまま床に落とした。プラスチック製だったから割れはしなかったけど、中身の麦茶が全てぶちまけられ、おまけに口の内側を思い切り噛んだ。口の中が切れまくっていたときだったから、すごく痛かった。どうしておれが何かを飲んでいるときに限って、おかしいことを言い出すんだらう。

「じ、事故ったって、なんで」

「えーっと、何でだらう。ちょっと誰かに聞いて……あつ、警察だ。あれ、違う、駅の人かな」

「それで、母さん怪我ないの、他の人とか、っていうか、そこどこ」
「どこって、駅よ、駅」

どうやら、線路の踏み切りで車が立ち往生するという事故が起き、その影響で電車の到着が遅れてしまう、という、つまりそんな用件だった。車中の人は咄嗟に外へ逃げ出し、怪我人は出なかったらしい。

「母さん、車じゃないんだから、事故なんて起こせないわよ」

どういうわけか笑われていると、反対の耳に、「にいちゃん！」というマリの大声が飛び込んできた。

「にいちゃん、くも！ おっきいくもさんがいるー！」

彼女は、小指サイズ以上のおっきい蜘蛛は苦手だ。

「ちよっと待って、今電話中」

「俊也、すぐには帰れないみたいだから、よろしくね。あ、そうそう、今日って何曜日だったけ」

「へ、きょう、今日は木曜……」

「うごいた！ いやあ、こっちきたあ！」

母さんとの通話を終わらせて、蜘蛛を追い払ってやって、麦茶の零れた床を片付けないといけない。ちよつと安心したせいで、嚙んだ口が非常に痛くなってきた。一瞬だけ、全部どうでもよくなった。

更にその前は、珍しいパターン。

「としやつ、ちよつと来て！ あー、どうしよう」

その時は足のアザが痛くて痛くて歩きたくなかったけど、滅多にない焦った声に、足を引き摺りながら急いで側に行った。

「牡羊座十二位だって、どうしよう、見なきゃよかった」

星座占いのテレビ画面を見た途端、おれはテーブルの脚につまずいてイスにぶつかって派手に転倒した。十三位あたりに、夏生まれの獅子座があったかもしれない。

「うわあ、大丈夫、痛かったでしょ」

動く気力すら失くしていると、母さんが慌てて抱き起こした。

「痛かったね、頭とかうつてない、大丈夫、よかった。足、そっか、昨日痛かったね。ごめんね。ひどくなってるから、湿布、しとこつか。湿布はしみないから、痛くないよ。ごめんね。……ほんとにごめんね、俊也」

おれはずっと目を閉じて、気絶したふりをしていたから、そのとき母さんがどんな顔をしていたのかは分からない。頬に触れてくれた手が暖かくて、ただ、親父が恨めしかった。自分のしたことを母さんに謝らせるバカ親父が、ただただ嫌でたまらなかった。

母さんはいつもそんだから、おれは怒れない。いや、怒りたくない。天然さもひっくりくるめて、悪気はないんだって、知ってるからわざわざ笑顔を失わせることだけは、したくなかった。

だから、言うてはいけない。来年は諦めると、散々説得したのは誰かなんて、本気で聞いてはいけない。

そういうわけで、出来るだけ穏便に訊ねる。まだ喉もとの調子がおかしい。

「ごめん、無理みたいって、言ってなかったっけ」

「言った言った」

「無理しなくていいよ。マリもいるし」

呼ばれたと思ったのか、

「らあちゃんもいるよ」

向かいの彼女は、わけもわからずに、手元のぬいぐるみをかかげた。悪いが、そのアザラシは進学しない。

「だねえ。らあちゃんもいるねえ」

母さんが、マリの頭の片側をなでる。反対側には、髪に青いリボンが結んであるからだ。嬉しそうに笑いながら、抱えたアザラシに顔を埋めている。

「無理ならわざわざ言いません。よくよく考えたら、可能性がなきにしもあらずってことなの」

「いや、微妙すぎ」

「俊也、イチとゼロの差は大きいのよ」なにやら意味深なことを言う。

「いいよ、おれはゼロで。マリにイチ残しといてよ」

「言うねえ、お兄ちゃん。でもね、もらえるものはもらっといた方がいいんだから」

あははと楽しそうに笑う。いいのか、こんなに軽くて。

「それに、兄妹なのに不公平でしょ」

「おれ、男だからどうにでもなるし」

「そんなこと言わない言わない」

笑いながら片手を軽く振る。その横の妹が、子どもらしく輝いた瞳で見上げた。

「マリ、イチもらえるの」

すぐさま、「らあちゃんも？」と付け足す。

「マリ、そのアザラシは関係ないから」

「いっしょだもん。かんけいあるもん」

「そいつ、学校行かないだろ」

きよとんとして見返す。お菓子か何かをもらえると勘違いしたんだろう。

「らあちゃんもおべんきょう、したいって」

忘れてた。マリは、母さんの娘で、おれの妹だった。

「うそつけ」

「うそじゃないもん」

口をとがらせながら、耳をアザラシの口元に近づけた。ふんふんと何度が頷いている。

ドラえもんが好きな、瞳の澄んだ子どもだ。きっと、布と綿の塊とでも会話が出来るんだろう。

「行きたいって」

「うそ」

「うそじゃないの、ほんとなの」

「口動いてなかったじゃなか」

「分かるもん。マリ、らあちゃん好きだもん」

大好きなら、言葉はいらないらしい。なんてきれいな台詞。おれなら、例え脳が溶けても思いつけない。

「ねー、らあちゃん」

こくこくと、ぬいぐるみが頷かされている。触りすぎて、元の白の部分が殆ど残されていない。

「それ、大分汚れてきたな」

「えー、そうかな」

「洗ったほうがいいよ」

マリは、目を見開いて、ビーズでできた黒い目と目を合わせた。慌てて、その胸を抱きしめる。腕につぶされて、情けなく二つに折れてしまう。

「やだよ、かわいそうだよ」きっと、洗濯機で回されるらあちゃんが浮かんだんだろう。

「だって、けっこう黒いだろ」

「黒くないよお、兄ちゃんのばかあ」泣きそうな声を出す。

「もう白いとこないじゃんか」

「あるよ、おしっぱ、白いもん」

「しっぱだけ」

「ばかあ、にいちやんのばかあ」

咄嗟に、手元にあるものを投げつけてきた。

「って、らあちゃん投げてどうすんだよ」

ちよつと前に、大好きなんて言ってたのに。

「兄ちゃん、大人げないねえ」

目を潤ませるマリの背中を撫でながら、母さんがなだめている。抱き寄せると、マリはそのまま、母親の膝に座った。

どうしようもなくなって、おれは受け止めたぬいぐるみを見下ろす。まくらサイズ。子どもが抱きしめるには丁度いい大きさ。だけど、本当にまくらにしようとする、つぶれてかわいそうだと全力で怒られる。

黒い豆粒のような目が、おれを見返してきた。そのアザラシは、いつもと同じ人懐こい表情をしていた。

6 彼女のこだわり

決闘すると、罰金を払わなければならない。

と、山本に聞いた。世間一般に無駄知識と呼ばれる情報で、やつの脳の半分は満たされている。円周率五十桁だとか、自慢げに暗唱されても、正しいんだかどうか分かったもんじゃない。

決闘の罰金は最高二百円だそうだ。きつと、タイマンにも適用される。ああ、ばからしい。

そして、ナメクジに塩かけると死ぬんだぜ、なんて言われた。知っていると答えると、やけに驚いていた。割と有名だと思うんだけど、どうやら山本は昨日兄貴に聞いて知ったばかりらしい。ただ、その原理を聞くと、やけに残酷だった。試さなくてよかった。

今日覚えたことはそれだけ。何のためにここまで毎日通ってたんだか分からない。無駄知識を欲することは、人間の本質だというけど、ああむなしい。おれはいいけど、山本はこれから大丈夫なんだろう。か。なんて、真面目に自習するやつらを横目で見ながら、つい思ったりもする。

おれはこの頃、団地に住んでいた。五階まで、毎日階段を上り下りする。エレベーターは何となく息苦しくて、使わない。

いつも首から紐でぶら下げている鍵でドアを開けると、唯一の廊下が真っ直ぐのびて、壁で突き当たっている。入ってすぐ左手に洗面台やらなんやら。もう少しくくと右手に台所、左手に、今はあまり使わない部屋。奥までいって突き当たった右手、四畳半の畳の部屋、押入れがある。そして左手、つまり、廊下を挟んだ向かいに、もうひとつの畳部屋。

かつては親父が使っていたけど、今はおれが受け継いだ。中身はあまり変わっていない。今でも、何が入ってるか知らないものがあるし、別に興味もない。

ただ、万年床は嫌だった。習慣を真似ると、血の繋がりを再確認

してしまうからだ。だから、おれは毎晩、向かいの四畳半の押入れから布団を引き摺ってくる。らしくないと笑われるけど、もうこっちがおれの習慣になってしまった。

ずるずると、毛布を引つ張る。この部屋では母さんとマリが寝るから、二人が布団をしく前にしておかないと、ほんの少し面倒になる。ずるずるやりながら、開いたままの窓から外を眺めた。夜空の真下に、星のような街の中心。もう夜なのに。あの光の中には、どれくらいの人がいるんだろう。

急に、毛布が重くなった。

「ひっぱってー」

毛布に飛び乗ったマリがせがむ。

「重いつて」

重くなんてない。七歳児にしても小柄な彼女の身体は、軽い。重いなんて言いながらも引つ張ると、きやあきやあ言つて喜んだ。毛布と共に引き摺られながら、本当に楽しそうに笑っていた。

その後に敷かれた自分の布団にちょこんと座ったマリは、隣の母さんの寝床に座っているおれに、片手を突き出した。

「むすんでー」

その手には、青いリボンが握られている。

「もう風呂入るだろ。すぐ外すじゃんか」

「いいの、おねがい」

断る理由もないので、それを受け取ると、妹はいそいそと横を向いた。先天的に茶色がかった柔らかい髪をひとふさつまみ、その付け根にリボンを一周させる。

「明日はこれで学校行くか」

「えー、いやだよ」

「なんで」

「恥ずかしいもん」

どういうわけか、家では喜んで結ぶくせに、外に出ると外してしまう。これぐらいの子どもなら、そう恥ずかしいことではないと思う

けど。こだわりのあるんだろうか。

「よし、できた」

無事に結び終え、手を離す。さらっとした髪が、一部だけぴよこんと飛び出している。影で見たらおもしろそうだ。

「ありがとう」

満面の笑みで、立ち上がって飛び跳ねる。身体とワントンポずれて、飛び出した髪とリボンが揺れる。その感触が楽しいらしい。

マリが、飛び跳ねるのを止めた。玄関の鍵が開く音が、おれにも聞こえてくる。と、小さな身体が、襦の無い四畳半からとび出た。本来の仕切りは、数年前にとある事情で外れて以来、「これはこれでいいかもね」の一言と共に、戻されなくなっている。

「おかあさんおかえりおかえり」

「ただいま。ごめんね、遅くなって」

見なくても分かる。今は、マリが抱きつき、母さんが抱きしめているんだ。

「あれ、このリボン、お兄ちゃんに結んでもらったの」

「そうだよ」

「そっか、よかったねえ」

えへへと笑う声が聞こえた。おれは、畳をはって、「おかえり」と廊下に半身を投げ出す。冷たくて気持ちがいい。しきりがいいから、やりやすい。

「ただいま」と返して、こっちを見て笑いながら、母さんは靴を脱ぎだす。マリの嬉しそうな笑い声が響き、小さな裸足が立てる振動が、廊下の床を伝わってきた。

また、母さんが予測不可能なことを言い出した。

「お花見に行こう」

自分の布団に座り、にこにこしている。

マリの布団の上に移ったおれは、数秒間考えた。今はもう四月下旬、桜の花なんか、全然残っていない。別の花のことを言っている

んだろうか。

アザラシのぬいぐるみ、通称らあちゃん、おれの背中をぐいぐい押していたマリも、その手を止める。あぐらをかいたおれの横にアザラシを抱いたままうつ伏せになり、不思議そうに母親を見上げた。

「なに、ふたりとも、ぼーっとして」

いやねえ、もう、なんて笑っている。

「桜はもう散ってるよ」

「さくらね、緑になっちゃったよ」

ほら、小学一年生でも知っている。

「あまいな、お花見って、花を見ることですよ。桜じゃなくてもいいじゃない」

「じゃあなに」

「仕事に行く途中にね、タンポポの綿毛がいつぱいあるところがあるの。小学校と反対の方の公園なんだけどね」

「花じゃねえじゃん」

思わず声を荒げたおれを見ておかしそうに笑いながら、母さんはそのまま横へ倒れた。丁度枕に頭が乗って、いつでも寝られる体勢だ。仕事前のスーツなのに、いいんだろうか。

「俊也は細かいこと気にするなあ。誰に似ちゃったんだろう」
自分が花だって言ったくせに。

考えを見透かされたようで腑に落ちない顔をする息子を見ながら、一層楽しそうだ。それはいいんだけど。でも、綿毛なんか見て、喜ぶやついるんだろうか。

「おかあさん、マリね、タンポポ、ふーふーしてもいい？」
いた。すぐ横にいた。ふーふーしたがつてるやつがいた。

「いいわよ」と返されて、マリは「やったあ」と歓声を上げた。
起き上がって、アザラシごと横からもたれかかってくる。

「兄ちゃんもいこう。お花見だよ、ねえねえ、行こうよう」

背中を軽く叩きながら返事をする、嬉しそうな声を上げて横腹に

頭をぐりぐりしてくる。と、今度は布団の足元の方にたたんである掛け布団に飛び込んだ。少しふくれていたそれから、空気の抜ける音がする。

おれも、枕側に倒れ込んだ。まともに寝るとマリを蹴飛ばす位置になるので、足を畳にはみ出させる。眩しい天井から目を反らし、明るい声を聞きながら目を閉じた。窓から涼しい空気が流れてきた。

7 砂のトンネルで

次の日曜は、びっくりするほど、よく晴れていた。おれに改まって空を見上げる習慣がないからかもしれないけど。

その花壇は、公園と道路を隔てている高い金網の付け根にあった。少し離れたところに、ブランコやすべり台といったお決まりの遊具が並び、さすが日曜、親子連れで溢れかえっている。だけど、こんな隅にわざわざやってくる人はいない。比較的静かで、側に植わっている木が、五月中旬並だとかいう日差しを遮っている。

小さなシートに母さんと座ったマリは、小さな両手におにぎりを抱えて、一心に食べている。

「俊也もおいでよ」

母さんにそう言われたけど、おれは「狭くなるから」なんて、側のベンチに座ったままでいた。脇の花壇で、メインの花の横でゆれるタンポポを見ながら、弁当の卵焼きを食べていると、横にマリが上がってきた。

身を乗り出して、綿毛だけになったタンポポを一つ握る。

「ふーふーしていい？」

母親を振り返り、大きく息を吸った。

白い綿毛が流れていく。ふわふわ漂っていく。

マリは、すごおいななんて笑うと、ベンチから降り、更に何本か取ってきた。

「こっちお母さんで、こっち兄ちゃんの」

一本ずつ、おれと母さんに手渡す。

「俊也、ふーふーしなさいよ」

「しなさいよ」

母さんに並んで、茎をかかげながら言う。吹くしかないじゃんか、とおれは横を向いた。綺麗な丸型をしていた綿毛が、息を吹きかけるたびに崩れ、代わりに小さな種が運ばれていく。母さんとマリが

飛ばしたものと混ざって、光の中へ紛れ、すぐに見えなくなっていく。

あれが来年、この公園のどこかで咲くんだな。タンポポ中心の花壇なんかは、あまり聞かない。道路の隅や、このように、主要な植物の側で雑草としてあったり。だからこれもきつと、次の春には、どこかでひっそり咲いているんだろう。そして、マリみたいな子どもに、更に遠くに運ばれていくんだろう。なんとなく、そんなことを思った。

マリは、滅茶苦茶はしゃいでいた。そこら中を走り回って綿毛を飛ばし、石につまずいてすっ転び、向こうのベンチに繋がれている犬に触ろうとする。木に登ろうとしたとき、「落ち着きなさい」と、流石に母さんに叱られていた。

しかしすぐに、向こうの鳩の元に忍び寄ろうとしている。

「子どもは元気ねえ」

しみじみと、母さんが漏らした。

「うん」

「一緒に走ってきなさいよ」

「おれ子どもじゃねえもん」

「何言ってるの。十四なんて充分子どもじゃない」
振り向いて笑う。

じりじりするのに我慢できず、駆け出したマリの周囲で鳩が飛び去っていくのを見ながら、おれと母さんは話した。どうでもいい、なんでもないようなことだったけど、母さんは凄く嬉しそうで、おれも長いこと喋った。

笑い声を上げる母さんの背に、「どーん」とマリが跳び付く。

「ねえねえ、お砂場行こう」

目を輝かせる彼女の水色のワンピースにくっついて綿毛を、母さんが払ってやっている。

「お母さんね、お片づけしたら行くからね」

「うん。兄ちゃん、行こう」

「えー、おれも」

「行こーよ、一人じゃつまないもん」

気乗りせずにぐずぐずするおれの袖を引っ張りながら、早く早くとマリが急かす。この無邪気な笑顔をむやみに突っぱねる真似は、一般的にかなり難しく、結局は重い腰を上げた。

砂場には、結構な数の親子連れがいて、一人当たりの面積が異常に狭い。それでも、隅の段差におれが座ると、マリは早速手で穴を掘り出した。

「なんで穴つくるんだよ」

「なんとなく」

えへへと彼女は笑い、おれも参加することになった。彼女の二かきがおれの一かきに相当する。

「ずっと掘ったら、反対側にいけるかなあ」

「反対側ってなんの」

「ちきゅうの反対だよ」

ああ、何て子どもらしい発想。丸い地球を貫通する穴。しかも、子どもが素手で掘った。そういえば、昔そんな絵本が、小学校にあった気がする。

「無理だよ」

「なんでー」

「砂場の下はコンクリートだから。その上に砂乗せてんだぜ」
残酷に真実を告げると、妹は首を傾げる。

「コンクリートもほったら」

「すげえ発想。おまえどんな手してんだよ。」

「無理だって」

「もしもだよ」

「地球の真ん中にはマグマがあるんだって」

「まぐまって、あのどーんってするやつ？」

「どーんって。火山のことか。」

「そう」

「ここからどーんってなるの」
「そうそう」

面倒がるななんて怒らないでほしい。

「熱いね、危ないね」

なんて危険なことをしてるんだろっ、そんな顔をしたマリが、穴をのぞいて、あっと声を上げた。

「兄ちゃん兄ちゃん、きらってしたよ」

「きらって、何だよ」

「あっち光ったよ」

指差された底に、おれは半信半疑で腕を突っ込む。適当に引っ掻き回して、気のせいだと返事しようとした。すでに穴の深さは五十センチほどにまで達していて、脇腹をふちに押し付けるのが、かなり苦しいのだ。だけど、中指に何か硬い物が触れた感じが残る。

なんとか引っ張り出し、陽の元で見た。

「化石だあ」

「ビー玉だろ」

青色の小さなガラス玉。地面から掘り出されたものは、彼女には何でも化石に見えるらしい。

「おかあさん、ビー玉の化石」

「だから化石じゃないっての」

ようやくやって来た母さんは、おれらの台詞と穴とガラス玉を見て状況を悟り、

「すごいね、宝物だあ」

非常に中立的な発言をした。

満足気に、マリは砂場のふちにビー玉的な化石の宝物をそっと置く。次は、掻き出した砂で山をつくりだした。勿論おれも強制参加だ。

「トンネルつくろう」

十秒で出来た山に、五秒ほど横穴を開ける。ぱつぱりと崩れる。

何度か繰り返した結果、砂が柔らかすぎるといふ結論に達した。

すぐさま、マリが拾った空き缶に水を入れて運んでくる。

砂が泥に近付いていく。

山の側面に、小さく穴を開ける。半ば、ヤケになっていた。片手で少しずつ。出来るだけ底へ向けて、横に穴が広がらないように。ふちに入ったヒビには、泥を当てて修復する。

砂の中はひんやりとしている。崩さないように気をつけながら、中につまっている泥を右手で掻き出していく。

「交代しよー」

「うわっ、さわんなって」

泥だらけの小さな手が、服の裾をお構いなしに掴んだ。別に綺麗好きではないけど、泥がべったり付くのは、嬉しくない。

「すこおい」

おれがつくった横穴に腕を突っ込んだマリが感嘆の声を上げた。

「マリ、全然掘れてないじゃんか」

「がんばったんだよ」

彼女の側は、その半分も開いていない。仕方ないか、手もあんなに小さいんだから。

「兄ちゃん」

「なに」

「マリね、いいこと考えた」

「なんだよ」

「ないしょー」

なんだそりゃ。マリは、楽しそうに笑う。

やがて、砂の中で、やわらかいものに触れた。

暗くて狭い穴の中、おれの右手が、向こうからの指先に触れる。

「やったあ」

明るい声。山の向こうで姿は見えない、マリの声。

おれは、マリの右手を握り締めた。しっかりと、握り返してくる、繋いだ小さな手。冷たい砂の中、確かにある、その右手。

マリは、どこから木の枝を拾ってきた。

山のとっぺんにそつとそれを突き刺し、少しずつ奥を目指していく。おれはトンネルの中心にたまっていく砂を掻き出す。やがて、頂上から下りる一つの穴が出来た。

大切に置いておいたビー玉の化石を、その穴から落とす。

マリの考えた、「いいこと」だった。

上からのぞくと、横穴にあるビー玉が見えた。微かに入ってくる光を受けて、青く澄んだそれが光っている。暗い砂山のトンネルで、たったひとつ。それでも確かに、そのガラス玉は、そこで光っていた。

気付くと、おれら兄妹は、ここの誰よりも泥だらけになっていた。荷物を持った母さんの横で、おれはマリを背負って帰り道を歩く。遊び疲れて、すっかり眠り込んでしまった彼女は、全体重をあずけて、穏やかな寝息を立てている。

「ありがとうね。遊んでくれて」

「楽しかったから」

素直に返して振り向くと、母さんはにっこり微笑んだ。

「じゃあ、来年も来よつか。三人で」

おれは、ここでやっと気が付いた。桜やお花見なんていうのは、本当はどうでもよかったんだ。母さんはただ、家族三人で出かけて、親子らしい思い出をつくりたかったんだ。

「うん」

「よかった。真理、来年もお兄ちゃんが遊んでくれるって」

名前に反応したのか、マリが背中中「うーん」と小さな声を出してもぞもぞと動く。だけどすぐに、眠り込んでしまい、目覚めはしなかった。それを見て、母さんが幸せそうに笑った。

マリには、頼るべき母親と兄が必要で、母さんは頼るべき息子と頼られる娘が必要で。おれは、頼るべき母親と頼られる妹が必要で。だから、守る義務があるのだ。何があっても、母さんとマリに辛い思いをさせてはいけない。この笑顔を失わせてはいけない、逆に言

えば、二人が笑ってさえすれば、他のことはどうでもいい。自分勝手に馬鹿な考えだが、どこかで誰かが死のうとしていても、斉藤にぶん殴られるやつがいても、おれが進学できなくても、どうでもよかった。

だから、おれはこのとき、幸せだった。十四年生きた中でも、その先でも、一番幸せだった。山の頂上、最も高い場所。あとは、それより降りるしかないけれど、当時は、そんなこと、考えもしなかった。ただ、こんな生き方が、毎日がずっと続くんだと、信じてやまなかった。それがどれだけ幸せなことなのか、考えることすらせずに。

8 予兆

そいつの第一印象は、「胡散臭い」だった。

どこが、と聞かれてもはつきりとは言えない。なんとなく、雰囲気、だ。

「中三の俊也。それで、この子が真理、今小一よ」

廊下で、母さんがおれと真理を順番に示して紹介する。

仲良くする気なんて毛頭ないし、一秒で諦めた。気だるげにその男を見上げる。

佐野穰二とかいうらしい。何だこのジョージ。下手に西洋かぶれな名前しやがって。髪も、母さんやマリとは違って、自分で茶色にしている様だ。おとなしく日本人らしくしとけてんだ。どうにも受け入れ難い。いや、おれが自分から他人を受け入れようとすると自体、あまりないんだけど。それでも、こいつを認めるには、一生分以上の努力が必要だと思った。

目は口ほどにものを言うというけど、おれの考えを知ってか知らずか、

「よろしくね、俊也くん」

右手を差し出してきた。

おれは、このジョージとよろしくする気なんて全くない。この妙な笑顔の前は、どうにも居心地が悪い。背中に虫でもくつついているかのようで、今すぐ振り払いたくなる。

ものすごく、握手なんてしたくなかったけど、無視すればきっと母さんは悲しむ。一般的にも、親の知り合いなら、これぐらいするべきなんだろう。

なんとか自分に言い聞かせて、右手を差し出した。

あたたかくて、骨の太い手。母さんの細い手とも、マリの小さな手とも、おれや山本や、斉藤のものとも違う、大人の手だった。しっかりした、大人の男の手だった。

数秒後に開放された手を背中側に回すと、やけにほっとした。そうだ、マリは。妹はどうするんだろう。

見下ろすと、マリはおれのズボンの裾を掴んだまま、じっとジョージを見上げていた。大きな黒い瞳が見開かれている。本来、どちらかといえば人見知りな子だから、当然の反応ともいえた。

「真理ちゃん、握手しよう」

ジョージが膝を折って目線の高さを合わせるけど、真理はすっかりおれの後ろに隠れてしまう。子どもは素直だ。ざまあみる。苦笑するそいつを見ながら、そんな汚いことを考えた。

「真理、どうしたの」

母さんが不思議そうに屈み、駆けてきた真理を抱きとめる。母さんが真理を抱きしめている、いつもの光景だ。許せないのは、「怖かったかな」なんて笑うやつが、ここにいること。そしてその存在を、母さんがちゃっかり許していること。

途方もなくイライラしていたから、三人が台所のテーブルについて、何か話し出すと、おれは一人で部屋に引きこもった。マリの声はしない。多分、母さんの膝の上で、ぬいぐるみでも大人しくいじっているんだろう。

どんなにドアをしっかり閉めても、あとの二人の笑い声は聞こえてくる。話の内容までは聞き取れないにしろ、どうせなら少しも聞こえないほうがいい。持ってきてたんでおいた掛け布団の一番下に頭を突っ込む。苦しいけど、音は殆ど聞こえない。よかった、さつさと布団敷いておいて。

できれば、「出てけ」と怒鳴ってやりたい。なんだが、斉藤よりも腹が立つ。おれって、こんな短時間で、初対面の人をここまで嫌えたんだな。ひでえやつ。

酸欠で結構苦しくなってきた。なにやってんだ、おれは。そう思いながら、勢いよく頭を引き抜いて空気を吸い込んだ。ばやけた頭がすつきりすると同時に、好きなはずの母さんの笑い声が飛び込んでくる。すぐに、再び頭を埋めた。

9 知らない記憶

「オレ、あーいうの腹立つわけよ、見てて」

「じゃあ見なきゃいいだろ」

そう指摘すると、山本はぐつと息をつめたが、すぐに言葉を返してきた。

「しょーがねえだろ、あーいうのって人気だからすぐ話題になるだろ。嫌でも聞こえてくんのだろ」

同意を求められても、おれはそういう現代の文化にかなり疎い。古けりや好きなのかというと、全くそんなことはないけど。つまり、極端にドラマや噂やなんやらに興味が湧かないのだ。人気だから知ってるわけもない。興味ゼロのおれと、四捨五入すればサンはありそうな山本とは、かなり大きな差がある。なんだその基準。

「はいはい彼女はどーせ死ぬんだろ。それで頑張って生きてりや良い目にあえるんだろってさ。思うだろ、なあ。彼女は不治の病でさ、出てくんのは見た目ばっかいい人間だらけでさ、上手くいきや総集編なんてやってよ、感動の視聴率稼ぎだぜ。泣けるかってんだよ」

「分かってんなら泣いてやれよ」

「ばーか、だれが」
給食のパンを未だ食べ続けながら言い捨てた。この発言でどれだけ敵が増えるだろう。その今流行らしいドラマが好きなやつが近くにいたら怒るだろうと思ったけど、山本の声は昼休みの喧騒に飲み込まれて消えていく。

「きれいすぎんだよな、だいたい」

斜に構える、というよりは、ただひねくれている、という感じだ。おれも人のことは言えないけど。

「まあな」

「もっと複雑で大変なんだぜ。じいちゃんるときもいろいろあったし」

「リアルすぎたらつまんねえだろ」

「その方がオレはいい」

「お前基準にすんなよ」

「へいへい。あー、そんでさ、なんつつたつけ、望まれない命なんてないって台詞があんだよ。でもさ、漠然としすぎてる」

「少なくとも、パンを啜えて言う台詞じゃない。」

「なにがだよ」

「あれよりさ、私が望んでるって言ってやった方がずっといいと思うんだ。こういうCMなかったつけ。まあいつか。そんな間接的なんより、はつきり言ってやった方がよっぽど救われると思うわけよ、おれは」

「せめて全部食ってから言えよ」

「タイミングわりーなあ」

制服にパンのかすを散らしたまま笑う山本を見て、そりやそうだと納得した。ただ惜しいのは、パンくずを撒き散らしながら言ってるってこと。いいこと言ったと思ったのに、台無しじゃんか。

「ああ、んでもさ、それじゃ救えねえのが、生まれなかった子どもってやつだよな」

「おまえ、何考えてんだよ、普段」

「ん、なに、びっくりした？ 見直した？ オレは、トシの及ばないこと考えてんの」

「えらそーに」

「いいだろ、別に」空になった手をパンパンはたいている。山本の気に食わないドラマのテーマが、そういうものだったことは、ずっと後で知った。

「そういえば、うちにも一人いたはずなんだよなあ」

つい言ってから、はっとした。山本の好奇心は半端ないことを思い出したのだ。

「え、なになに、なんだよそれ」

「さわぐな」

「うおつと、ごめん」口元を押さえる仕草が大げさで、逆におかしい。

「いや、それ以上は特にならないけど。おれより三つ下だったらしいっただけで」もし生まれていたら、今はもう十一歳だ。

「男？ 女？」

「知らねえよ」

墮ろせと命じたのは、親父らしい。かといって、生まれた我が子を愛そうともしなかった。ほんつとに馬鹿だ。あいつが消えればいいのに。もう消えたけど。

「ただ……」

「ただ、なんだよ」

「おれ、なんも覚えてねえんだ。そんなんがあつたこと」

「しょーがねえじゃん、なんぼだ、三歳じゃねえか」

それぐらいの幼少期の記憶は、埋もれてしまっている人も多い。だから別に不思議ではない。でも、どんなに頑張っても、本当に、そのことについて、何も思い出せないんだ。

「オレなんか、一番古い記憶が小三の席替えだぜ」

「うそつけ」

「うそじゃねーよ。最前列になって生まれて初めて絶望した瞬間だよ」

「どんだけ嫌なんだ。」

「あ」

急に思い出した。

「どーした」

「いや、何でもない」

「言えよ、なんだよ」

「別に大したことじゃないから」

「じゃあ言ってもいいだろ、気になるだろ。次の数学で集中できなかったら、お前のせいだからな」

いつも聞いてないくせに。

「今日親戚がくるんだよ、そんだけ」

「親戚って」

「いとこが」

「いいじゃんか、それ」

意味なく手をパンと叩き、不思議そうに言う。いとこってのは、仲がいいもんだけじゃないってのに。

「おれは嬉しくないんだよ」

「うわー、トシつまんねえの」

大げさに指差してくる。何と言われても、楽しい気にはなれそうになかった。

10 訪問

人ごみの向こうに、いつもの影を発見した。人の波に飲まれる、小さな子どもの黒い影。だけど、今日はあまり気にしてられない。帰る足が重い。億劫だ。

今晩は、おばさんと、茜が来るらしい。おれの知る唯一の親戚一家の人で、親父の側の人。よく知らないけど、おばさんの娘である茜は、おれとマリのいとこにあたるらしく、おれはどうも、現在高二の彼女が苦手だ。マリはよく懐いてるみたいだけど。

七時に来るといって、七時のニュースが始まると同時にチャイムが鳴った。計ったんじゃないかというようなタイミング。

「お久しぶり。あら、真理ちゃん、背伸びた？」

「のびたー」

玄関口でマリが背伸びをする。流石に一ヶ月でそんなに伸びるわけがない。だけとおばさんは、愛おしそうにその頭を撫でる。

「いらっしやい」

母さんが顔を出し、おれも一応頭を下げる。すぐに、母親二人は、月並みの挨拶を交わしだす。

「やつほー、真理ちゃん」

やつぱり来た。

「ちー姉ちゃんだー」

「おいで、抱っこしてあげよう」

「うん」

何の躊躇いもなく、マリは茜の腕にとび込んでいく。

「よっ、俊也」

気軽に片手を上げてきたので、おれはただ片手を上げ返す。つれないねえ、と、茜は首を振った。肩を越す長さのストレートの黒髪が揺れた。

何か特別な用事があるわけではないけど、月一の頻度で、二人は

こうして家にやって来る。電車を数本乗り継がないといけないから、そうそうは会えないのだ。あと、大学二年になる長女と、彼ら姉妹の父親もいるけど、二人は更に見かけない。

「俊ちゃんも、背伸びたんじゃない」

テールにつくと、その声をかけられ、おれは「いえ、そんなに」と首を横に振った。茜が、おばさんの隣でにやにやしている。そっちが高いだけなんだよ。

「大丈夫よ。男の子はすぐに伸びるから」

にこにこしながら言われ、「どうも」と気の抜けた返事をした。なんで励まされてるんだろう。

おれは、そんなことより、ちゃん付けをやめて欲しい。これまでも、幾度かさりげなく否定してきたけど、あえなく撃沈し続けて今に至る。けして悪い人ではない、いい人なんだけど、これだけは分かってもらえない。

それにしても、全員話好きだ。話の内容がまるで理解できていないマリまで、母さんの膝の上での外れな発言をしている。おまえが、高校の履修不足の話題についていけるわけないだろ。それでも、全員がちゃんと相手をしてくれるので、得意気だ。

「俊也、もう下がってる？」

しばらくすると、母さんのお決まりの発言。ぼけっとしているおれを見かねての台詞。いつもの流れ。おれは、曖昧な返事をして立ち上がる。

部屋の布団に倒れて五分。そろそろだ。今日の中で一番、裏切られて欲しい予想。

そううまくはいかなかった。

「どーも、失礼しまっす」

ほんとにこいつは遠慮がない。うつ伏せになったまま、横目で見上げてみると、茜は後ろ手にドアを閉めて、部屋の中央に座り込んだ。「なーに早々と寝ちゃってんのよ。つーまんねーの。あつ、寝る子は育つって言うしねえ」

馬鹿にされる。睨んでやる。

「なによそれ、せつかく女子高生が部屋までわざわざきてやったのに」

「誰も頼んでねえよ」

「ひつど。うわ、ひつど」

「茜こそ、あつちで喋ってたらいじゃないか」

「うちのお母さん、あたしのことも何でも喋っちゃうのよ。成績でもなーんでも。聞くに堪えないってやつ」

そう愚痴る心境は何となく分かる。なんとなくだけど。

「それよりさ、あんたそんな態度じゃ女の子に嫌われちゃうよ？
どうする」

「どうもしない」

「あららら。人がせつかく心配してやってんのに」

何があららだ。楽しんでるだけのくせに。今だって、話が退屈になったから、いつものようにおれをからかいにきたんだ。

「寂しいねえ。なんなら、あたしが並んで歩いてあげよっか」

「いい」

「いってどつちの意味なのかな」

「いらないほう」

「最低。人の親切心をムダにしゃがって、バカトシ」

身内を褒めてはいけないと言うけど、確かに茜は美人だ。顔立ち
は整っていて、目は大きい。髪はさらつとして身体も細くて割と
高い。なんだかんだいって進学校の現役生で、成績も割りと良く、
部活のバスケに明け暮れているらしい。その上、明るくてよく笑う
から、必然的に人気者になっている。まさに非の打ち所のない人間
だ。

だけど、おれはあえて非を打つ。実のいところを馬鹿呼ばわりし、
遠慮なしに横から足で小突いてくる、宮里茜の性格に。

彼女には、何人が彼氏がいるらしい。その、何人かっというところ
が、すでにおかしい気がするけど、茜だからまあ、ありなんだろう

う。偶然、その一人と歩いているところを見かけたとき、思わず鞆を落としそうになった。何だありや、目の錯覚かと思った。甘える猫のような話し方は、月一でおれに蹴りを入れるやつと同一人物のものだとは信じ難かったし、相手の腕へのつかまり方は、溺れる者はなんとかということわざを思わせた。同時に、あの斉藤へ媚入る奴の姿を彷彿とさせた。おれが茜を苦手とする要因は、まずここにある。

「あーつまんなーい。何か面白いことしてよ」

無茶を言いながら、やっと足を止めた。

「そーいえばさあ、ここ、何が入ってんの」

座ったまま壁の方へにじり寄る。腰ぐらいの高さの、小さな戸棚が目についたらしい。

「勝手にいじんなよ」

「なーに。見られたら困るもんでもあんの」

なににやにやしてんだよ。

「困るかは分らない」

「意味わかんない」

「それ、親父のだから」

「へ、じゃあ、なに、ずっと開けてもないわけ」

「そう」

何それ、と茜は呆れた声を出した。それはおれも思う。でも、別に興味もないから気にしない。

「いつて」

戻ってきた彼女に、いきなり頭をはたかれた。

「なんだよ」

「なんとなく。面白い反応してくれないかと思って」

面白くもないのに、茜は笑い出した。

おれが、はたかれても強く出られない理由がある。言い方は悪いが、宮里家は母さんの唯一の後盾だ。彼ら以外に、親戚と名のつく人間を、おれは知らないし、聞いたこともない。だから、茜に対

しても、少々のごことは我慢しなくてはならないのだ。

うつとうしげに見上げていると、ふいに、ドアが小さく開いた。

「あつ、真理ちゃん。おいでおいでー」

「うん」

性格はさておき、茜は子ども好きだ。

「この兄ちゃんつまんないから、一緒に遊ぼう」

「兄ちゃんつまんないの」

「そうだよ。ずっと寝てんの」

「じゃあ、らあちゃん貸してあげる」

背中にぬいぐるみが置かれた。ああアザラシ、おまえだけは味方かなんて思ったけど、おれにはらあちゃんの返事は聞こえなかった。

11 傷

最近、来て欲しくない人がよく家に来る。こいつに比べれば、まだなんとか教の勧誘の方がマシだ。

「俊也くんは、部活してるの」

「してない」

「小学生の頃は」

「陸上」

「陸上か、すごいな」

何がすごいんだ、笑うなよと、社交辞令の感心に、おれは黙ったままでひねくれる。だめだ、やっぱりこいつは嫌いだ。

母さん、早く帰ってこないかな。いや、おれが代わりにコンビニまで行けばよかったんだ。いやいや、それよりととここいつが帰ればいいんだ。

いつもは一人で引きこもっているけど、今日は四畳半に出ざるを得なかった。ジョージとマリを二人きりにさせることが、何故かすごく嫌だった。

「マリね、マリね、あやとびができるようになったんだよ」

目を輝かせながら、隣でマリが飛び上がる。ろくに返事もしないおれから話し相手を変更し、マリを褒めながら、いくらかほつとしたみたいだった。

「二重とびもね、一回だけできるんだよ」

「すごいね。真理ちゃんぐらいの頃は、全然できなかったな」

マリは照れ笑いをする。なにちゃっかり懐いちゃってるんだよ。理不尽に小突きたくなる。彼女に悪気はないのに。

反対に、おれはジョージの笑顔に慣れたりはしなかった。むしろ、毎回息苦しささえ感じる。どこかに追い込まれているようで、とてもなく不安定で、逃げたくなる。

だけど、逃げる必要は無くなった。母さんが帰ってきた。

あつという間に一人になって、畳に寝転がって、眩しい天井を眺める。台所の方から、三人の話し声や笑い声が嫌でも聞こえてきて、布団でもかぶろうかと思っただけ、やめた。聞きたくないけど、この苦しささえ我慢していればいいんだし、おれがどうしていいようが、三人が仲良くやっていることに変わりはない。

横に寝返りを打って、ただひたすら考える。母さんは、どうしてあんな奴がいいんだろう。母さんもマリも、あの笑顔のうすっぺらさに、どうして気付けないんだろう。おれがおかしいんだろうか。それを受け入れられないおれが、心の狭い、嫌な人間なんだろうか。なんで、あの笑顔が嫌いなのか。それだけは、最近やっと分かってきた。似てるんだ。

小学五年のときの担任、にこやかで生徒思いの教師で、迷惑極まりなかった。おれが懸命に隠しても隠しきれない腕や顔のあざを、目ざとく見つけては「どうしたの」なんて聞いてくるのだ。

「松川くん、顔の傷、どうしたの」

階段から落ちたって答えた。うそだ。

「腕の痣、どこでできたの」

車にぶつかりました。うそだ。

「相手の人の名前とかは？　ちゃんと聞いておきなさいって、いつも言ってるでしょう」

答えられなかった。ごめんなさいと呟いた。

だんだん、おれのうそは、苦しくなっていた。

「休み時間、松川くん教室にいたじゃない。どうやって鉄棒から落ちるの」

そう、教室に鉄棒はない。この先生は、知ってて言ってるんだ、全部うそだって知っている。このときおれは確信した。同情を含んだうすっぺらい笑顔が、途方もなく嫌だった。

「あなたのお父さん、おうちに帰るのは遅いの？」

もしかしたら、震えてしまっていたかもしれない。

「先生、お電話してみてもいいかしら」

大丈夫です、本当に自分で怪我したただけなんです、もうほつといってください。

「そんなこと言っても」

お願いします、電話なんてしないでください。そんなことしないでください。どうかやめてください。

そんな台詞で懇願した。今度こそ殺される自信があつた。必死に頼むと、先生は曖昧に頷いた。

夜になって、電話がかかるたび、たたんだ布団の一番下に頭を突っ込んで、耳を塞いで耐えていた。それでも微かに聞こえる母さんの声のトーンで、相手が誰なのか、少なくとも学校の先生かどうかは、おれには分かつてしまう。先生だと認知すると、情けないことに、身体が震えて仕方なかった。その後で母さんが慰めてくれなかったら、酸欠で死んでいたかもしれない。

それでも、かくしきることなんて不可能で。

ただでさえ機嫌の悪かつた親父は、今まで見たことのないほどぶちきれていて。おれの頭を野球のバットで殴ったときよりもひどくて。ものすごく怖かった。その頃の生き残る術は、泣かないことと逆らわないことと、苦しいそぶりを見せないこと。どんなに痛くても、できる限り、笑おうとしていた。効果の真偽も定かではないご機嫌とりを、おれは必死で頑張っていたけど、それすらも、このときはできなかつた。

何度も殴つた。何度も何度も。おれを蹴り飛ばしたとき、一緒に四畳半のふすまも外れた。

俊也という存在が、許せないらしかった。馬鹿でどうしようもないやつだと言っていた。そうか、どうしようもなく馬鹿だから、殴られるんだと思った。そう思わないと、やっていけない。許されないうまに存在をただ否定されるんだつたら、おれは、存在自体を消さなければならぬから。それだけは、どうしてもできなかった。

殴られて殴られて、歯が二本折れて床に転がった。蹴られて、踏まれて、胃液が、切れた唇の端を血と一緒に伝っていった。床に投

げ落とされて、壁に投げつけられて、身体中が痛んだ。ごめんなさい。それしか言えない。お父さん、ごめんなさい、ごめんなさい。ここに生きていて、そういう意味で。

頭を蹴られて気絶しかけて、手加減なく踏みつけられて、右手の甲に火のついた煙草を押し付けられたとき、我慢できずに涙が出た。自分の手が焼ける音を聞きながら、熱くて痛くて悲しくて、耐えられなくて、泣いてしまった。泣くなど、すぐに髪を掴まれ頭を床に叩きつけられて、涙は出なくなった。こめかみから溢れた血が、顔の半分に使ったりついた。

痛いという感覚しか分からなくなつて、実は、自分はそれしか知らないんじゃないかと思ひ出して。それすらも分からなくなつて、涙も声も出なくなつた頃、やっと手を離してくれた。

だけど、おれが親父を許せない理由は他にある。手を上げる相手は息子だけじゃなかった。頻度は圧倒的に違つたけど、あいつは、止めようとする母さんまで殴り、マリにまで、一生残る傷をつくつた。おれはその後にケンカやらやっていて、傷跡なんて特に気にしていないけど、マリはケンカなんてしない。ぶたれてつねられた拳の傷は、際立つて残り続ける。

止められなかった。身体中が痛くて、指一本動かせなくて、押し殺した泣き声を聞いているしかなかった。痛そうな音の先に自分はいなくても、二人のどつちかがいる、それだけは分かっていたから、苦しかった。どうにも息がし辛くて仕方がなかった。

電話さえされなかったら、なんて、今はあの先生のせいにしていく。あんな、自己満足の笑顔の先には、ろくなことがないんだ。だから、それによく似ている、ジョージの笑顔が、とても信じられない。

母さんは、忘れてしまったんだろうか。辛くて痛かったはずなのに、あの先生にも、何度か会ったことがあるはずなのに、思い出せないんだろうか。

きつと、よくないことがある。ひがみなんかじゃない、あいつの

笑顔は絶対、澄んだものじゃない。
確信した。数日後の夜、電話が鳴った。

12 涙

その晩、母さんの帰りが遅く、おれは小学一年生を寝かしつけていた。はずが、いつの間にか意識を喪失していて、夜中に暗い四畳半で目を覚ました。窓からの月明かりで、ぼんやりと部屋の様子が見て取れる。自分の寢床に帰ろうと、布団を這い出して、ふすまのない敷居まで這っていく。

廊下が、台所から漏れる明かりで照らされている。ああ、母さん、帰ってたんだ。電話でもしているのか、小さな話し声がする。気にせずに、廊下を隔てた向かいの部屋へ戻ろうとした。出られなかった。

相手は、どうやら佐野穰二らしい。声のトーンが僅かに上がるからすぐ分かる。なんとなく、気付かれてはいけない気がした。今立ち上がって向かいのドアを開ければ、気付かれる可能性がある。電話の内容を聞いて余計に、出てはいけないと、気付かれちゃだめだと思った。

「本当はいい子なのよ。真理の面倒も、よくみってくれるし。ええ……、あなたには、懷いてないかもしれないけど」

座ったまま壁にもたれて息を殺していると、微かに聞こえる。マリの面倒、懷いてない、そっか、おれのこと話してるんだ。

「そんな、そんなこと、言わないでよ。それはきつと、あの子の父親が……。ええ、そう」

ちがうよ。別にあいつと親父を重ねてるわけじゃない。そんなことじゃない。

「あの子は、俊也は。……いやよ。いやよ、そんなの」
すぐく、悲しそうだ。

おれのせいだ。きつと、おれがあいつに懷けば、解決することだ。そうすれば、母さんがあんなに悲しむことはないのに。できない。母さん、ごめん、できないんだよ。

そう思っ て聞いていると、呼吸が難しくなつてきた。襟首を掴まれたりするときとは違つて、胸の奥を誰かに握りつぶされているみたいで、息苦しい。動悸が激しい。誰にも気付かれない様に深呼吸をするのつて、意外と難しい。

「ちがう。そんなことないから。私は……」

普段とは比べものにならないほど、湿つて、悲しげな声だった。それだけ悲しんでいて、悲しむ原因は、おれなんだ。

やがて、会話が途切れ、受話器を置く音がした。

かなりうるたえた。すぐに電気が消され、廊下が一気に暗くなる。音を立てないように素早く畳の上を這い、即座に音もなく布団の上につつ伏せに倒れこんだ。これ以上、どうしたらいいのか分らない。さりげなく、マリの方に片手を伸ばし、添い寝の拳句に眠りこけていたという、ついさっきまでの行動を着実に再現する。ただ、心臓が驚くほど激しく活動している。外まで聞こえたらどうすんだよつていうくらい。

やっぱり、母さんは、おれがここにいるとは思つていなかったらしく、驚いて部屋の入り口で立ち止まった。足音で分かる。ゆつくり歩いてきて、枕元で膝を折つて、顔を覗き込んでくる。寝てるかどうか、確かめているんだ。今だ。

眠たげな声を出しながら、顔をしかめて、うつすら目を開ける。

「かあさん？」と、寝起きの声を出す。あるかないかよく分からない演技力を総動員して。

「ご、ごめんね。起こしちやっ たね」

はつとして、母さんが笑いかける。

「ありがとう。寝かせてくれたんだ」

マリの方を振り返るのに、うつんと首を振った。よかった。ばれてないらしい。

「いいよ、ここで寝てて。眠いでしょ」

「だいじょうぶ」

答えて、半身を起こし、やっとまともに母さんの顔を見た。

泣いていた。頬を伝う涙が、月明かりの元で、確かに見えた。あの悲しげな声の通りに、悲しそうに笑っている。綺麗だと思った。はかなくて、弱々しくて、とても綺麗だった。あいつの気を引いている理由も、分かったような気がした。

「ごめんね」

そう言つて、優しく抱きしめた。座ったまま目を閉じると、焦りで騒いでいた心が水の底に沈むように落ち着いていく。頭をそつと撫でられる。

「ごめんね。大丈夫だから。大丈夫だからね、俊也」

普段なら、大げさだと思ふ台詞も、あの電話を聞いてしまったから、納得できる。そっか、大丈夫なんだ。大丈夫なんだな。ただ単純に、そう思つた。

自分の寢床に戻つて、布団の上であぐらをかいて腕を組んで考える。普段あまり使わない脳で、一生懸命考える。

最悪の場合。おれにとつてのそれは、また名字が変わるってこと。それはとても嫌なことだ、できれば勘弁して欲しいけど、大丈夫なんだ。まだ、母さんの温もりが身体に残っている。母さんの手は、誰が何と言つても、何があつても、ちゃんとつなげている。だから、大丈夫だ。

ひどく安心して、同時に、自分の子どもっぽさが馬鹿馬鹿しくなつて、寝ることにした。おれは、このとき確かに、手を繋げていた。何の疑いもなく、そう信じていた。

13 三回ルール

頬に衝撃が走り、一気に熱を持つ。持ちこたえたと思ったのに、怯んだところを蹴り飛ばされた。

ちくしょう。なんででめえに頭下げる必要があんだよ。

精一杯そんな顔をしながら、ギリギリで、殴りかかってくるのを避けた。今だ。近付いたところを反対に殴り返してやる。握った拳に、人を傷つけるとき特有の感触。未だに慣れない。気分悪い。

自分自身のルールでは、今の状況は、既にやられる以上にやり返していいという域に達している。言うなれば、三秒ルールならぬ、三回ルール。

先に手を出せば、必然的に、後々こつちが責められることになる。相手が厄介なら、その親も厄介なことが多く、親子揃って攻め込んでくる確率も低くない。ただ、家に来られれば、おれ以外に迷惑がかかるから、それを避けるためだ。自分からは手を出さない。

一回目は、相手の手が滑ったのかもしれないと、見過ごす。二回目も、まあ、人間だからあるかもしれない、だけど、三回目にはやり返す。何とかの顔も三度まで。おれは馬鹿だから、そんな台詞とは関係ないけど、単純に、三度もやられ続けて黙っているほど心が広くないっていうだけだ。そこまですれば、ぱつと見の非はむこうにできる。卑怯で上等だ。おれは、相手やその親がどうなるうが、全く興味はない。

だから今日も、それを守り、現在に至る。三回だって、結構キツイ。大いに、口の中が切れてしまっている。ここを怪我すると、水を飲むだけで沁みるし、日常生活に様々な支障をきたす。治りだつて遅いんだ。後々面倒だつてのに。

「いい加減にしるよ、トシヤ」

見下ろしてくる斉藤を、上目遣いに睨み返してやる。斉藤はそれ程大柄ではないし、おれは結構ケン力は強い。それでも、二年分の体

格差は大きいし、おれ自身も、健康診断なんかでは、「ふつう」か「やせている」に傾いている。有利なことなんて何一つない。技術面でカバーしようとしても、離れた場所から斉藤の傘下、おれの敵に位置づいた連中が一部始終を見守っている、斉藤はなんだかんだで本気だ。トシヤなんぞに負けるわけにいかないんだ。

「これが最後だ」

かなり強い力で胸倉を掴まれる。その手を掴み返し、見上げた相手の顔の向こうに、沈黙を守る鉄骨の残骸がある。

「今なら、お前の態度によっちゃあ、全部水に流してやってもいいんだぜ」

何を偉そうに。その後でおれはお前の言う事聞かなきゃいけなくなるんだろが。

「だれが」

誰が好き好んで、そんなことするか。

「あんたこそ、いい加減にしろよ」

元からおれは、仲間になったつもりはない。

強い者に認められるよう、せめて敵にならないよう、無意味に言う事を聞いてお愛想するなんて、もうできない。結局何もないんだ、表面を取り繕って神経をすり減らすより、痛い目見て糸を断ち切るほうがマシだ。

人の来ない閑散とした工事現場で、ひたすら殴って殴られて、蹴って蹴られる。ちくしょう。どんな理屈があっても、実力がついてこないという意味がない。

頬を思い切り殴られて、地面に倒れてしまう。腹を蹴られる鈍い痛み。再び蹴ろうとする足を両手で横に弾き、飛び起きた。その勢いで、飛びつくようにぶち当たる。

上手く倒せた相手を、間髪いれずに殴りつける。今だ、もう一度。

「おい、何をしているんだ！」

大声が、無闇に広い空間に響き渡った。

ちつと舌打ちが聞こえると同時に、胸を蹴られて、肺の空気を吐

きながら地面に転がった。視界の隅に、青い制服がちらつく。

「ここは立ち入り禁止だぞ、待ちなさい！」

斉藤らが散らばる。そうだ、トシヤ一匹の為に、警察と御知り合いになる必要はない。あいつらが絡めば、ケンカ慣れしていない大人一人ぐらい、どうだってなるはずだが、ひたすら面倒なことになる。実に賢明な判断だ。このやろう。

それより、おれの方が危ない。なんとか立ち上がって、とにかく駆け出した。

「ちよつときみ！ 待て、止まりなさい！」

後ろから怒鳴ってくるのを無視し、骨組みだけの建物の中に駆け込んだ。暗がりの中、太い鉄の柱の影に入り込んで、しまったと思った。こんな奥に入って、どこから逃げればいいんだよ。おれの馬鹿鉄骨を背にしたまましゃがみ込んで、じつと様子を窺う。急に空気が静まり返り、奥の方から漂うひやりとした風が肌に触れていく。全身がずきずきと痛む。所々錆びた柱にそっと手を当てると、剥がかけた塗料が、ぱらりと落ちていった。

どうやら、うまく撒けたらしい。青い制服の男が、入り口辺りで右往左往している。

ああ、やつぱり、おれにしか見えないんだ。

向こうにたたずむ、黒い影。幼い子どもの姿。相変わらず、その顔はよく分らない。儚げに、横を向いて立っている。そばにいる男は、全く気付いていないようで、躊躇いもせず、影の方へ歩み寄っていく。すぐに重なり、すり抜けて通り過ぎるが、ふと振り返って不思議そうな顔をしたただけだった。結局、その正体には気付いていないみたいだった。

ふと見ると、影はおれの方を向いていた。なんだよ。何が言いたいんだ。おれは、どうすればいいんだ。

声に出さずに話しかけても、やつぱり答えは返ってこない。ただじつと、こっちを見ている。そう、じつと、ひたすら。

どうにかしないといけない。だけど、おれには、どうしたらいい

の
か
分
か
ら
な
い
。
そ
れ
で
も
、
何
と
か
し
な
い
と
。
ふ
と
、
そ
う
思
っ
た
。
影
は
た
だ
、
じ
つ
と
見
続
け
て
い
る
。

14 好きだったこと

昨日は何とか、工事現場の敷地を囲う壁に隙間を見つけて、逃げる事ができた。マリなら楽勝で、斉藤には無理で、おれだとギリギリな隙間、危なかった。一件落着と言えなくもない。いや、全然言えないんだけど、もう自分から首を突っ込みたくないから、影の方を優先的に気にかけてよう。

「山本」

「なに、なんだよ、トシか。珍しいな、そっちから来るなんてさ。でも残念、オレ、今宿題やってんだよ、しゅくだい。わりいな」

「おれ、幽霊見えてんだよ」

「ゆづれい？ おお、そっか、すげえなあ。さっすがトシ」

突然、山本は手に持ったシャーペンをノートに押し付けた。折れた芯が飛んできた。

「うそ、今お前なんつつた？ まじで。お前が言ったのか」

「らしくねえよな。悪い、邪魔して」

「いや、いやいやいや。意外性って大事だと思うぜ、うん。そのほうが楽しいだろ。って、そうじゃなくて、まじで見えてんのかよ、おまえ」

近くの空いている席を適当に借りると、山本が身を乗り出してきた。授業中の十倍は目が輝いている。

「見えてんのは結構前からなんだけど、小学校ぐらい」

「全然知らなかったぜ、そんなこと。何で言ってくんねえんだよ。」

お前、気の迷いだとか言ってたじゃんか」

「言っても、おれにしか見えねえから、証明できねえし」

「なんだよそれ、誰が証明しろつつたんだよ。で、どんなんが見えてんだ」

山本の切り替えが早くてよかったと、内心で思った。七年間も見え続けていたものだから姿形の説明は容易い。

「で、お前さ、この前工事現場がどうのって言ってたよな」

「え、あー……ああ、あれか。言った言った。それか、そこで死んだ子どもなのか」

「もしかしたら。そこで見ることが多いし」

「そんならなんでトシだけに見えんだよ」

「だから、それが分からねえんだよ」

それを言ったら見も蓋もない。そうだよな分かるわけないよな。ただ噂を聞いたってだけなんだから。

「そうだ。オレの父ちゃんに聞いてやろうか、そんなときのこと」
少なからず落胆していると、手でも打ちそうな勢いで、山本はひらめいた顔をした。

「なんで」

「いや、昔さ、そこで働いてたことあんだってよ」

「でも、今いないんだろ」

「単身赴任だぜ、音信不通ってわけじゃねえって」
何言ってるんだよと、おかしそうに笑う。ほんとに、よく表情が変わる。

「今の世の中、連絡手段なんて腐るほどあるんだぜ。どーにでもなる。んでさ、オレ、朝から気になってたんだけどよ、それってケンカの痕だろ」

あつさり話題を変えて、左頬のガーゼ類を指してきた。

この軽さがいやだという奴もいるけど、おれはそう嫌じゃない。確かに、真面目なやつは拍子抜けするだろうけど、本人に悪気はないのだ。嫌いな奴は嫌うだろうが、おれは、あまり重く踏み込まれたくない性質があるから、この方がいい。そりゃあ、時と場合にはよるんだけど。

「斉藤と」腫れた頬を撫でながら返した。口の中や胸の辺りや、いろんな箇所が痛むが、ここが一番目立ったのだ。

「あーあ、ほんとにやっちゃったのかよ。それで、勝ったのか」

「いや、途中で警官に見つかって、うやむやになった」

「補導か」

「逃げた」

「えらい。えれえよ、トシ。このバーカ」

「うるせえな」

あまり反論できない。確かに、ケンカをすること自体、馬鹿だと思っただからだ。

「どうすんだよ。一気に敵増えたぜ。ケンカ強いっつってもさ、限度ってもんがあるだろ」

「しょうがねえよ。だいたい何でこう、しつこいんだよな、ヤクザじゃねえってのおれは。小指でも落とせばいいってのか、ふざけんなっつもの」

不良だなんてよく言われるけど、そこまでなら許そうと思う。それでも、酒だのなんてアルコールは一滴だって自分から摂取したことはないし、煙草なんか、見たくもない。

「だーから、言っただろ、反抗するなっつて」

「わけわかんねえよ」

「そりゃあ理屈は通んねえけどさ、お前もとにかく強情だなあ」

それだけじゃない、意味なく頭を下げたくない理由はちゃんとある。ただ、細々とした説明なんてしたくないのだ。

「まあ、次水泳だからさ、水につかれれば全部忘れちまうよ」

いや、忘れちゃだめだろ。

「そういえばトシ、泳げないんだっつたよなあ」

「泳げないんじゃない、泳がないんだよ」

「強がんなっつて。もつと正直になれ、性格変わるぞ」

「強がってねえよ」

子どものように反発しながら、今日は午後から体育の水泳の授業があることを思い出した。下旬とはいえ、五月から泳ぐなんてどうなっつてんだと未だに思うけど、水につかると異様にテンションが上がる人間の性質のせいだかなんだか、教室の空気は、朝から妙に浮き足立っていた。

「さむーい」当たり前だろまだ五月だぜ。そう密かに突っ込んだけど、五分もすれば全員水の中ではしゃぎまわっている。寒くないんかい、あんたら。

スペースの関係で男子更衣室まで女子に占領されてしまい、追い出された彼らが落ち延びて使わされている、広めのコンクリートの床。そこは異常に広い五十メートルプールと同じ、二階の高さにあるので、よくプールの様子が見える。そんなに楽しいんかな、水中って。

それぞれの隅で、見学生たちが元気にしゃべくったり、放心したようにぼけっとしている。その中の一人、気弱そうな奴が明らかにこっちを気にしながら見ていないふりをしているが、安心しろよ、おれはお前の名前も知らない。どうやら、南俊也は、一部の人間の間では、誰彼構わず因縁つけてケンカしたがる不良として位置付いている。おれはそんな真似をしたことはないけど、いちいち名前も知らない相手に弁解するつもりはない。三回ルールはかなり昔から確立していたはずなのに、そう思うやつは思うらしい。いいや、別に。何と思われたって、支障がなければ気にしない。

気にしないというわけで、午後の日向でひとり天日干しになっていた。つまり、日向ぼっこ。こうして眠くなるままに日向で寝ている真昼間が、すごく好きだった。気持ちいいんだ。

目を閉じると、やけに遠くに、水音が聞こえてくる。

おれがその中に入らない理由、それはただ面倒だからだ。水に入るのが、じゃなくて身体中の傷跡を見られて、なんやかんやとと言われるのが、だ。背中なんか、普段気付かれないから先生なんかは特にうるさい。昔は全然気にせず中に入っていたし、今も別に、見られること自体は気にしないけど、周りがやけに問題視してくる。いちいち説明するのが面倒になってきて、水泳のときは見学することにした。今はもう、八割方サボりなんだけど、もういいや、今年で最後だ。泳げないから、ではない。昔はちゃんと泳げていた。今は

分からないけど。

かん高い笛の音が響いてくる。頭の奥まで貫かれる。

「十分立ったぞー、一旦上がれー。おい、そこ、田口！ 塩素剤拾ってくるんじゃない！」

先生に重なり、「さむーい」と再び声上がる。

目を開けて、右腕を伸ばしてみた。右手の甲に、一生消えない火傷の痕。その向こうに、眩しすぎる太陽がある。双眼鏡で太陽を見ると目が潰れる。そりゃそうだ、あんなに強く光ってんだから。

目がダメにならないうちに、もう一度閉じて腕を額に乗せた。自由時間を知らせる笛の音と歓声。無謀な跳び込みの水音と、それを叱る野太い声が、遠くに聞こえた。

15 別れは、過ぎて

家に帰って、とつくに日も暮れたけど、母さんは今日も遅いらしく、夜が更けてきても帰ってこない。明日も早いはずなのに、大丈夫だろうか。

「やらせてやらせて、マリ、ほーたい巻きたい」

「ちよつと、はなせつて」

「いやあ」

「いやあ、じゃないつての」

マリがぐいぐい引つ張って伸びていく包帯を、何とか手繰り寄せて取り返した。不満げに頬を膨らませている。構わずに、意外と痛みの増してきた左腕に、湿布の上から真つ白な包帯を巻いていく。痣だけで、それ程腫れていないから、骨折ではないだろう。

「兄ちゃん、けんかしたんだつて。痛いんだよ」

アザラシを抱いて、会話を始めた。

「ぱーんつてやるんだよ。おかあさんに怒られちゃうよ」

「母さん怒んねえもん」

ケンカがばれると、「元氣ねえ。男の子だもんねえ」なんてしみじみと言う。そんな簡単なものじゃないはずなんだけど、こうあっさり流されたほうがいいかもしれない。

「ほら、もう寝るぞ、マリ」

「眠くないよ」

「んなこと言つてすぐ寝るんだろ」

「寝ないもん。ずっと起きてられるもん」

電気を消して五分もすると、隣から寝息が聞こえてきた。すでに意識はない。

母さんが遅いときは、代わりに隣で寝るようにしている。ああ、まだ十時半なのにかなり眠い。

顔に落ちた影の方を見やると、頭側の、開いている窓から流れ込

む風で、薄いカーテンが揺れていた。閉めなきゃ、そう思いながらも、眠気にぐんぐん負けていく。

窓を開けたままで寝てしまい、結局一度も目は覚めなかった。

マリを起こして、準備をしながら、狭い部屋をうろついたけど、母さんの姿は見当たらなかった。冷蔵庫をのぞくと、家で一番でかい鍋にカレーが入っているのを発見した。夜中に帰ってきてこれを作って、また早くに出かけてったんだ。大変だと思った。

適当に食パンを焼いて二人で食べて、同時に家を出る。小学生は、団地内の子たちと集団登校するようになっていて、一階には早くも五、六人がたまっていた。彼らに手を振って学校に行くと、遅刻にはならなかった。

おれがノートをとると、それだけで先生にものすごく久しぶりに褒められた。やっと先生の話を分かってくれたのね、なんて言うのに、ドラえもんをつくるためですなどと言って逆なでするのも芸がないから、曖昧に頷く。我ながら可愛げのない生徒だ。

帰って夜になり、そういえばカレーがあったことを思い出した。兄妹そろってカレーは好きだし、マリはそれだけで喜ぶ。鍋の中をよく見て、母さん寝ぼけたな、と思った。かなり量がある、何日か持ちそうだ。きっと、眠くて分量を間違えたんだろ。まあいいかと、残りはしまっておいた。

「眠くないもん」の妹は五分で寝てしまった。朝になったら布団の外に飛ばしているか、自ら枕にしまっているアザラシのぬいぐるみにしがみついている。ぬいぐるみは目元にしわが寄って、非常に情けない顔だ。マリが寝ている間は、アザラシの声は届かないらしい。大変だな、らあちゃん。

この晩はちゃんと窓が閉まっているのを確かめて、目を閉じた。

朝がきた。母さんは帰っていなかった。

マリが起きる前に部屋の中をうろついてみたけど、見つけないも

のは何一つ見つからなかった。夜中に帰って朝早く出て行って、一度も顔を合わせないときは、何かしらメモがあつたり、電話がかかったりと、痕跡を残してくれていたけど、それが何も無い。昨日のカレーを除いて、二十四時間の音信不通、新記録。きつとそれだけ忙しいんだ。

学校へ行くためにドアに鍵をかけていると、

「おかあさんは」

マリがこつちを見上げて問いかけた。返事が分かりきってるから、今まで訊かなかったんだろう。

「多分、仕事が忙しいんだよ」

おれは予想通りの言葉を返す。思った通り、マリはこつくりと頷いて、他の子どもたちと学校に行った。水曜日だったけど、遅刻にはならなかった。怒られないのに越したことはない、そう思うようにした。

帰ってから、二人でカレーを食べた。留守電が一件入っていたけど、雑音交じりの何かの勧誘で、全部聞かずに消去ボタンを押した。マリはいつにも増して、ぬいぐるみを抱き続ける。白さが余計になくなりそうだ。妙にぐずるから、片手を繋いでいてやると、反対の手にアザラシを握ったまま、五分以内に眠ってしまった。だけど、おれはすぐに寝るわけにはいかない。ここは本来、おれの寢床じゃないんだから。そう思って起きていたけど、十一時を時計の針が越したのを視界に入れたのが最後の記憶になり、また起きている必要も無かった。朝がきたけど、母さんはまだ帰っていないかった。

パンだけ買って帰り、まだ残っているカレーを食べる。量を半分にして、その分ご飯をいつもの一点五倍増やして、少しでも長持ちするようにする。飽きたなんて言うかと思っただけど、マリは何も言わなかった。留守電は一件も入っていなかった。

痛みが大分引いてきたので、腕の包帯をほどくと、それをひらひらさせて、彼女が遊んでいた。遊び疲れると、またおれの手とアザ

ラシを握り締めて眠る。おれもその横で目を閉じる。

次の晩、とうとう鍋の底が現れ、おれとマリはその周りにある分までスプーンでこそげ落として、無理矢理食べた。「きれいになったね」彼女の言うとおり、洗ったんじゃないかというぐらい、中には何も残っていない。だけど、そういうわけにはいかないから、二人で並んで洗った。イスの上に立って手を泡だらけにしたマリが、白い泡をふつと吹く。シャボン玉が一つだけ流しの上を漂い、すぐに水の中に消えていった。

一本足りない川の子になって、並んで眠った。

母さんは、帰ってこなかった。

16 雨の日の洗濯

さて、どうしたもんだらう。母さんには悪いけど、おれは、朝起きてから夜寝るまでの一連の作業をひとりで行えるだけの知識はある。マリが隣に居ても、それは変わらない。

朝から雨が降り続く、暗い土曜日。朝昼兼用のうどんを二人で食べた後、久しぶりに洗濯機をまわすことにした。マリが、一階の郵便受けを見に行っている間に、さつさとスイッチを押しておく。低い呻り声と共に振動する洗濯機にもたれかかって、目を閉じた。じっと考えた。

もし、事件や事故だのに遭遇しているんだったら。いや、それはないだらう。交通事故だとか、急に倒れただとか、もしそうなら、家に連絡ぐらい入るはずだ。事件だとしてもなんだとしても、とりあえず、急に職場に来なくなったら、電話の一本ぐらいある。病院、警察、仕事場、どこからも連絡はない。一度もない。つまり、自分の意思で消えたってことだ。ここを離れたくなって、自分から離れたんだ。

身体に触れている古い洗濯機が、ガタガタと音を立てて、小さく揺れ続ける。うるさいなあ、だからおまえは夜中に使えないんだよ。自己主張しすぎてまだめなんだぜ。

「ただいまー」

明るい声が、とび込んできた。

靴を脱ぎ捨てたマリが、廊下を右から左へ走っていき、見えなくなる。小さな足音が響く、今、台所に入った。「どこー？」疑問系の声が、四畳半に移る。

「もー、へんじしてよ」

玄関脇まで戻ってきた彼女が、やっと洗面所を振り返った。

「なんかあったか」

「うん」

差し出された紙類を受け取って眺めたけど、必要ない広告ばかりだった。紙がもつたいない気さえする。こんなにインクまで使って。

「ふうん」

「ねえねえ、なんのお手紙なの」

「広告。落書きしていいよ」

背伸びして手元を覗き込んでくるマリに、それらを返す。何が面白いだか、一つ一つをしげしげと眺めていた彼女が、ふと顔を上げた。澄んだ大きな瞳と目が合った。

「なに」

「なんで、おせんたくしてるの」

「なんでって、たまってたからだろ」

「雨、いっぱいふってるよ」

「朝からずっと降ってるって」

やっと、マリの言いたいことに気が付いた。

「どこにほすの」

そうだ、いつもは窓際に干しているけど、今日そんなことをしたら全く意味がない。

おれは、頭を使うと普段の判断力が鈍ってしまつらしい。泣きた
い。

「どうしようか」

困って振り返ると、

「どーしよっか」楽しそうに笑いながら、同じ言葉を繰り返した。

「こっちがアジサイでね、こっちがかぶとだよ」

狭い洗面所の床に二人で座り込むと、マリは広告を使って折り紙を始めた。ああ、確かにアジサイの形をしている。飛行機と鶴しかろくに作れないおれが手にとって眺めていると、「兄ちゃんにあげる」そう嬉しそうに言った。それはどうもと、取り合えずポケットにしまっておいた。

台所の向かい、廊下を挟んだところの部屋は、いつもは使ってい

ない上に、湿気が高いことも重なって、まとわりつくような空気が
充満している。少しぐらい雨が入っても、また拭いておけばいいや
と、窓を全開にした。低く雲が立ち込めていて、まるで、街全体が
一緒になってシャワーを浴びているみたいだった。

「できたよー」

ドアの付け根の部品にビニール紐を結びつけたマリが振り向く。

「ちゃんと結んだか」

「ちゃんとしたよ。ほどこないもん」

小学一年生の力って、どれくらいなんだろう。まあ、きっと大丈
夫だと、反対の端を握って、イスの上に上がった。

「やっぱり届かねえ」

天井近くの押入れの金具に紐を引っ掛けたいんだけど、イスに上
っても届かない。あんま伸びがよくないんだ、おれの身長。茜なら
届くかも、と考えてくやしくなった。

「がんばれー」

足元から、無邪気な声が聞こえる。

「イスが低い」イスのせいにしてみる。

「じゃんぷして、じゃんぷ、ぴょんって」

「離れてるよ、落ちるかしんねえから」

小さく飛び上がりながら、マリが一メートルほど距離を置く。何で
そんなに楽しそうなんだ。

ジャンプしてみた。無理。そう上手くない。

「惜しいよ、もうちょっと右だよ」

「見えないんだって」

「右、みぎ。あっ、ちょっとひだり」

「こう」

「もっと左だよー」

「左って。……うわっとお」

危ない。落ちるかと思った。マリはかなり楽しそうだ。そんなに飛
び上がるんなら、代わってくれよ。

「みぎー。もーちよつとみぎ。あつ、そうそう。ちよつとひだり」

明るい声が響く。おれは反対に、疲れてきた。

「そこだよー。もつと上だよ」

上つて。届かないから苦労してんだって。

「うわあ、がんばれえ」

意を決して、ふすまのレールにあたる、壁の出っ張りに飛び上がつて飛びついた。思い切り右手を伸ばして紐を通し、その先をつかんで飛び降りた。イスからよろけて落ちた。

「すごおい」マリが拍手しながらすごく嬉しそうに笑っている。

その後、マリが結んだ紐がほどける等、何かとあつたけど、しばらくすると、部屋干しが完了した。騒いでいた間に、少し乾いてしまったけど、十分だ。

少し弱くなつた雨の音を聞きながら、十時を過ぎた頃に並んで眠る。マリは、はしやぎ疲れたのか、ぬいぐるみを抱きしめて、すぐに寝息を立てだした。少しほっとしながら、これからは自分の寝床であり続けるであろう、その隣で目を閉じる。遠くで雷が鳴った頃、やっと意識は消えてくれた。

17 あの子のやさしさ

学校には、普通に通っていた。今まで通り、何事もなく。おれは、猫型ロボットをつくらなければならなかったから、授業中にあくびせず、前を向いていると、後でほめられた。

その代わり、校内の不良どもとの不仲は日増しに行動力を増していき、三、四人組の連中に廊下で出くわしたりすると、挨拶代わりに殴ってくるようになった。一人だと、気付いていない振りをするくせに人数が増えるとこれだ。しかも、おれの自分ルールを知っているから、二回までしか手を出してこない。ケンカだけ出来て可愛げのない南俊也は完全に敵になったのだ。遠慮はいらない。本気で嫌な奴らだ。偉そうなことを言いながら、完璧に腰が引けている、殴る直前にも、本当にいいのかと仲間に目配せして気を遣う。自分のすることすら、責任が持てない、一人だと何も出来ない、口ばかりのナカマがいないと、手を出してこない同級生とすら、すれ違おうとしない。大嫌いだ。やるならやるで堂々としていればいいんだ。寒気がするほど腹が立つから、あいつらなんて気にしてやらない。

変わったことといえば、兄妹そろって、給食を残さなくなったこと。元から、もったいない精神が強いのでそれはあまり変わらないけど、余り物の争奪戦にまで加わるようになった。じゃんけんで勝ったやつが、今日休んだ者の分をもらえる。中学生になると、女子の参加者なんてそういないから、マリはどうしてるだろうと不安になったけど、小学一年生には杞憂だったらしい。希望者の少ない、味気ないただのエネルギー源のようなパンをよく持って帰ってきては、どうだと言うように満足げな顔をした。中学に上がると、更に希望者が少なくなるから、おれも同じ物を持って帰っては、どうだとやった。

「トトロ探してー、ととろ」

ある夜、布団を敷き終わって、やれやれと倒れていると、そんな

ことを言ってきた。

「自分で探せよ」

「みつかないもん」

しばらく押入れのダンボールに頭を突っ込んでいたから、予想はついていたけど。

「何回見るんだよ。もういいだろ」

「そんなに見てないよ」

「見たよ。五十回は見ただろ」五十は言いすぎか。

「まだひやつかいは見てないもん」

百回つておい。きつと百回見たら、千回とか言い出すんだろっな。テープすり切れんじゃないか。

「おきてよー。ひとりじゃつまんない」

アザラシの鼻っ面を押し付けてくる。

「いいじゃんか、それトトロに似てるだろ」

「こつちはらあちゃんだよ。ぜんぜんちがうよ」

似てんじゃないか。丸い体系といい、ふわふわ感といい。そう言うときをとがらせて背中の手を当てて揺さぶってくる。しょうがない。まだ寝るには早いし。

お探しのビデオテープは、ダンボールの底から三十秒で見つかった。

「すごい」目を丸くしている。いったい何がすごいんだ。

トトロ似のアザラシのぬいぐるみを抱いて椅子に座ると、マリは目を輝かせて、おなじみの画面に釘付けになっている。おれは音楽だけで飽きているのに。その新鮮さが羨ましい。

少し視線をそらすと、電話が見える。最近一度も鳴っていない。母さんがどこに行ったのか、容易に見当はつくし、その電話番号も、すぐ側のメモ帳のどこかに書かれているはずだ。

だけど、おれは電話をかけなかった。何て言い出せばいいんだよ。うちの母さん、おじゃましてませんか、なんて。大人っぽくない人だけど、そんな台詞、言いたくない。繋がったとしても、どうした

らいいのか分からない。本当に、何て言ったらいいのか、おれには分からない。

だから、電話なんてかけなかった。

携帯電話の番号なら暗記までしていたけど、かけなかった。だって、なんて言えばいいか分からないし。充電器、おいてったんだぜ。とつくにバッテリー切れだって。必死で、そんな言い訳を自分に作る。

だけど、本当は違う。おれが、母さんの携帯に電話をしないのは、この番号は現在使われていません、なんて無機質な声が返ってくるのが、怖いんだ。その言葉の意味する現実が、恐ろしいんだ。

分かってる。分かってるのに、見え透いた言い訳をつくる。ああもう、最近こんなこと考えてばっかだ。今はトトロを見てればいいんだよ。余計なことは考えなくていいんだって。

意地になって画面を食い入るように見つめる。不思議なくらい、内容は頭に入ってこなかった。

三日連続で、おれとマリはトトロを見続けた。

「あきちゃった」

過去何度か呟いたことのある台詞をマリがぼやく。だけど、一週間も時間を置けば、また平気で見られるんだろう。

意外にも、彼女は黙って眠ってくれる。しつこくぐずられても困るんだだけ。

嫌な予感、あいつを始めて見たときから、家に来たときからしていた。いつかこうなるんじゃないか、そんな考えが、霧のように立ち込めていた。マリも、なんとなくそれに気付いていたんだろう。だけど、どうしたらそれを散らすことができるのか、二人とも分かんかったただけなんだ。損だよな、マリ。

駄目だ。寝ようとしても、眠れない。なんだか、頭の中がぐるぐるして、落ち着いてくれない。何かすることがあればいいんだけど、学校に行ったり、ご飯どうしようかなんて相談したり、皿洗いなん

かしていたら、かろうじてそのもやもやを取り払えるのに、寝る前だけは、どうしても駄目だ。

カーテンは引いていない、月明かりにぼんやりと浮かび上がる部屋で、どうしようもなく身体を起こした。座ったままでいると、悪いことばかり波のように打ち寄せてきて、膝に顔をうずめた。

おれが、あいつに懷けばよかったんだ。そうすれば、こんなことにはならなかったのに。現実主義だって自負してるけど、考え出すと止まらない。

おれのせいなんだ。どうして、出来なかったんだろう。意地をはっていったんだろうか、親を取られるなんて、子どもじみた考えの結果だったんだろうか。もっと我慢していれば、悪い予感を無視し続けていればよかったのに。

胸の辺りが苦しい。そういえば、この前もこんな薄暗い中で苦しがつてた。だけど、今度はちよつと違う。油断すると、暗闇に押しつぶされそうだ。途方もなく巨大な世界に取り込まれて、消えてしまう。

どうして、どうして嘘をついて笑えなかったんだろう。母さんだけは大丈夫だと思って、何もしなかった。大丈夫だって。ああ、おれは何てつまらないことをしてしまったんだろう。本当に馬鹿だ。どうしようもなく。

ただ、マリだけは連れて行って欲しかった。おれなんかより、母さんと居たほうが、ずっと笑えるはずなのに、幸せなはずなのに。二人は無理でも、片方だけとは、この小さな手とは、手を繋いでいて欲しかった。マリはきちんとあいつに懷いていた。その資格は十分あったはずなのに。

おれのせいだ。上手く馴染めていれば、その努力さえしていれば、心を殺していればよかった。そうすれば、二人の手が離れることなんて、なかったのに。

ふと、シャツの脇腹辺りが、軽く引つ張られた。

「にいちゃん」

はつとして顔を上げると、眠たそうに目をこすりながら、マリが上体を起こしていた。その小さな右手が、裾を握っている。

「どうしたの」

「マリ……」

澄んだ瞳が、眠たげに見上げる。おれと一緒に取り残された、何の罪もない、純粹な七歳の妹。

「ごめんな。全部、おれのせいなんだ」

呟いて、膝に額を押し当てた。罪悪感が、果てしなく溢れてきて止まらない。

「おれが、もつと考えてたらよかったんだ。つまらない意地張ったから、帰ってきてくれないんだよ。おれのせいなんだよ」

マリは何も悪くないのに。それなのに、一緒に置いていかれた。それが一番、辛い。彼女を連れて行ってくれるなら、なんだつとする。斉藤に頭を下げて、親父に気絶するまで殴られても、この部屋にこのままずっと独りぼっちにされた方がいい。だけど、それが許されないから、悔しくて情けなくて、たまらなかった。

「だいじょうぶだよ」

寝ぼけていることも重なって、そんな弁解に意味も分からず首を傾げていたマリが、背中を撫でる。

「兄ちゃん、だいじょうぶだよ」

小さな手が、何度も背中を撫でる。「いいこいいこ」と、母さんがよくしていたように、優しく繰り返し返す。わけもわからず、ただ繰り返し返す。

どういうわけか、急に泣きなくなった。泣かない子だって評価され続けているのに。

泣くわけにはいかない。何とか堪えて、やっと笑いかけることが出来た。マリが、それを見て嬉しそうに笑った。

今日、近くのマンションで、飛び降りがあったらしい。夜、ローカルニュースをつけっぱなしにしていた、始めて知った。そういえば、三日ぐらい前も似たような話題だったな。はやってるのか。まさか。

七階から天上に飛び降りたのは、三十過ぎの会社員。その前は、二十歳の女子大生。

そういうのを聞きたび、どこか不思議な感じがする。おれにとって大人というものは、絶対的な存在だった。何でも出来て、自信があつて、一人で生きていける「大人」という生き物に、人は必ずしもなれるんだと思っていた。だけど、人間はそんな生き物ではないらしい。

それを知ったとき、安心した。漠然とした何かが蒸発していった。他人と同じだけ月日がたつたとしても、おれはきつと、そんな人間にはなれない。どうしようもなく馬鹿な、稀に出来てしまう、欠陥品なんじゃないか、ひとりだけ、何にもなれず、置いていかれるんじゃないかと思っていた。だから、完璧だけで世界は成り立っていないことを知ったとき、やっと、自分の足が地面を踏んでいることに気付いた。つまり、ひどく安心したんだ。

不意に、玄関のチャイムが鳴った。

「だれか来たよ」

心細い声でマリが知らせに来て、おれは黙って頷いた。ついてこようとするのを制して、ドアのチェーンをかけたまま、ゆっくり鍵を開ける。夜だと部屋の明かりや物音が外にもれるから、居留守も使にくいんだ。めんどいなあ。

見覚えのない、三十前後の男と女。うすっぺらい笑顔。用件は、言われなくても分かった。

信じれば救われる、何だその使い古された思考。そんならあんた

らは救われてんのか、こんなセールスマン紛いのことが生きがいの
のか。わかんねえなあ、おとなって。

「お母さんはおられる？」

右から左へ抜けていく言葉の中で、女がそんなことを聞いてきた。

「いない」

「お父さんは」

「いない」もつといねえよ、そう思いながら上目遣いに呟いた。

「何時ごろ帰られるのか分かるかな」

知るか。いないって言ってんじやんか。そのまんまの意味だよ、
いねえんだよ。そう思ったから、

「いないって言ってんだろ！」

声を荒げて力任せに取っ手を引いた。向こうから握られているの
には気付いていたけど、いきなりだったから、止められなかったら
しい。必要以上に大きな音を立てたドアにすぐさま鍵をかけ、背中
を押し付けた。男の怒声。ドアを蹴られる振動が、背中から伝わっ
てくる。

「だれ」

奥からマリが顔を出し、小さな声で訊ねる。「なんでもないよ」少
しでも安心させたくて、できる限り声を落着けて返事をした。

それにしても、人は大人になっても何かにすがりたがりたりする
ものらしい。先程、何も考えずに受け取ってしまった、怪しさ極限
の本。貰える物は貰っとけっていつても、限度があるだろ。何やっ
てんだよおれ。

すぐ捨てるには紙がもったいない気がして、ちょっと読んでみた。
この意識がいけないんだろうなあ。

どうやら、二百ページ超にわたって、世界をつくった何とかって
人の壮大な歴史がつづられているらしい。ところどころに、この国
の危うさ、このままだと壊滅するらしいことが仄めかされている。
そっか、みんな滅んじやうのか。なんだそりゃ。

なんだかんだで、進行形で読んでいる。やばい、洗脳される。

急に電話が鳴って、本を放り投げて飛び起きた。ここ二週間近く鳴らなかった呼び出し音。一体誰が。警察、学校、間違い、いやそれとも。

いろんな考えが姿を現して散っていく。くだらない勧誘であつて欲しい。そうでないと、きっと、この現状に致命的な亀裂を走らせる誰かになるからだ。受話器を取るのが怖い。だけど、時間をおくともっと怖くなる。だから急いで、機械の元へ駆けつけ、ひと呼吸おいてすぐさま受話器を握った。「はい、南です」焦燥が伝わらないようにするのに、少し苦勞した。

声を聞いた途端、思考が完全に停止した。

一瞬後に、冷水をぶっかけられたように、身体が強張る。反対に戻ってきた思考力が、最大限で働き出した。だけど、同じ考えを繰り返すだけで、ろくに返事も出来ない。

どうしよう。ああ、どうしたらいいんだろう。

それだけがぐるぐる回って、不器用に「はい」としか声を出せない。怪しまれるかどうか、それを気にする余裕なんて、小指の先程もない。

この国では、十四歳と七歳の兄妹が二人ぼちでいることはそうそう許されない。その現実が平静を奪い、抑えていた暗いものを溢れさせる。成す術もなく、立ち尽くしているしかない。

やがて通話が途絶えても、すぐに受話器を置くことが出来なかった。普段の数倍もの労力で、やっと腕を下ろすことができた。

19 長すぎる夜へ

翌日の木曜、学校に行っても、いつも以上に黒板の内容なんて頭に入ってこなかった。どうでもいい景色の一部だと思えなかったんだから、仕方ない。

昨晚、受話器を戻した後、ぬいぐるみを抱いてやってきたマリを振り返ったおれは、どんな表情をしていたんだろう。とてもじゃないけど、安心なんてさせられないものだったと思う。

「明日、おばさんが来るって」

そんな月一の習慣が、今はどんな影響をもたらすのか、彼女はすくには分からなかったらしい。

「ここには、いられなくなる。二度と」

二人ぼっちでいるなんて、本来ありえないことなんだから。大人に知られれば、それなりの措置が取られる。到底、この二週間のような生活を続けることはできなくなる。お留守番にしては、長すぎるんだ。

そしてどうなるんだろう。きっと、どこかに引き取られるはず。親戚の元なんていつても、兄妹二人そろって、なんて難しい。どうなっちゃうんだろう。

ただ、これだけは、はっきり分かった。この場所を離れて、全然違う生活をしなければならなくなる。おれにとって、それはすごく嫌なこと、ひどく、普遍の現実だった。

「どこに、いつちゃうの」

「分かんない。でもこれから、ここを出て、バラバラになっちゃうかもしれない」

「えっ」

心細い声で訪ねていたマリが、大きな眼を更に大きく見開いた。そしてその瞳は、次第に水気を帯びていく。込み上げてきた涙が、頬を滑り落ちていく。

「やだよ。やだよ。そんなことしたら、おかあさん、かえつてきても分かんないよ」

いつの間にか、口にははいけなくなっていた言葉。お母さん。七歳の彼女まで口に出さなくなっていたその言葉が、久しぶりに空気に溶けた。

マリには、耐えられなかったんだろう。ある日突然、母親に見捨てられたという現実と向かい合うには、幼すぎたんだ。だから、いつか帰ってくる、そう信じる形で、心を保っていたんだ。

「マリ、ずっとおうちにいたい。兄ちゃんといっしょに、おうちにいたい」

肩を震わせて泣き出した。ぼたぼたと、涙が腕の中のぬいぐるみに吸い込まれていく。しゃくりあげながら、泣き続けている。

「大丈夫、マリ、大丈夫だから」

その姿を見て、決心した。かがんで背中を撫でながら、精一杯笑った。

「おれが、なんとかするから」

根拠のない最大の決意に、目に涙をいっぱいためたまま、マリは一度頷いた。

なんとかする、偉そうなことを言っただけど、どうするべきなのか、どうしたらいいのか分からない。後に響くことのない、誰も傷つくことのない、一番良い方法。分からない。たった一つだけ思いついたことがあったけど、その為には昨晚、一言言っておくべきだったけど、もっとマシな方法があるはずだと思いがくねっているうちに夜は明けてしまった。そして、マシな方法なんて、何も思いついていない。おれの馬鹿、どうしてこう、思考の循環が悪いんだろう。

だけど、どうにかしないといけない。なんとか。おれが、なんとかしないと。

「おい、南」

急に近くで名前を呼ばれて、びっくりして顔を上げた。席の横に、担任のシーサーが立って複雑な表情でこっちを見下ろしている。四

十過ぎくらいの、ベテラン教師。あだ名の由来は、その存在感ゆえの守り神的なところからきている。今みたいな神妙な顔も、由来の一つで、それが可愛いという女子もいる。おれにはその感性がさっぱり理解できないけど、先生自体は嫌いじゃなかった。その寛容さと真剣さは、まさに「大人」のものだと思っていた。

「早いな、もうノート取れたのか」

「あ、いや、なにも」

その前に、今何の教科をしていたのか記憶が無い。シーサーだから国語のはずだ。そう思って黒板を見ると、後ろの方に、筆者はどうして恥ずかしく思ったのか、とか書いてある。さあ。人の感性はそれぞれだから。

そんなもので乗り切れるはずはなく、周囲の同級生は眉間に皺を寄せて考え込んでいた。そっか、だからこんなに異常なくらい静かなんだ。

「寂しいから、教科書くらい開けてくれな」

「ああ、はい、すいません」

「きついことは言わんから、しつかりしろよ」

小声のまま、そんなことを言われた。おれがぼかんとすると反対に、随分心配そうな顔付きをしている。

「だいたい、職員室か資料室にはいるからな」

肩を叩いて、そのまま机の列に沿って歩いていく。案外強く叩かれた。

相談しに行ってもいいってことか。そんなに悩んでる顔をしていたつもりはないけど、先生には分かってしまったんだろう。さすがだ。

「書けた人、手上げる。次、書けてない人。おーい、上げてないのはどっちなんだ」

多少のざわめきと共に、授業が再開される。

ごめん、先生。これだけは言えない。そう、内心で謝った。だって、先生も現状を知ったら、放つといてはくれないだろ。おれらは、

それがどうしても嫌なんだ。嫌だったんだ。

その日の帰り道、いつもの工事現場に影が立っていた。

最近、その影が濃くなってきた気がする。なんとなくだけど、嫌な感じがする。禍々しい、とまではいけないけど。負、だろるか。ぼんやり、あるかどうかの表情がこつちを見ているのは昔からだし、いつものことだけど、それがより克明に感じられる。確かにはつきり何かを訴えている。それも、良いものじゃない。

振り返らなかった。これ以上、無理矢理何かを引き摺る気も、余裕もなかった。

急いで家に帰ったけど、やっぱり間に合わなかった。なにしろ、決断が遅すぎたんだ。五時過ぎ。茜たちはもう、家を出てしまっている。

決して良い方法とは言えない、むしろ頭の悪い方法。だけど、今更どうすることも出来ないんだと、なんとか自分に言い聞かせた。

何か言いたげなマリの視線を受けながら、アザラシのぬいぐるみを、押入れにしまった布団の奥に押し込む。心配ない、らあちゃん
は窒息しない。

「マリ、窓の鍵閉まつてるか見てきて」

「うん」

小さな足音を立てながら、他の部屋へ走っていく。

薄いカーテンを閉めて、足元に無造作に転がっている目覚まし時計を拾い上げた。もう出ないと。そう思いながら置き直そうとして、やっぱり転がしておく。いつも急だったから、片付けなんてそうやっていなかったのを思い出したのだ。

戻ってきたマ리에、もう一度念を押す。

「なんかあったら、絶対手つなげよ。そしたら離れたりしないから」
触れている限り離れることはない。似合わない神妙な顔つきで、
「うん」と彼女は頷いた。隠し切れない、必然的な不安をその中に

見つけて、確認するようにその手を握る。すぐに握り返してくるけど、それは消えないままだ。無理もない。おれ自身行き当たりばったりでこんなに不安定なんだから、それに振り回されるマリは、我俣を言わないだけ偉い。これ以上不安がらせるのは酷いことだと認めて、ゆっくり手を離れた。

部屋を出て、いつも通り首から提げている鍵を使って施錠する。長すぎる夜が始まった。

20 - 1 世界の片隅

なんとかあたりに立ち込めていた夕日も、あっという間に姿を消してしまい、無限に続くように思われる暗闇が迫ってくる。少し前より、その更に前より確実に深い夜が空気を満たしていた。

街頭のぼつねんとした光と、両脇の民家から漏れる声や物音で、かろうじてここがいつもと同じ世界の上にあることを思い出せる。いつもと窓一枚、壁一枚隔てた向こうにいただけだ、そう分かっているけど、似て非なる現実の中にいるような気がする。そんなわけないだろ、そう思っても、どうにもこの夜は果てがない。地球の裏側も、十二時間未来も、この暗闇に巻き込まれているんじゃないだろうか。

まだ八時過ぎ。しばらく帰れない。

「にいちちゃん」

横のマリが、今にも消えてしまいそうな細い声で呼んだ。

「なに」

「どこいくの」

すぐに答えられず、黙って彼女の頭を撫でた。指が、髪の間をさらさらと流れていく。だけど、こんなことで、不安はごまかせない。

「公園、とか……」

「こうえん？」

「あそこなら、隠れて……。いや、だめだ。なんでもない」

公園に紛れれば、誰にも見つからず隠れていられるかもしれない。そう思ったけど、だめだ。この付近の公園には、あまりよくない連中がしょっちゅう溜まっている。鉢合わせると、面倒だ。不幸にも顔見知りなんかだったら、もっと厄介だ。あまり近付かない方がいい。

人の近付かない場所、ということだ、あの工事現場を思い出した。だけど、もっとだめだ。昼間でも閑散としていて薄気味悪いあの

場所が、夜にはどうなっているか、考えただけで行けなくなる。単純な子どもじみた恐怖以上に、入れば出られなくなる様な、恐ろしいものがそこにあった。何より、本当に幽霊は出る。きつと、待ち構えている。この機会を狙って、あの場所にいる。

あれとマリを会わせることは、絶対にはいけないと思った。きつと取り返しのないことになる、そんな気がした。

悲しいぐらい、居場所はなかった。どうしようもなく、二人で夜を彷徨った。

そのときのおれは、途方もなく無力で、他に何も考えられないほど情けなくて、「明日、学校休もうか」なんて話しかけてやることしか出来なくて。それでも、声をかけるたびに、彼女は笑ってくれた。一層苦しくなったけど、互いの一番深いところを隠して、一緒に歩いていった。相手の苦しさが分かっていたから、わざわざ声に出す必要も無かったんだけど。それでも、そうやって存在確認をしながら、並んでいるのが限界でもあった。とにかく、他に誰も存在しない世界を、夜の闇を、ふたりぼちで彷徨い続けていた。

マリの歩き方がおかしい。口数も減ってきた。道路を隔てた向こうにあるコンビニの時計を見やると、九時を少しまわっていた。

疲れたのかな。そう思いながら声をかけようと口を開きかけたとき、すぐ脇の角から差し込んだ光が強く目に付き刺さった。眩しい。咄嗟に目を細めると、キツというブレーキ音と共に、一台の自転車が目の前に止まる。それに乗っている人の姿を見たとき、反射的に今はまずいと背を向けて逃げようと試みた。

だけど、自転車に勝つことは決して楽ではないし、今は小さな妹も連れている。その意識が、おれの袖をなんとか掴んで引き止めた。自動的に点灯するライトは、すぐに消えた。

「きみたち、こんな時間にどうしたんだい」

青い制服の、若い男が自転車を降りて問いかける。マリが怯えたように、袖にすがりついてくる。

「おつかいとかかい？」

温和な態度だけど、きつと甘くはないんだろう。それでも、曖昧に頷いた。そう思ってくれば越したことはない、上目遣いに見上げた。顔もあまり見て欲しくなかった。

「こつちにはなにもないけど」

「……帰りだから」嘘をついた。

「夜道は危険だからね。家まで送ろうか」

冗談じゃない。

手ぶらのおれらを見て、この警官は全て嘘だと知った上で、こんなことを言ってくる。嘘だと知っている。大人という場所から、軟弱で見え透いた子どもを見下ろして。

「きみ、名前は」

もちろん、答えられない。

「名前ぐらい言えるだろう。住所や電話番号でもいい」

黙ってたら家に連絡するつもりだ。最悪だ。

呆れを滲ませる男を、黙って見上げていると、やがて、溜め息を吐いて言った。

「こんなことを言うのもなんだけど、きみが思っている以上に夜は危ないんだよ。市民の安全を守るのが自分たちの仕事だからね、放っておくわけにはいかないんだ。危ない目には会いたくないだろう」極めて温厚に、諭すように。それでも、返事をする気はなかった。この人がやろうとしていること、それこそが、おれら兄妹にとって最も危険で避けるべきものだった。

「仕方ないな、少し来てもらおうか」

語気が少し強まる。交番にでも連行するつもりだ。逃げよう、そうしないと、全部が無駄になる。一番嫌な結末を迎えることになる。その肩越し、道の向こうの方に、一台の自転車が近付いてくるのが見えた。せめて、あれが来るまで。そう思いながら、じっと黙って、もはや隠すつもりもない敵意を持って睨み上げる。

早く。早く来てくれ。

「おい、返事をしなさい」

その態度に、向こうのイライラも比例する。マリがびっくりと身を震わせた。

「来なさいと言っているんだ」

相手の腕が肩に伸びてくる。自転車が脇をすり抜けようとやってくる。

明るい光が、一瞬、おれらを闇に浮かび上がらせた。

自転車が通り過ぎる、今だ。

ほんの少し意識がそれるタイミングを見計らい、眼前に止まっている自転車の脇腹を、思い切り蹴りつけた。

派手な音を立て、反対側の男もろとも、コンクリートに伏している。驚愕が空気を震わせて鼓膜まで届く。

それらに背を向けながら右腕でマリの身体を抱え、硬い地面を必死で蹴った。

「おい！ きみ！」

視界の隅にあるカーブミラー、自転車を押しのけながら怒鳴っている警官の姿が映る。

止まれ！ その声が背中を貫く。

大丈夫。大丈夫だ。確信を持った願いを全力でかけ、全力で走り抜ける。少しでも力を抜けば、あつという間に追いつかれてしまう気がする。追って来るのは、たった一人ではない。恐ろしいほど大きくて暗いものが、すぐそこまで迫ってくる。

追いつかれてたまるか。

右腕に、強く抱えた命の重み。そうだ。おれが捕まれば、必然的に同じ運命をたどることになる。これ以上、自分のせいでこの子を傷つけない。それだけをかけて、一心不乱に駆け続けた。何が追ってくるのか、何が聞こえているのか、どこにいるのか、段々分からなくなってくる。だけど、止まれば捕まる。捕まっただけはいけな

い。ひたすら、夜をかき分けた。かき分けられず、取り込まれながら。

一つ覚えのように、風を受けていった。

20・2 世界の片隅

なに。なにか、聞こえる。

「……にいちやん。兄ちゃん！」

やっと、その言葉が自分を意味しているんだと気付いて、足を止めた。

苦しい。何も考えずに走りすぎた。肩で息をしながら、あたりを見回す。街の中心に知らず知らずのうちに近付いてしまっていたようで、あちこちから放たれる光が、遠慮無しに暗闇を壊していた。

「ごめんな、マリ。苦しくなかったか」

抱えたままの彼女を下ろし、膝を折って訊ねた。かなり強く、必死で抱えていたから、さぞ苦しかったろうと思っただけ、マリは激しく首を横に振った。優しさから、振らざるを得なかった。

よしよしと、その頭を左手で撫でる。力を入れすぎていたせいで、右腕がまともに動かなかった。抱えていたときの角度で曲がったまま、伸ばすこともそれ以上曲げることも難しい。気付かれない様に、そつと左手で引っ張って伸ばしておいた。

ここは、夜だというのに人が多い。両脇にきらびやかな店が並ぶ通りを、呆れるほどの数の人が流れている。この人たちは、いつ眠るんだろう。大人は、寝なくても平気なんだろう。それとも、昼間に寝るんだろうか。だったら、いつ働いてるんだろう。そんな、どうでもいいことを一瞬考えた。

いつも窓から、星みたいだと眺めていた街には、これだけの人が行き交っていた。全く知らない世界に紛れてしまったような、不気味で不思議な感覚がした。

虫が光に集まるように、人の作った光に、人の下に、無意識のうちに誘われてしまったらしい。これだけの人がいられるのなら、おれらも、許されるかもしれない。

だけど、そんなものは、くだらない幻想に過ぎなかった。

にいちちゃん、と、マリが呟いて袖を引く。同じ方向を振り返ると、未だに落ち着かない呼吸が、一瞬だけ止まった。

明らかにこつちを意識している、制服の人。二人組み。さつき蹴り倒したやつより、厳しい表情をしていて、身体もでかくて頑丈そうだ。とても、さつきのように撒けるとは思えなかった。

「歩こう。目、合わすなよ」

差し出すと、その手をしっかりと、しがみつくように握ってくる。

無駄なごまかしで、二人に背を向けて歩き出した。人の流れを目指して大股で歩く横を、小走りでマリがついてくる、やっぱり、引き摺るような歩き方をしている。どうしたんだらう。不安が募るけど、足を止めることはできなかった。

声がかかる。そのきみ、だろうか、確かに呼んでくる。必死で無視して、わき目もふらずに前進する。やっぱり、太くて低くて怖い声だ。段々、声が荒く、頭を打つように響き、どんどん歩く速度も速くなっていく。

許されないんだ。十四歳の中学生と、七歳の小学生という子どもが存在している場所は、ここにはない。それでも、他にいてもいい場所なんて、どこにもなかった。

ついに、おれは走り出した。

同時に、怒鳴り声が空気をうちつけた。

「マリ！」

小さな手を強く握ったまま視線を落とすそこに、一生懸命走る妹がいる。大丈夫、ちゃんとここにいる。手を繋いで、ここにいる。

人の川に飛び込んで、出来る限り波をかき分けてすり抜ける。身体の小さいこつちの方が、断然有利なはず。

「うわっ」「ちよっと」すり抜けられず、押しのけられた人たちの罵声が鼓膜に迫る。男の人、女の人、ときおり投げられる、特に酷い言葉。わざわざ追ってくる人はいなかった。

それでも、始めにかかった怒鳴り声はまだ届いてくる。まだだ、まだ追いかけてくる。

おれは、何か悪いことをしてしまったんだろうか。夜を彷徨っているのは、そんなに悪いことだったんだろうか。どうして逃げてるんだろう。その疑問が、湧き上がって激しい呼吸と一緒に吐き出され、また生まれてくる。でも、逃げないとマリを守れない。その度に行き着くのはそこだった。

我武者羅に逃げた。ただ、全力で、駆けて、人を掻き分けた。だから、悲鳴に似た叫びが聞こえてくるまで、気付けなかった。

すっかりつないでいたはずの手が、だんだん離れていく。七つも年下の女の子が、おれの全力に並んでいられるわけがない。そんな常識にも、当たり前前にも、必死すぎた自分は、気がつけなかった。彼女の限界が脳裏をかすめ、走りながら振り返ったとき、

「にいちゃん！」

マリが精一杯叫んだ。泣きそうな顔が、視界に入る。手が、するりと離れた。

つないでいたい、離れたくない、互いに全力で思っているのとは裏腹に、呆気なく、手は滑っていった。

嫌だと、表情全てで表し、手を伸ばすマリの姿が、人と人との隙間に見える。前のめりの小さな身体が膝をつき、すぐに人の波に飲まれていった。

「マリ！」

全部、一瞬だった。名前を呼んだときには、もう遅すぎた。

どうしてこんなに頑張ったんだと、逆にもどかしいほど勢いがつきすぎていて、すぐには止まれなかった。死に物狂いで方向転換し、迷惑を露にする人の中へ飛び込む。学校で聞くのよりも激しい罵声と一緒にどつかれたけど、その当人の顔もよく見えなかった。どうでもよかった。

いない。およそさっきの場所まで戻ってきたはずなのに、小さな女の子の姿は、どこにも見当たらない。

途方にくれて数秒間立ち尽くし、元来た方向を目指して全力で走り出した。遠くまで行ってしまいうけがない、まだ近くにいます、

時間が空いたほうが、探し出すのは難しい。停止しかけた思考が、かろうじてそんなことを言ってきた。

見なきゃ見つからない、なのに、殆ど周りは見えなかった。心臓が、これでもかというほど運動し続けている。落ち着け、必死に言い聞かせて人をかき分けた。

勢いよく誰かにぶつかって、アスファルトに倒れた。一気に低くなった視界に、人の足ばかりが入る。両手で地面を押して再び駆け出そうと足を踏み出す。進みかけた身体が、がくんと後ろに戻った。片腕を掴まれている。何か言われた。構わずにふりほどいて走ろうとすると、嫌な音と共に、衝撃で顔が横を向き、左頬が熱くなった。やっと振り返って、自分を殴った男を見上げ、面倒なことになったと、内心で舌打ちした。

「人様にぶつかって素通りしようつてのか、坊主」

腕を掴んでいるその男が言う。周囲の連れらしきガラの悪い人間が、慣れた様子で壁を作った。ただじゃ逃がしてくれないんだ。

ちくしょう、と密かに奥歯を噛み締める裏側で、逆らわないほうがいい、と冷静でいられる部分がなんとかそう告げる。面倒ごとを広げるほど、ここから離れられなくなる。

「ごめんなさい」

息を切らしながら普通過ぎる言葉を吐き、落ち着け、と胸中で咳き続ける。

「まさか、そんなぐらいで許されるとは思ってないわなあ」

幼い子供に言い聞かせるように、顔を覗き込んでくる。顔を伏せて、上目遣いに見上げた。じゃあどうすりゃいいんだよ、そう思いながら、声押し殺す。

「人と、はぐれたんです」

「は、何言い出すんだ」

「妹なんです」

ここで止まっている時間なんて、本当は一秒だってないんだ。

「七歳の、小さな女の子」

焦りをそのままにして訴えた。じつとしてる暇なんて無い。はぐれたくない、見つけたい、それで一杯だ。

「知るかそんな。今はお前に言っただろが」
そう返ってきた。

ああ、こいつは駄目だ。そう判断した。

これ以上、ここにいっても仕方がない、冷静にそう思った。一刻も早く、逃げるしかない。

「とにかく、こっち来……」

最後まで聞かないうちに、腕を掴んでいる手を逆に握り、力を入れてひねった。

関節は鍛えられない。比較的小さな力でも、結構な痛みを与えられる。

怯んだところで腹に蹴りを入れる。肩から全力でぶつかって突き飛ばし、踵を返した。現実を理解できず呆けているやつらを押しのけて、再び駆け出した。

背中がひやりとする。くそガキ、と怒鳴る様々な声が追いかけてくる。怒号をそのまま受け止めれば、捕まると殺されるらしい。少なくとも、骨の一本や二本は折られる。嫌だ。第一、そうならマリを探せなくなるじゃんか。

我武者羅に駆け続けた。心臓は、この上ないほど激しく動いているのに、奥底は冷め切っていて、恐ろしさだけが込み上げてくる。もし、もう一度腕を掴まれた後に受ける痛み。それが引き起こす恐怖と寂しさと孤独。そして、今現在、あの子が感じているはずの、絶望的な不安。全部が一緒くたになって、あいつらと並んで追ってくる。背中を突き刺してくる。だから走った。それらに押されるがままに、ひた走った。

20 - 3 世界の片隅

何も聞こえなくなり、それでもしばらく経った後、アスファルトのでっぱりにつまずいて勢いよく転倒した。あちこちの皮膚が、すりむけて痛い。走りすぎて、息がしにくい。足が重い。

倒れたままのおれを、大人たちが見て見ぬふりをして去っていく。訝しんだり、不快感を込めた目でちらりと見下ろし、さりげなく迂回していく。道端で死んでた猫、あれもこんな風に、見なかったふりをされてたな、ふと、そんなことを思い出した。だけど、おれはまだ身体が動くと、そう確かめながら、立ち上がって、歩き出した。さつき見た腕の皮は、すりむけて血が滲んでいた。頬もやけにずきずきする。こっちは殴られたからかな。いや、反対だったつけ。分らないし、どっちでもよかったから、放っておいた。

同じ様に派手な光に挟まれているから、どこまで来たのか見当がつかない。さつきの場所からどれくらい離れてしまったのか、それすらも分からない。焦燥と恐怖だけが、心の奥で燻っていた。

もしかしたら、近くにいてもかもしれない。それだけを思っ、周囲を見渡しながら、さつきより少し人の減ったその通りを歩いた。

男の人に女の人すがって歩いている。同じ甘えるでも、茜のは全然違う。あの人の目と言葉はきつと矛盾してる、もっと入り組んだことを考えてるってすぐ分かる目で見られてるのに、男の人は気付かないんだろうか。気付いてて、あんなうすっぺらい笑顔を作ってるんだろうか。

すれ違うとき、女の人があつとこちに視線をやって、あからさまに顔をしかめて目を背けた。慣れない、香水みたいな、つまる様なおいがして、咳き込みそうになった。心が入っていないかん高い笑い声が、後ろから響いてきた。

高校生ぐらいの人たちが、一角で煙草の煙を吐いている反対側で、顔の赤い中年のグループが、抑制の聞かない大声で何か言っている。

舌はまわっておらず、最早言葉は聞き取れない。

何度も、足が止まりそうになった。出来ることなら、今すぐしゃがみ込んで頭を抱えてしまいたい。耳を塞いで目を閉じて、この世界と自分を遮断してしまいたかった。もう何もしたくないし、全てが悪い夢であれば、なんてあり得ないことを考えた。

だけど、止まらない。マリを探さないといけない、もう一度手を繋ぎたい。足を止めれば、絶望が確実な現実となってしまうそうで、果てしなく無力なおれは、歩き続けるしかなかった。

どういうわけか吐きそうになったのを何とか堪えると、代わりに暗くて黒いものが押し寄せてくる。

止まれば、もう歩けなくなる気がした。しゃがんでしまえば、立てなくなると思った。今にも、力が抜けて崩れてしまいそうだった。何とか歩きながら、辺りを見回す。人がいる。あちこちに、人がいる。今、何時なんだろう。どうして、死んだはずの夜がこんなに息をしているんだろう。

視線を無気力に巡らせていると、ふいに声が意識に滑り込んできた。言葉の意味はよく取れなかったけど、いつも聞いている声。今、最も望んでいるもの。

気のせいかと思った、願望から、錯覚が起きたのかと思った。それでも、急いで周囲を見渡す。もしかという希望と、まさかという矛盾した疑念が、入り混じり、溢れてくる。

それでも、もう一度はつきりと聞こえた。「いやあ」と、泣きそうなおの子の声が、確かに空気を震わせ、意識の焦点を合わせた。

どこだ、どこにいるんだ。立ち止まって、見落とさないように景色の一つ一つを探っていく。焦慮に駆られて気持ちだけが先走る。無謀についていこうとする身体を、何とか引き止める。

数少ない、シャッターの下りた店の前、もちろん照明なんか点いていない薄暗い夜の影。その前に立つ、小さな誰かが、三つほど建物を挟んだ向こうに、遠目に見えた。今まで気付かなかったのは、その子を自分と壁との間に挟む位置に、スーツ姿の男がいるからだ。

った。前かがみになって、子どもに何か言っている。その子はこれ以上ないほど、激しく首を横に振り、その度に、肩までの髪が大きくなる。

細い肩に手が触れられ、その子は自分の腕を目元に持つていき、しきりに、首を左右に振っている。泣いているのは明らかで、離してくれないらかった。

全力で駆け出しながら、そこまで見送り、ほぼ確信して子どもの名前を大声で叫んだ。ぱっと、その子は顔を上げ、すぐにこつちを振り返る。泣くのを堪えようと頑張っているらしい顔には、既に涙が頬を伝っていて、目を一度見開いた後、一気にそれを歪ませた。

「にいちちゃん！」と、涙の滲む声と共に、肩の手の存在を忘れて、駆け寄ってきた。

屈んで抱きとめると、マリは小さな身体を震わせてしゃくりあげた。何度も、こつちの存在を確かめるように腕や服の裾を握りながら、ぼろぼろと泣き出した。怯えきった背中を撫でて、その体温に触れ、何度も呼ばれているうちに、ようやく、例えようもないほどの安心感が湧き上がる。よかった、その一言ではとても表せないけど、本心から、全力で、おれは、「よかった」と呟いた。嬉しいとか、そういうものを差し置いて一種呆然としながらも、今度は、確かに一緒にここにいる、という現実だけで、足が立たなくなってしまうそうだった。あたたかい、確実な身体が、とてもありがたくて仕方なかった。

それにしても、と、おれは男を睨み上げた。四十過ぎほどで、おれより高さも幅も大分あるけど、筋肉質とはむしろ逆のようなそいつは、ようやく状況を理解し、あからさまに動揺している。警察なんて立派なもんじゃない、一目で分かった。しまったと顔にかいてある。こいつが、ひとりぼっちに、更に不安と恐怖を増大させて、与えていたんだ。

「てめえ、この子に何しやがった」

蛇口をひねれば水が流れるように、どんどん怒りが込み上げてく

る。それら全てを込めて睨んでいるだけなのに、びびって視線を泳がせている。情けない、そう思った。大人のくせに。

「さっさと答えるよ」

感情に任せてぶん殴ってやりたいのを、かるうじて抑える。かなりぎりぎりだ。

「べ、べつに、まだ、なにも……」

「まだってどういうことだよ！」

左手で相手の胸倉を掴み、怒鳴った。サイズの限界に及んでいるシャツは湿っていて、気持ち悪い。だけど、それを無視できるほど、腹が立つて仕方ない。この期に及んで何故こうも見え透いた嘘をつくのか。自分の三分の一ほどしか生きていない中学生が、そこまで怖いのか。最早不思議さを感じるのと同時に、哀れみさえ滲んでくる。大人がこんなものだとは、思いたくなかった。情けない。そして、面と向かって言えない理由から、こいつはマリアに触れて、あそこまで嫌がらせて泣かせたんだ。中途半端になんか、許せなかった。「ここまで泣かせて、しら切るつもりか」

「いや、そ、それは」

こんな人間に、プライドなんて傲慢なものは、髪の先程も存在しないと思った。

「でも、こんな、子どもが、こんなところを一人で歩いているのだって……」

だから、思わず、胸倉を掴む手に、それ以上ないほどの力を加えた。こっちの非を上げる、空気のような細かい反撃に、一層怒りが募った。

「てめえに言っただろ！」

微かに表した優位さを即座に引つ込めて、恐れだけを湛えて、目も合わせようとしない。更に、その顔を全力で殴ってやりたくて仕方なかった。今にも切れそうな理性が、必死でそれを阻止してくる。

「ぼ、僕は、迷子かと思って、それで」

「嘘ついてんじゃねえ！」

ついに、何も分からなくなった。爪が食い込む右手の拳を振り上げる。自分のしたことを何一つ認めようとせず、言い訳ばかりを繰り返して逃れようとする。そんな汚い大人が、この子に触れて傷つけた。一発ぐらい殴ったって、構うことはない。

だけど、その瞬間、あたたかいものが、脇腹に押し付けられた。殴れなかった。目に涙をいっぱいにためたマリが、しがみついてじっとこつちを見上げていた。もういいと、必死に訴えている。いわけなんてない。そんなわけないのに、一番傷ついている彼女がそう思うのなら、手を上げるわけにはいかなかった。優しすぎる子どもだった。

反射的に身を竦めたそいつへ向けた右手を、かなりの努力をもつて下ろす。大きく息をしながら、身体中を支配していたものを沈める。力を入れすぎた腕が、ほんの少し震えていた。

未だにびびるその男をもう一度睨みつけ、せめて思い切り左手で突き放した。よろけて尻餅をつくそいつなんて、二度と振り返らなかった。全てがみつともなくて、仕方ない。おれより三倍近く生きていて、あんなのだ。大人が完璧だなんてわけは、やっぱりないんだと思うと同時に、無性にどうしようもなく悲しくなった。

「行こう」

しっかり手を繋いで歩き出す。終わってくれない夜を、また二人で踏み出した。

やっぱり足を引きずるようにして歩いているマリを、見下ろす。

輝くネオン、陽にさらされることで張り詰められる理性を、緩ませる大人たちから今度は離れるべく、一緒に足を運ぶマリは、当たり前だけど、口数は少なかった。

「足、痛いのか」

こつくりと、一度だけ頷く。

「疲れたからか」

少し間をおいて考えてから、控えめに首を振って否定する。きゅ

つと結んだ口と、涙の跡が残る顔は、少しでも揺らせば消えてしま
う線香花火のように儚かった。思わず、握った手に力を入れると、
それでも、存在を示すように握り返してくる。

ふと、あの日のことを思い出した。

暗くて冷たい中、確然と触れるあたたかい手。砂のトンネルの中、
おれは確かにあそこにて、マリは確かにそこにいた。伸ばした手
の先に、自分を探し求める手だけが存在していた。

目を閉じてしまいたい世界の中、居ることは許されないこの街で、
小さな手だけは、認めてくれる。ここに居ることを、許してくれる。
どんな言葉よりも、どんな感情よりも、あたたかくて、確かなもの。
何があっても、何を失っても、これだけは、存在していて欲しい。
本気で、そう思えるもの。小さくて、大きな命が、隣で息づいてい
る。泣きたいほど、嬉しかった。

困ったような、泣きそうな顔で、マリはこっちを見上げた。

「あのね、足がね。足が、いたい」
細い声で訴える。

「足のうらが、いたい」

「うら？」

「うん」と彼女は頷いた。小さな手に、ぎゅっと力が入った。

20 - 4 世界の片隅

よく待ち合わせに使われている噴水の段に、マリを座らせた。照明はあまりなく、大分薄暗い。行き交う人々が、こっちに興味を示す風はまるでなかった。

靴を脱がせて、そっと小さな足に触れる。

柔らかい皮が、ところどころ剥けてしまっていた。赤い血が滲んでいて、痛々しい。

「靴擦れかな」

呟いて、どうしようかと考える。

洗ったほうがいいと、ふと噴水の水を見下ろした。名前にそぐわない程度に弱々しく吐かれて溜まった水は、薄い光を反射し、黒々としていて、綺麗に思える。滑らかに波立っている。だけど、そこで躊躇った。昼間ここを見たとき、空き缶が浮いていたのを思い出したためだった。傷口を洗えるほど、綺麗じゃないかもしれない。

どうしたら痛みを軽くさせてやれるか、消毒も出来ないし、絆創膏すら持っていない。

「ごめんな」

正面にしゃがみ込んで、傷口を眺めたまま言った。

「痛かっただろ、ずっと走ってて。おれがちゃんと気をつけてたら……」

頬に小さな手が当てられ、顔を上げると、マリは心配そうに首を傾げていた。

「兄ちゃんも、けが、してるよ。こっち、血が出てて、こっち赤くなってるよ」

控えめに、左右の頬を交互に触れられる。そうか、左側を殴られて、右側がすりむけていたんだ。

「うでとか、いたそうだよ」

言われた通りに見やると、結構派手に皮が剥けていた。そういえ

ば、やけにひりひりする。このときやっとな、思い出した。

「おれなんか、なんともねえよ。よく怪我してるし」

笑いながら頭を撫でると、ようやくマリは笑った。微笑んだ、という程度だったけど、おれはすごく安心した。

びくりと、マリが身体を震わせる。

怯える彼女が顔を向けた方向を、同じ様に振り向いた。酷い怒鳴り声が、飛び込んでくる。

おれより少し年上くらいの人達が溜まっていて、制服姿の警官に罵声を吐きかけた。それを取り押さえようとする警官達も、激しい台詞をかける。業務執行妨害、とかいうやつだろうか。ただの補導だろうか。高校生ぐらいの一人が、相手の肩に手を掛け怒鳴り散らした。

「だいじょうぶ」

恐ろしさに目を見張るマリに、声をかけた。

「ちよつと我慢しててな。よし、ほら」

底が出来るだけ傷に触れないよう慎重に靴を履かせ、しゃがんだまま背中を向ける。いつもふざけてぶつかってくるマリには似合わない、遠慮がちな両手が、肩に乗せられた。

よいしょと立ち上がりながら、軽い身体を支えてゆすり上げる。

「いいの？」

「だめなわけないだろ。いつもやってるじゃんか」

小さな声に返事をしながら、噴水の向こう側にある。錆びた時計台を見上げた。一時を少しまわっていた。

しだいに、喧騒が大きくなっていく。後ろの方から、聞き慣れた鈍い音と、とても酷い言葉が聞こえた。

ガン、と硬いものを蹴りつける音。一際大きなそれらが聞こえる度、背中のマリが、身を竦めるのが伝わってくる。だいじょうぶ、だいじょうぶだと、口の中で呟いた。

もう、こんなものを、この子に見せたくないかった。見る度、聞く度に、その心のあたたかいところが、乱暴に引き裂かれてしまうよ

うな気がした。

マリはもう、すっかり体重を預けて、脱力している。細い腕を回して、片頬を肩にもたせかけている。

何が、おれが何とかする、だ。密かに、内心で毒づいた。どうすることもできず、考えなしのおれは、ここまでこの子を傷つけてしまった。悔しいけど、ものすごく悔しくてたまらないけど、あの男の言った通りだ。こんな、明るくて暗い街に、この子を迷子にして計り知れない不安を与えたのは。おれだ。必死すぎて、たった一人の妹まで、失くしてしまうところだった。もし、あの声が聞こえていなかったらと思うと、身体が震え出しそうなくらい恐ろしい。そうならなくて、本当によかった。

息づく夜から出来るだけ離れようと。マリを負ぶって歩き続けた。それでも、夜中らしい澄み切った静寂は現れない。すぐ脇の道路を、テールランプを引き連れる車が、風のように行き交い、爆音を上げるバイクが、時折去っていく。

大人たちとすれ違う。目的があるのか無いのか、何かに憑かれた様に、夜を足早に動いている。数人のグループが、必要以上の大声で騒いでいる。

やがて、建物同士の狭い隙間に潜り込んだ。薄暗く、ほこりっぽい路地裏。うとうとして眠りかけていたマリを下ろすと、はっと目を大きく開いて、ぎゅっとズボンの裾を掴んできた。

苦笑しながら、その背中を軽く叩いて座らせた。横の壁にもたれて、地べたに座り込むと、一気に疲れが押し寄せた。重力が二倍にも三倍にもなってしまったかのように、身体が重い。

「疲れただろ、寝てていいよ」

マリはぴったり身体を寄せて、小さな身体を更に小さくして縮こまっている。限界まで疲れているだろうに、まだ緊張して強張っている。その姿が、哀れでなかった。

「兄ちゃん」

「おれは起きてるから、だから、寝ても……」

「どこにもいかない？」

じつと、濡れた瞳が見上げてくる。大きく見張ったその中に自分の姿を見つけた。

不安なんだ。次に目を覚ましたとき、ひとりぼっちだったら。そう考えただけで、この子は張り裂けそうなんだろう。

「どこにもいかないで。ずっとここにいて」

細くて小さな声のはっきりそう言い、すぐるように、小さな手がシャツを握った。

「兄ちゃんは、ずっと一緒にいて。おねがい」

「兄ちゃんは」確かにマリはそう言った。

分かっているんだ。母さんは帰ってこないって。ふたりぼっちなんだって。

細くて、今にも壊れてしまいそうな肩に腕を回して抱き寄せた。

「大丈夫。おれは、どこにもいかないから。ずっと、マリと一緒にいるから」

そう言うのと、マリはこくこくと何度も頷き、押し付けるように身体を寄せる。あたたかい、その命を、できる限り優しく撫でる。大丈夫、絶対だって幾度か繰り返すと、その度に小さく頷き返し、いつそう強くシャツを握った。

ここは、かつて部屋の窓から眺めた、明るい夜の街。星みたいだ、そう思っていた。

だけど本当は、星だなんてきれいなものじゃなかった。人が作る、暗闇を破るためのくすんだ灯り。どろりとして濁ったそれらがぶつかり合って、ぼんやり光る。それがあまりにも多かったから、星みたいに見えたんだろう。何も知らず、単純にただひとこと、そう思ったんだろう。

そんな明るそうな場所だから、少しの間隙間を借りることぐらい許されるかもしれない。一瞬でも、おれはそう思った。根拠のない、幼く脆い発想だった。

世界は広くて丸い、そこが世界の中心。よく言われる言葉。

でも、おれは、世界の隅を見つけてしまった気がした。この路地裏は、暗くてか細い、忘れられた場所。誰の目にも触れない世界のすみっこ。おれたちにぴったりで、もう、居場所はここしかない。あの光は、怖すぎる。

やっぱり疲れ果てていたマリは、気付くと寝息を立てていた。小さく上下する肩を抱いたまま。路地の向こうに視線を向ける。

縦長に切り取られた世界を、右から左、左から右へと、大人たちが去っていく。彼らはこの街に認められている、そのはずなのに、その目は虚ろで、まるで、居場所を求めて彷徨っているように見えた。そうでなければ、目を異様にギラつかせて、必死で相手にするうと騒ぎ立てるか、何かに追い立てられるかのように焦燥を溢れさせて、据えた目を正面に向けているか。そんな人達が、たくさん見えた。

どんなに必死になってもその世界にすがりつけなかったおれよりは、マシかもしれない。でも、あんな風にはなりたくない。

何て言っても、ここにいないしかない。だから、ふとこっちに目をやった人達が、一人残らず、嫌なものを見た顔で呟いて去っていく。でも、文句は言えなかった。不安定で眩暈のするような世界を一杯睨みつけてやるだけで、限界だった。

少し眠ってしまったかもしれない。それでも、いつも通りに朝はやってきた。

太陽にあたためられ出して、ようやくこの街は眠りについたみたいだった。通りは、昨夜の喧騒が嘘のように、人がいなくて静まり返っている。目に厳しいネオンと対照的な、白みがかかった柔らかな光が立ち込めていた。

すっかり蹴飛ばしてしまった空き缶が道路で金属音を響かせ、背中では眠っていたマリがぴくりと動き、きよろきよろとあたりを見渡す。背中越しに伝わってくる。

「あさ、なつたの」

寝ぼけた声が聞こえる。

「うん。帰ろう」

そう答えて、車の通らない横断歩道を渡った。巨大な生き物が穏やかに息を引き取った、そんな風に静かで、どこか寂寞とした街が広がっていた。

20 - 5 世界の片隅

鍵を開けるときは少し緊張したけど、やっぱり部屋には誰もいなかった。

くすんだ空気を入れ替える為、窓を開けに、マリが部屋を行ったり来たりする。その間に、台所のテーブルに置かれてあったメモを読んで、小さく折りたたんでポケットにしまった。

約束通り、布団を敷くついでに、潰れたアザラシを引っ張り出して抱かせてやり、イスに座って、もう一度よく考え直す。ぬいぐるみを左右から押して形を再生しようとするマリも、隣に座った。

台詞を一字一句紙に書いておこうか、そう思ったけど、やめた。一人で喋り続けるだけならいいけど、相手がいる場合、予想外の質問をされるかもしれない。そんなとき機転が利かないし、余計に怪しまれるだろうから。

寝不足でいつも以上に使い物にならない脳を、全力で働かせる。もし直接手で触れるのなら、一発ぶっ叩いてやりたい。起きるこのやろつて。しょうがないから右頬をつねると、異常な痛さに声が出た。きょとんとしてマリがこっちを見上げた。

そのときやつと思い出した。眠すぎて気付かなかったけど、見下ろすと、身体のおちこちがすりむけていて、服に血が滲んでいる。しかも制服だし。めんどいなあ。

時刻は、まだ六時前だった。風呂場でマリの足を洗い、消毒やガーゼ等の処置をした後、大げさだけど念願の包帯を巻いてやる。布が、傷のない肌に触れるたび、彼女はくすぐったそうな笑い声を漏らした。

時間があつたから、自分の方にも幾つか絆創膏をはって、血がこびりついた服を洗っておいた。その間、ぬいぐるみを抱いたマリが、終始隣にくっついてくる。互いに、交わす言葉はなかった。代わりに、濡れた手を拭いた後、頭を撫でてやった。

再び一息ついて、そうだと冷蔵庫を開ける。やるせない、その時の気持ちを一言で表せば、そんな感じだったと思う。

出て行く前には底の方に両手に収まるほどしか残っていなかった麦茶が、容器の口元まで増えているのは、合鍵を持っている宮里家の人達が来ていたという、明白な証拠だった。あと、タッパーが数個そこにある。そういえば、メモにそういうことが書かれてあった。申し訳ないほど、いつもと同じだった。

「麦茶、飲む？」

そのやるせないさを振りほどく為、マリの方を振り返った。

「うん」と頷いて、彼女はイスから降りる。アザラシの代わりに抱えてきた二つのコップをテーブルに置いて麦茶を注ぎ、片方を渡すと、彼女は両手でそれを持って口をつける。二度ほど息継ぎしてすぐに全部飲んでしまった。そういえば、十二時間近く何も飲んでいない。

おれは、水よりも緑茶よりも、喉に痛い炭酸系のものよりも麦茶が好きだけど、このときの方が一番美味しかったと思う。冷えたそれが、疲れ切った細胞を引き起こして、あと少しだけ頑張らせてくれる気がした。

コップを置き、一度だけ大きく息を吐く。これが溜め息って言うんだろうか。今までもろくにすることがないのに、らしくない。おれ、馬鹿で単純なはずだろ、溜め息つくほど悩むぐらい複雑な頭してねえくせに。まったく、情けない。

「ちよつと、向こう行つてて」

「えっ、なんで」

いきなりの言葉に、マリは首を傾げた。

「えっと、おれ、今から電話するから。……それで、すぐ寝るからさ、毛布とか出しといて」

つまりながらも答えると、「はい」と返事が返ってきた。小さな足音が隣の部屋に移動した。本当は、聞いて欲しくないから、だった。進んで嘘をつく様子を見られたくないから、どうでもいい用

事を与えて、離れさせたんだと思う。

留守電は入っていない。ひと呼吸置いて、ボタンを押した。

一度、二度。四度目のコールの半ばで、ぶつりと音がし、聞き慣れた声が続く。

「あ、あの、えっと」

土壇場で戸惑っていると、「俊ちゃん？」と先に言い当ててくれた。

「やっぱり。電話かけようと思ったんだけど、いつ帰ってくるのか分からなかったから」

素直に謝ると、「いいのいいの」と、笑ってくれた。

「昨日は、急に母さんの職場に行くことになって、それで……」

金曜日には、たまにそういう日があった。夕方に、マリと一緒に電車で行くと、自分が呼び出したにも関わらず、母さんはすごく嬉しそうに笑った。だから、どれほどいきなり連絡されても、拒否したことは一度だってない。

その話をしているのを聞いたことがあったから、たとえ昨日が木曜でも、信じてくれるはず。そう思って、もうありえない大嘘を吐いた。

そして、そのまま信じてくれた。「そうだったの」おばさんの言葉が、突き刺さった。

「いえね、そうかもしれないって思って。かつてにおじゃまして、ごめんなさいね」

そんなことないですと即座に否定した。極度に緊張しているおれとは対照的に、返ってくる声はあくまで気軽で、いつもと何も変わらない。

「あつ、それでお母さんの携帯に電話かけてみたんだけど……」
びくりと、受話器を握る手が震えてしまった。心臓がどきどき騒ぎ出す。

「繋がらなかったのよ。繋がらないっていうより、この番号は使われていませんって。最近携帯変えたの？」

力が抜けて、へたり込みそうになった。落ちそうな受話器を何とかが握って立っているけど、恐れていた現実にもとにぶち当たってしまったことが、残り少ない氣力を奪っていく。水の中に突き落とされたように、全ての音が、物が、遠ざかっていく。

だけど、脆くて儚い何かが、かろうじて、「かもしれない」と掠れた声を出させた。それは、答えなきやという自分自身の意思だったのかもしれないし、勘付かれることへの恐れ、もしくは、いつかの妹の泣き顔だったかもしれない。必死で、ここから逃げたがる心を握り締めた。

おれの言葉は、冗談として捉えられたらしい。それは当たり前で、笑い声が返ってきた。

「そうそう、本当にあのぬいぐるみ持っていくのね。ほら、真理ちゃんのアザラシの、なんとかちゃん。見当たらなかったから」

マリは、泊りがけのときはいつもあちゃんを連れて行く。母さんは、そんなことまで話していたから、隠しておいて正解だった。

「どこでも、持ってくんです」

「かわいいわね。ほんとに」

楽しそうだった。反対に、電話を切りたくて、自分の限界がすぐそこまで迫っているのが恐ろしくて仕方なかった。

入れてくれたタッパーのことなど、数分間話が続き、その間、おれはただ曖昧な返事とお礼だけを繰り返した。

「お母さんに、よろしくね」

最後にそう言われたけど、よろしくすることは、きつと二度と出来ない。

「はい。ごめんなさい」

もう終わりにしたい嘘つきと、いろんな意味を込めて謝った。大げさだとられたみたいだったけど、「ごめんなさい」もう一度呟いた。それでも、この口が動くことをやめても、今現在嘘はつき続けている。それぐらい、分かってる。

二人が来たときに、丁度で出かける振りをして、面と向かって断

つておく。それが一番マシな方法だと考えもした。だけど、もし目の前で母さんに電話をされたら、弁解のしようはない。それを止める理由は、本来おれにはないんだから。どちらにしても、電話をかけたのなら結果は同じだったけど、その場にいない、と言うことが重要なんだ。時間を稼いで後で言い訳を考えればいいと思った。

結局かからなかったんだから、よかったんだ。母さんは電話に出ない、いや、出られないんだから、それが分かったんだから、よかったじゃないか。

受話器を戻して、メモ帳をめくって、探し当てた番号を押す。さっさとしておかないと、かける気をなくして、出来なくなってしまう気がした。

兄妹そろって風邪を引いたという嘘をそれぞれの学校につくと、覆いかぶさるように疲れがやってきた。嘘のつきすぎも、なかなかしんどい。嘘の吐き疲れ、嫌なやつ。

自分の布団にうつ伏せになって、行き倒れのようにぼったり眠り込んでいるマリの横に転がると、頭が押し付けられるように重くなり意識がずっと引いていく。身体中が重い。倒れたまま、指一本動かせないうちに、沈むように眠った。

20 - 6 世界の片隅

重い瞼を開けて、視線を動かすと、珍しく倒れていない時計の輪郭が見えた。

今何時だろう。目をこすってよく見てみると、二時を少し過ぎていた。反対に首を回すと、布団から身体を半分はみ出させたマリが眠りこけていて、その向こうに、アザラシがとんでいる様子がある。転がして畳から布団に戻しても、呻き声もない。すっかり熟睡している。

水だけ飲んで再び寝転んだまま、ぼんやり考えた。いまはまだ五時間目の時間だ。頭に浮かべた教室の景色、その席の一つには、誰もついていない。

窓から流れる風が薄いカーテンを揺らす中、そんなことを思い浮かべると、少しだけ、ほんの少しだけおかしくなった。そのまま目を閉じた。いくらでも眠れる気がした。

次は六時前に目が覚めた。窓の外の景色は赤みを帯びていて、異常に早かった一日を感じさせる。

ようやく目を覚ましたマリと、テーブルについた。一瞬焦ったけど、今朝の電話を思い出し、冷蔵庫をあさって人並みの食事をすることに成功した。自分で何とかするには、少しだけ体力が戻っていなかった。

電話で言われた通り、煮込みすぎてじゃがいもが原形をとどめなくなってしまった肉じゃがを飲むように食べながら、沈黙を破るためにテレビをつける。静かでもいいけど、何となく、しっかりした音を聞いていたかった。

「これ、おうちの近く?」

「ご飯粒を口の近くにくつつけたまま、隣に座るマリが見上げる。粒の位置を、自分の顔を指差して教えながら、「うん。中学の方」

と答えた。マリはそれに気付き、右手を頬に当て、手にくつついたそれをぱくりと食べた。

また、自殺だ。こういうのは、たまに連鎖して立て続けに起きるということがあるらしい。

死にたいくらい、本当に死んでしまうくらい辛いことって、どれ程なんだろう。この人は、人間関係が苦しくて、二十六歳でマンシヨンの屋上から飛び降りた。気付いてやれなかったとか、こんなことをしなくても、そんな言葉を紡ぐ人達が映っている。

それより、死ぬほど辛い人間関係って、何なんだろう。割と一人でも平気なおれには、そっちの方が不思議だった。そうだとしたら、こうしてカメラの前で喋っている人達、それこそが、この人を苦しめていたんじゃないだろうか。

分かんないけど。いじめはなかった、いつも明るい人だった。そんなの、第三者の意見だ。表に出ない陰湿ないじめなんて腐るほどあるし、人は自分に嘘をついて生きてもいいける。そうしないと生きていけないときだって、ある。

苦しい理由。それを分かってくれないから、この人は命を絶ったんじゃないだろうか。

分かんないけど。遺書でもない限り、そしてそこに本当のことが残さず、理解されるように書かれていない限り、死んでから生きている人に何かを伝えるのは難しい。じゃないと、幽霊なんて元からいないはずだ。

おれは、死にたいと思ったことはない。どれだけ殴られても、耐えられないほど痛くても、自分でそう願った事は、一度もなかった。殺される、そう思ったことはあったけど、痛いのも、ましてや死ぬのも嫌だと、震えながら思っていた。震えるのは痛いのが嫌だったからで、死にたくないと思う頃には、震えることも出来なかったんだ。

諦めたことはある。あいつが出て行く日の夜、そのときはそれが最後になるなんて思いもなかったけど、その日は、翌日学校に行

けなくなる程痛いことになった後、両手で首を絞められた。

明確な殺意だった。それまでは、ただ殴るとか蹴るとかで、それも積み重なれば死ぬだろうし、実際死ぬかと思ったけど、動作としては、ただ痛みを与えるだけのものだった。

たけど、これは違う。痛みを与えるため苦しませるため、そうではない、殺すための方法。そうだとしか思えない。この人は、自分を殺したがっている。

死にたくないけど、首に食い込むその指には、本当に容赦がなく、もう駄目だ、そう思っても、離してくれなくて。だから、もう死ぬんだと諦めた。抵抗は、すぐに出来なくなった。

寸前にあまりごちゃごちゃと考えられたわけではないけど、ひどく悲しかった。この世に未練があるわけでも、反対に「生きたい」理由があるわけでもないけど、それでも死にたくなかった。ただそれ以上に、おれはきつと、そのとき目の前にいた人が父親だったから、あんなに悲しかったんだと思う。親にすら生かしてもらえない、どう頑張っても、砂粒ほど愛してもらえない自分が、悲しくもあったのかもしれない。親に殺される、その事実が、どうしようもなく。

あつてはいけないことのはずなんだけど、当たり前のような気がした。自分は、存在してはいけないぐらい、どうしようもない人間で、自分をこの世に表したのは、この半分を成り立たせているのは、この人だ。だから、自分を作った人に命を消されるというのは、至極当然のように思えた。おれはおかしかったかもしれない。けど、そう思わないと、あまりにもこの命がやりきれなかった。

こんなに細かくは考えられなかったはずだけど、つまりはその時、そう思ってた。

あのとき、おれは泣いたんだろうか。呼んだんだろうか。呼ばれたのかな。親父は出て行くつもりだったから、存在を許せない俊也を、最後に殺そうとしたんだろうか。ならどうして、死ぬのを見届けずにいなくなっただろうか。

ああ、思い出した。

きつと、あのとき、おれが……。

「どうしたの」

はつとしたたん、何か軽いものが床に落ちる音が響いた。

「兄ちゃん、どうしたの。ごはん、食べないの？」

不安そうに、マリが振り返る。

急に激しく動き出した心臓の音を聞きながら、何でもないと慌てて首を振った。

だめだ、こんなこと考えてたら。落ちた箸を拾って洗いながら、内心で自分を叱る。おれが不安定なままでどうすんだよ。一人じゃない、マリも一緒にいるんだから。おれがもつとちゃんとしてないと。

目を向けると、全国でおきた交通事故の統計結果を発表していた。最近こういうのばっかだ。

「そうだ、ドラえもん見ようか」

思いついてマリの方を振り返って言った。こんなニュースよりずっとマシだし、もちろん、マリがとびつく話題だと思ったんだけど。

「えっ」

きょとした顔と目が合った。

「あれ、見ないのか」

「うつん。見る」

首を大きく横に振って彼女は答える。それを見て少し安心したけど、この反応は全くの予想外だった。毎週見たい見たいと騒ぎ、関係ない曜日でさえ催促してくるマリには、似つかわしくない。だけど、首をひねりながらチャンネルを合わせると、いつもみたいに釘付けになっていたから、とにかく納得するようにした。

夜が更けて、恐れていたことがやってきた。

眠れないんだ。昼間寝すぎて、眠れない。

なんだよ、ガキじゃねえかなんて思われるようなことだけど、こ

の頃の俺にとつては、かなり大きな問題だった。ただでさえ、眠れなくなっていたんだ。

どうしてだろう。どうにも、胸のあたりが痛い。ここってなんだ、胃かな。胃が痛むって、よくストレスでなるって言うけど。おれがまさか。

おかしくなつて、暗い中、一人で小さく笑った。おれがそんなことで苦しむなんて。いつもいろんなやつに殴られて、殴り返してきて、今ごろ精神的なことが原因で胃が痛いなんて。ストレスなんて聞いても、弱っちいことだと否定してきた。神経質で臆病なやつになるもので、まさかそれが自分を攻撃してくるなんて思ってもみなかった。

それにしても、笑ってられない。針か、キリで刺されるように痛んで眠れない。横を向いて胸の辺りを強く抑えると、少しだけ楽になった。今のうちだと、目をぎゅっと閉じる。

やっとうとうとしてきた頃、大声で目が覚めた。

「どうした」

急いで起き上がって、泣き喚くマリの顔を覗き込んだ。

火のついたよう、まさにそんな勢いで、急に彼女は泣き出した。理由が全く分からない。喉から絞り出すように叫びながら、涙をばらばら流している。

「マリ、マリ！」

病気だろうか、どこか怪我でもしていたんだろうか。こんなに泣き出すなんて、ただごとじゃない。不安に支配されながら、名前を呼ぶ。とにかく、ちゃんと起こさないと、そう思い、背中を支えて半身を起こさせた。

マリは泣き続ける。意味の無い声を上げている。

その手が、泳ぐように宙を彷徨っていた。何かを探るように暗闇をかく手を、思わず握り締めた。

驚くほど強く、彼女は握り返してきた。きっと全力だけど、泣き叫んでいるこの子に、手を握っているという意識はない。すぎるよ

うな反対の手が、おれのシャツの裾にたどり着き、途端に強く握り締めた。

どうしていいのかわからず、あまった左手をマリの背中に回し、抱きしめながら何度も撫でる。最初よりは少し抑えているけど、しやくりあげながら、泣いている。

「うっ、うっ……。えっ、えっく。うあああ」

声を上げて震える身体を、ぎゅっと抱き寄せた。

「あああ。えっ、おか、おかあさん、おかあさん」

泣いている理由が、分かった。

何度も、マリは繰り返す。一番会いたい人を、側にいて欲しい人を、呼び続けている。

ずっと寂しかったんだ。まだ七歳のこの子は、おれよりずっと悲しくて、辛かったんだ。無理もない。それなのに、こっちを見上げては、いつも笑顔をつくっていた。

苦しいときに笑う。その虚しさと悲しさと淋しさは、よく知っている。

強く抱きしめた。震えながら、彼女は抱きついてくる。涙が、膝に落ちてきた。それは、熱い、悲しみだった。泣き疲れてしまうまで、マリは泣き続けていた。

21 接近、落下

上手く眠れない夜が続いた。

だから、代わりに学校でうとうとする頻度が、急上昇してしまうようになった。人の気配が多いこの方が、気が紛れて案外寝やすい。

だけど本来そんな場所じゃないんだから、一日何度も怒られることになる。そりゃそうだ。

「おはよう。よく眠れたか」

「……はい」

だから、授業中の先生からのそんな皮肉も、気にならなくなった。「それじゃあ立て。ここには何が入る」

理科の先生が、黒板をチョークで叩きながら言った。声音はそうでもないけど、苛立っているのがよく分かった。

立ち上がって目をこすりながら、じっと文字を睨みつける。穴埋めらしいけど、そもそも最初からずっと寝ていたから、分かるわけがない。これで分かったら、学校自体来なくていい。

おれよりも、周囲の方が余程緊張しているみたいで。教室内は静まり返っていた。チョークが黒板をつつく音だけが耳に刺さってくる。

「ほら、南。分かったか」

「分かりません」

素直に言っと、もういいという風に、着席するよう手で指示された。音を立てないように座って時計を見る。後十分。せめて起きていないと。

そう思っ、ふと窓から廊下を眺めて、思わずイスの上で仰け反った。小さな動作だったから、それに気付いた隣の同級生だけが驚いたようにこつちを見て、気まずそうに顔をそむける。

廊下にたたずむ影は、じっとしたままだった。

こんなところにもで現れたのは、初めてだった。
確実に、それは向こうからこっちに近付いてきていた。

十分後にはそれはいなくなっていたけど、悪い予感だけが、せりあがってくる。あいつはどうしたいんだ。何をしようとしているんだ。分からないから、胸の奥がぐしゃぐしゃにかき混ぜられたように、気分が悪い。

それでもなんとか昼まで耐えて、昼休み、ひとりで歩いていた。今月何度目かの生徒指導を受けるため、階段を下る。上がってきたやつとすれ違い、ふと思った。あ、こいつ、腕治ったんだ。それだけ。

「な、なあ、南」

だから、呼ばれたわけが分からなかった。おれみたいに先生ウケの悪い生徒を恐れている伊藤とは話したこともないし、向こうは、るくに目も合わせないから。

振り返ると、予想通りの、びくつき怯えた目が、相手の眼鏡のレンズ越しに見えた。そのくせ、一瞬、その中に何かを決意するしっかりしたものがちらりとのぞく。

あれ、こいつこんな眼ができるんだ。思うと同時に、腕が突き出された。

何が起きたのか、分からなかった。とっさに手すりを掴もうとしたけど、もう少しで届かなかった。

ぐらりとした浮遊感。

自分の身体が落ちていく。それが、やけにゆっくりと分かる。

強い衝撃が、背中を突き抜けた。

上と下が分からない。あちこち、肩が、腕が足が、硬いものにぶつかる。

踊り場に着いても、その勢いのまま、数回転がってやっと止まった。

「くっ……。……っっっ……」

背中が、鈍く痛む。情けない、かすれた咳が肺から漏れた。階段の角にぶつけたあちこちが、ずきずき音を立てる。腕が、痛い。

視線だけ何とか上げると、怯えだけでいっぱい目と目が合った。

「お、おい」

伊藤の後ろにいる二、三人の内の一人が、焦った声で促している。ああ、あいつらか。いつもなんやかんやうるさくて、斉藤に付きまとっている。

逃げるように、全員その場を捨てて去っていった。いや、逃げたんだ。

追いかけようとは思えなかった。身体中が痛くて、それどころじやなかった。

下から上がってきた誰かが、倒れているおれを見て、派手な声を上げた。

不本意ながら、保健室行きになってしまった。怪我したんだから当たり前なんだけど、ここはあまり好きじゃない。

「本当に、滑って落ちただけなの」

しつこく、保険医の先生が聞いてくるその度に、はいと間拔けた声を出し通した。伊藤に突き落とされたなんて本当のことを言うのは、あいつらの思い通りになったみたいで、悔しかった。

反射的に守ったから頭に怪我はしていない。そうだよ、これ以上悪くなったらどうすんだよ。一応病院で診てもらったほうがいいだろうと言われたから、帰って相談して決めると答えた。もちろんしないけど。だって、マリに言えるわけないし。

学力は劣っても、運動神経はあいつよりあったから、腕に青黒い痣が出来ただけだった。腫れの様子を見て、折れてないっぽいとした自分の素人判断に安心する。自分の面倒事に付き合っている暇はない。

「あなた、三年生よね。午後の授業どうする？」

後二時間教室にいても、十中八九、睡魔か気分の悪さに負けそう

だから、迷った振りをして断った。なんだ、ここだったら寝てても怒られないじゃんか。もう来る気はないけど。

薬品くさいベッドに横になる。遠くで体育中の掛け声が響き、それより近くの室内から、引き戸が空く音と、担任のシーサーの声が聞こえてくる。先生が来るまで起きていないと、そう思ったけど、ずとんと上手く眠れてしまった。

22 さみしいとき

この頃から気付き出した。

マリは、髪を結ばなくなった。お気に入りの青いリボンを握って、結んで、と、まわりつくことがなくなった。

「髪、結ぼうか」

こっちから尋ねると、「いい」と遠慮がちに首を横に振って、やんわりと笑う。

どこが、と訊かれるとはっきり答えられないけど、彼女はどこか、深いところで変わってしまったようだった。嬉しいときに表情全てで笑い、かまってほしいときにはいつでもまわりつき、かと思うと、すねてしまえばあからさまに口を尖らす、子どもらしい子どもこんな、寂しそうな笑顔をつくって遠慮なんて、しなかったはずなのに。

原因は分かっている。でも、おれにはどうしてやることもできない。

髪のびたから、切ろうか。そう言っても、いいよと小さく笑って首を振った。

マリの髪は、七年間ずっと、母さんが切っていた。自分によく似て茶色がかった娘の髪を嬉しそうになでて、いつも肩の辺りで切ってやっていた。マリも、おそろいの髪型で、満足げに笑う。

だから、肩を越すほど伸びてしまった髪は、彼女の孤独そのもののように思えて、目にはつきり見えるそれが、辛かった。

あんなに好きだったドラえもんも、おれが聞かない限り、見なくなった。忘れていた、というよりも、興味を失くしてしまったみたいだった。

そしていつからか、畳に転がったままのアザラシのぬいぐるみさえ、見るようになった。寝る前なんかは毎晩すっかり、側に控えさせているけど、それまでに手放している時間が、少しずつ増えてい

った。気をつけていないと見過ごしてしまうほど小さなことだけど、その考えに行き着いた途端、これはただごとじゃないなと思った。らあちゃんは、ひどく寂しそうに見えた。

四畳半の窓際の壁にもたれかかって座り込む。涼しい風が滑り込んでくるその先に、アザラシのぬいぐるみが伏せている。

基本的に身体が丈夫でよかったと、改めて思った。階段から突き落とされて数日経ったけど、どこか骨折していそうな腫れは、見当たらない。

ぼんやりと、街の灯りを見ながらよく考えたのは、これから先のことだった。

卑しいことに、もう誰も帰ってこないとはつきり決めた翌日の放課後、おれが向かったのは、下校途中にある銀行だった。そこで、母さんがおれらを餓死させるつもりはないことを知った。もし何かあった時のために、なんて言って通帳の隠し場所を教えてくれたけど、こうなることを予想していたんだろうか。そうじゃなかったらいいな、なんて。

その数字は、しばらく二人ぼっちで居られるだけはあったけど、いつまでももつわけではない。そして、夢現の中で聞いた公民の授業では、どうやら中学卒業前の児童は、働けないことになっているらしい。なんて厄介な取り決め。

窓枠の右半分に重なっている窓ガラスをじっと睨みつけた。反射して映っている向こう側の自分も、じっと見返してくる。

何歳ぐらいまでなら、嘘をつき通せるだろう。中学卒業だから、つまり、十六歳だって言えるか。年相応だ、やっぱり、無理な気がする。あんた、小学生料金でもいけるんじゃない。中学入学時に茜に言われたどうでもいいことを思い出して、少し腹が立った。流石にもう言われないけど。

その他たくさん、この世の中で生きていくことについて、呆れるほど、おれは何も知らなかった。

「ん」

気配に気付いて振り返ると、部屋の入り口、廊下側に、タオルを被ったままのマリがいた。

「どうしたんだよ」

何で突っ立ったままなんだろう。そう思っていると、小さな足音と一緒に、小走りで飛び込んできた。

ぎゅっと、マリが抱きつく。こっちの服を両手で掴んで、額を、胸の辺りに押し付けてくる。震えてはいない。至って落ち着いている。

「どうした。風呂に虫でもいたか」

タオルを取って、まだ少し湿っている髪をなでて聞いた。首を振って、マリは否定した。

「じゃあ、転んだのか」

それも、違うらしい。

「怖いこと、考えたのか」

首は振られなかった。

代わりに、小さく傾げて考えた後、

「わかんない」

頭を押し付けたまま、そう呟いた。

きつと、寂しいんだ。

最近、よく分かるようになった。どうにも、この世界には自分しかないんじゃないか、もしくは、自分はいないんじゃないか、そう思ってしまったとき、どうしたらいいのか。その答えを、マリは教えられなくても、自分で知ってしまった。

そして、彼女は結局知ることとはなかったけど、真夜中、そんな考えに襲われてどうしようもなくて、本当に困ったとき、おれはその小さな片手を握った。生きた体温に触れていると、どんなに多い心拍数も、驚く程少なくなった。

「大丈夫。ほら、だいじょうぶだから、な」

おれに出来る精一杯の応答。出来る限り慰められそうな言葉を繋いで、そっと背中を撫でてやること。

こうやって、おれたちは、生きていた。

窓の外に視線をやり、とっさに、薄いカーテンをさっと引く。どうしたのと見上げてくるマリに、笑いかけた。あの街灯の元でこっちを見ていたのは、確かにあの影だった。

マリに見せては、近づけてはいけない。それは何の根拠もない考えのはずだったけど、どうしようもなく正しいことだった。それを知ってしまうのは、もう少し後のことになる。

23 ついに

そうだ、これじゃいけない。

沈んでしまう部屋の空気に区切りをつけようと、提案したのが、大掃除だった。別に何でもよかったんだけど、これが一番手っ取り早い気がしたんだ。

「らあちゃんは、大そうじしないよ」

よっぽど洗われるのが嫌なのか、前日の夜から、マリはアザラシを抱きしめて何度も念を押す。

「お水、嫌いなんだよ」

「それ、アザラシじゃなか」

「らあちゃんは嫌いな。あわあわもいやなの」

まあいいや。きつと、らあちゃんは特別なアザラシなんだ。

土曜の朝、靴を引つ掛けたマリが、玄関のドアを全開にして、ストッパーで止めた。そして、学校でもやってるんだよ、なんて自慢げに言いながら、雑巾を絞る。非力な彼女が握ったそれを更に絞ると、ぼたぼた水がこぼれてきた。えー、なんて不満そうだけど、廊下を水浸しにされてはかなわない。

全てのドアと窓を全開にすると、すかさずになった部屋中を風がよく通る。やっと晴れた六月、気温は丁度いい。

普段使っていない部屋の押入れに久しぶりに潜り込むと、埃まみれの枕を見つけた。うすい、水色のやつ。

「マリ、これ誰のか知ってる？」

呼びかけると、なになにとすぐに寄ってきた。

「んーん、わかんない。見たことないよ」

おれが片手でぶら下げたそれに触れ、手のひらを見直して「わあ」と声を上げた。

「ほこりすつごいよ」

突き出された手に灰色のそれが付いている。使っ予定はないけど、

試しに玄関ではたいてみることにした。興味津々で、マリが後ろにくつついている。

「うっえっ。つくし」

湧き上がった埃が、舞い上がって顔を直撃した。まともに吸い込んだ。気持ちわるい。

あははと、マリが笑う。笑いごとじゃねえよと思ったけど、この明るい声は、しばらく聞いた覚えがなかったから、一緒に笑った。

正直使いたくない枕を、取り合えず四畳半に持ってきて、置いておく。

とたとたと、裸足の足音が、軽快に廊下を行き来している。足元不注意で、雑巾を踏みつけてすっ転んだのに思わず笑うと、「痛いもん」と何でもない振りをして言った。そのくせ、一生懸命額をこすっていた。

「にーちゃん、にーちゃん」

「んー、なに」

振り返ると、廊下と部屋の敷居まで、マリが駆けてきてひょっこり姿を現す。

「あのね、あのね、マリね」

満面の笑顔を浮かべている。

その彼女の後ろについて、並んだもの。

それを見た途端、ぞくりと悪寒が全身を突き抜けた。恐怖にすくむ前に、身体は先に動いてくれた。

「マリ！」

転びかけながら必死に側までの短い距離を駆ける。無理に力を入れれば折れてしまいそうな、細い片腕を掴んで、全力で引っ張り寄せた。

「ど、どうしたの。兄ちゃん、どうしたの」

混乱する彼女を抱えたまま、後ろも見ずに後ずさった。足が上手く動かなくて倒れてしまい、一緒に転んだ妹を抱き寄せて、腰を落としたまま尚もずるずると下がる。少しでも距離をおく為に。近付

かない為に。

「くるな！」

影に、怒鳴りつけた。

廊下から、じっとおれらの様子を見続けている、淡い影。表情は、相変わらずぼやけている、六、七歳ほどの、髪の長い子どもの影。

「消えろ！ 来るな、早く消えろ！」

おれは叫び続けた。

来るな、消えろと、狂ったように怒鳴った。

唾が喉の奥で絡んで、咳き込んでから気が付いた。

影は、消えていた。

「窓、全部閉めて……」掠れた、うめくような声を何とか絞り出す。

「にいちゃん……」

「いいから、早く！」

おどおど顔を覗き込んでくる妹に怒鳴り散らし、玄関まで、狭い部屋の中を走った。両手で取っ手を引っ張り、大きな音を立てて閉まったドアに急いで鍵をかけて、チェーンまでする。いつの間にかかいていた汗が、首筋を伝っていく、冷たい感触。それが消えないうちに、怖気づいて動作ののろいマリに代わって、窓を全部閉めて鍵をかけてまわった。風の通り道は、なくなった。

あの影は、おれにしか見えない。だから、マリから見れば、突然自分を抱きしめて何も無い空中に怯え、わけのわからないことを叫びだしたおれは、本当に狂ってしまったようだっただろう。

畳に所在無くちょこんと正座したマリの肩を両手で掴んで、揺れる瞳をしっかりと捉えた。正体不明の恐怖と緊張で、小さな身体はひどく強張っていた。

「マリ、これから誰が来ても、ドアを開けちゃだめだ」

乾ききった唇を一度舌で湿らせ、水分の足りない声で続ける。

「一人のときは。いや、おれがいても、マリがドアを開けちゃだめだ」

「……どうして」

細い声が、躊躇いながら当然の疑問を発する。

「どうしても、だめなんだ」

「だけど、そう言うしかない。幽霊が来るから、なんて非現実的な説明は、最早この子には通用しない。」

「あけるだけでも、だめなの」

「そう。いいな」

「でも……」

「マリ！」

正面切つて怒鳴られ、息を呑み、怯えたまま目を伏せる。やがて、こつくりと頷いた。

そのまま抱きしめると、すっかり元気を失った彼女は、されるがままにくたりともたれかかった。頬に、さらりとした髪が触れる。腕の中に、あたたかくて小さな身体がある。

とられてたまるか。強く思う。とられてたまるか。思う度に、確かめるように強く抱きしめる。

怖くて、離せなかった。離れた途端、この子は、知らない場所に連れていかれてしまうんじゃないかって、そんな気がして。こうしていれば、離れることはない。ひとりになりたくない。させたくない。

理由は分からない。けど、あの影はマリを狙っている。おれの直感に過ぎないけど、これは明らかだ。あいつは、この子を連れていきたがっている。

ついに、家までやって来た。今まで七年間、こんなことは一度もなかったのに。

怖くて、たまらなかった。そんな暗くて黒いものに飲み込まれてしまいそうで、恐ろしかった。

空気の流れない、こもった部屋の中で、おれはマリを抱きしめ続けた。すぐるように、ずっと、そうしていた。

24 帰る場所

朝、いつものように靴を履いて、鞆を肩に掛けてドアを開ける。

外の廊下に出て、ドアを支えたまま少し待っていると、赤いランドセルを背負ったマリが、間をすり抜けて部屋から出て、側に立った。鍵穴に首から提げた鍵を差し込みながら、自分はいつからこれを首にかけ出したのか、ふと、考えた。小学校に入る前からだったような気がする。紐はもうかなり傷んでいるけど、何回ぐらい取り替えたんだっけ。その先の、随分前に作られた合鍵は、すべりの悪い鍵穴になかなか収まってくれない。ちよつとコツがいるんだ。

にいちちゃん、と、聞き慣れた声が漂う。前を向いたまま返事をすると、彼女は続けた。

「マリね、ずつと、おやついらないよ」

意味不明なその言葉に、思わず左脇へ振り向いた。黄色い帽子の下から黒目がちな瞳を覗かせて、彼女はじつとこつちを見上げている。

「おもちゃもね、全部佳奈ちゃんにあげるよ」

佳奈ちゃんとは確か、三階に住んでいる、マリより一つ年下の女の子のことだ。甘えん坊なあの子とは、特に仲がいい。

「なんだよ、突然」

「テレビ見なくてもね、もう、もう花火見に行かなくてもいいよ」

ようやく鍵をかけ終わり、マリに向き直った。じつと見張った瞳が、二回、瞬きをした。喋り方から、彼女なりに必死に何かを伝えようとしているのだけは、よく分かった。

「らあちゃんもね、らあちゃんも、兄ちゃんにあげるよ」

「いいよ、あれ、マリのだろ。おれがもらってどうすんだよ」

ちよつとだけ笑いながら言うと、マリは少しほっとしたようだった。でも真っ直ぐに見上げたまま、瞬きすらあまりしない。似合わない。こんな真剣な態度、七歳の子どもがするべきじゃない。そう

思った。

「だからね、にいちちゃん、だから……」

急に声がしぼみ、迷うように顔を伏せた。帽子のひさしに隠れて表情は分からない、でも、させたくないものであることには、間違いなかった。

少しして再び上げたその顔は、隠せない不安に染まっていた。泣くようなときは、様子は違っていた。おどおどと、小さく口を開く。

「……はやく、かえってきて」

そんな消え入りそうな霞んだ声が、ようやく、細い喉から漏れた。そこでおれは、やっと分かった、そうか、気を遣ってたんだ。だから、こんなに真剣で、こんなにも頼りない声なんだ。

マリは、おれが必死なのを知っている。自分自身に強がって認めようとしないう、限界に気付いている。もしこれ以上重みをかけてしまえば、兄ちゃんは倒れてしまうんじゃないか。そう思って、堂々と願い事を言えないんだ。せめて、自分が何か失って、軽くなるうとしてるんだ。

それに気付くと、胸の奥が絞られるように苦しくなった。

「何言ってるんだよ、学校行っただけだぜ。すぐ帰ってくるよ」

そう言いながら、必死に笑いかけたけど、この必死さもばれてるかもしれない。頼って欲しいのに。マリが、おれなんかに気を遣わなくていいのに。

「おれは大丈夫だから。マリは、何も失くさなくていいんだ」

この子は、一人で留守番をしながら、こんなことを考えていたんだろうか。この小さな身体に、溢れるほどの寂しさを詰め込んで。

失くさなくていい。もう、十分に寂しい思いをしてきたんだから。膝を折って、不安げな視線と目を合わせる。

「また花火だつて見られるし、らあちゃんだつて、マリがずっと持っていていいんだ。そのままでいいから、そのままでも、おれはちゃんと帰ってくる。知ってるだろ、走るの結構速いんだぜ」

小さく頷くのを見て、帽子の上から頭をそつと撫でた。優しくしてやること、今おれにできるのは、それだけ。

「すぐ帰ってくる。だから、マリも寄り道すんなよ」

うん、とマリは大きく頷き、ようやく笑った。ああ、おれはこれが見ていたいんだ。このためなら、何だってやれると思った。

もちろん、学校でも、気が気じゃなかった。学校なんか別に好きじゃないし、もう行く意味なんて無い。なら、律儀に通ってる場合じゃないだろうと思う。だけど、できる限り、ちゃんと毎日通っていた。後になつてみれば分かる。おれは、以前と同じ日常が欲しかった。

「いいかげんにしなさい！」

びつくりして顔を上げた。眠気が一瞬で吹き飛び、よく怒る数学教師の顔を目前に見た。眉がつりあがっている。普段は起こると微妙に声が裏返るだけなのに、最早そんな域を超えている。

「そんなに眠いんなら家に帰って寝なさい、他の教科のときもずっと寝てるらしいけど、学校はそんな場所じゃないのよ」

早口で、そういう言葉を列挙する。わざわざ授業を中断して席までやってきて怒っている先生を、他の生徒達は黙って見ている。奇妙な静けさと共に、緊張が充満している。

キレてる。すごく、怒ってる。

先生には悪いけど、怖さを感じたりはしなかった。言葉だけなら泣くほど痛い目には会わないから。だけど、そんな冷めた態度は、火に油を注いでしたらしい。

「このクラスにも受験する子はたくさんいるのよ、自分が違うからってそんな態度をしてたら、他の子もやる気を失くしちゃうってわからないの？ いつも言ってるじゃない」

真面目な先生は、息継ぎも殆どしていない。

そうか、それは悪いよな。だけど先生、そんなにおれを気にかける人なんて、いないよ。南俊也は決して好かれてはいないだろうか

ら。嫌ったり避けたりする奴の顔は浮かぶけど、そういうやつしかおれを見ようとはしないよ。そんな奴らに、気を配りたくないんだけど。

それを言うほど、馬鹿じゃなかった。そんな思いだけが、腹の底に黙って沈んだ。

「南くん、あなた、どうしたの。最近変よ」

最後に、怒り半分、心配半分の声で言われ、どうしていいかわからず、「はあ」と呆けた声を返した。変。ヘン、やっぱり、おれは変なんだ。だけど、いつから、どうしてそうなったんだろう。おれは何をしてしまったんだろう。普通に考えててそう言われるんだから、やっぱり、変なんだ。

「放課後残っておきなさい」なんとか自分を抑える声だった。

「放課後は、ちよっと」

少しでも早く帰らないといけない、これは何よりも最優先だ。予想通り、先生はイラついたみたいだった。

「それなら、昼休み、指導室に来なさい」

有無を言わせない厳しい口調で言い、ロスタイムを取り戻そうとさつさと教卓に戻って行ってしまった。その背中に、「はい」と小さく呟いた。

予定通り指導室で待ち受けていた三人の先生達に、掃除の時間まで引き延ばして怒られ、代わりに放課後はチャイムが鳴って三分以内に校門を跳び出した。本当に、何しにここまで来てんだろう。それに、この学校って、こんなに厳しかったっけ。帰り道、一人でそんなことを考えた。

無事に家まで帰り着くと、マリはすごく嬉しそうに笑ってくれる口には出さないけど、よかったと、駆け寄ってきて抱きつくんだ。その気遣いでない本物の笑顔が、何より嬉しかった。

だから、笑っていて欲しかった。少しでも、楽しい思いをさせてやりたかった。

25 - 1 窮地の約束

外に出たほうが気も紛れるかもしれない、そう思って、買い物に行くときは必ず誘ったし、彼女も絶対についてくる。心配だから、家において一人で出て行くことなんて、するわけがなかったけど。

本当に、それだけの理由で、その日の夕方、二人で人の行き交う商店街まで歩いて行った。空は赤みを帯びていて、千切って伸ばしたような薄い雲が浮かんでいる。その下では、たくさんの人が流れている。夜闇の訪れる前のこの喧騒は、温かみすら感じられて、嫌いじゃなかった。街が生きている、この街は、生きている。そう思える、一日の内のわずかな時間帯。

そして、会いたくなかった。もう、二度と関わりたくなかったのに。

「なんだ、トシヤじゃねえか」

顔を見て、思わず足を止めてしまったから、余計目についたのかもしれない。

そうだ。人口密度が高いつてことは、遭遇する可能性もそれだけ高いつてことなんだ。

「まだピンピンしてんのか。しぶてえなあ、お前」

多分、伊藤におれを突き落とさせたことを言ってるんだろう。だけど、おれはあいつとは違う、斉藤に寝返ったりなんかしない。

そう思って、黙って視線を逸らさない、その態度が更に生意氣らしい。

「こんなとこで何やってんだ、ママのおつかいか？ おい」

ぴくりと、脇にいるマリが反応したのが、気配で分かった。

精一杯睨み上げ、「関係ない」と低く呟く。

「おー怖え」大げさに目を丸くし、にやにやしながら見下ろしてくる。

「なんだ、このチビ」「ム力つく面^{ツラ}してやがんなあ」斉藤の横か

らこつちを覗き込んでくる何人かが、口々にそんなことを言った。

校内で見かける奴らが少し、知らない奴は、多分高校生。おれよりずっと背が高いし、場慣れしてるように見える。今どうやっても勝てないだろう。

「もう、おれはあんたとは関係ないはずだ」

「は、あれで清算できたと思ってんのかよ。はつきり決着つけてえだろ」

口元はにやついたまま、目だけを細くして見下ろしている。本気だ。気が済むまでどうにかするつもりだ。

まさか、ここで。そう思って、背中を冷たい汗が流れたとき、

「にいちゃん……」

マリが消え入りそうな声で呟き、身を寄せた。

斉藤が、ちらりとその様子を目にする。

「てめえの妹か。かわいいなあ、兄ちゃん、だつてよ」

「手えだしたらぶつ殺す」

まとわりつく様な声に拳を握りこむ。その様子に、周りの奴らが一斉に笑い出した。殺すだと、ガキのくせに。そういう意味を含んで、見下して。

奥歯を噛み締めて耐えていると、その中の一人が一步こつちに踏み込んだ。そのまま片手で肩を突き飛ばされ、背後の電柱に思い切りぶち当てられる。急な動作で油断していた為、背中への衝撃がそのまま肺をつき抜けた。「うっ……」と情けない声が喉の奥から漏れた。

金髪で、ピアスの穴を耳に開けた顔が、余裕たつぷりで見下ろす。

「世間知らずのガキには、ちゃんと教えといてやらねえとな」

頬を吊り上げて笑う。必死に、唇を噛んで真正面から睨みつけて、無言の抵抗だけを続けた。

「あー。つとにム力つくんだよな、お前みてえなヤツ」

パチンと、下の方から音がした。

左腕でこつちの肩を抑えている、そいつの反対の手に、小さな何

かが握られている。

それを見た途端、全力で働いていた脳が一瞬で活動を停止し、自分が目を大きく見開いているのだけが、よく分かった。全身の血液が氷水に変わったかのように、身体が急激に冷たく感じられる。瞬時に、耳まで響くほど、心臓の鼓動が激しさを増す。

折りたたみ式の小さなナイフの刃先は、こっちの首元を向いていた。

戸惑う視線を戻すと、舐めるような視線と目が合った。

「言って分からねえヤツにはな、こうするしかねえんだよ」

そいつは、耳元でそう囁いた。

その表情も、よく分からない。ナイフが自分に向けられている、それだけが、意識の全てを占めている。

出したときと同じように素早く刃がしまわれ、肩から手が離れた。声も出せずにいる目の前を、げらげら笑いながら、そいつらが右から左へ歩き出す。

最後に、呆然と電柱に背を押し付けたままの肩を叩き、

「土曜。逃げんじゃねえぞ」

斉藤が低い声でそう告げた。

25 - 2 窮地の約束

間違いない。斉藤は、徹底的にトシヤをつぶすつもりだ。

半円の円周を遠巻きに通っていた人達が、こつちをいぶかしみながら、元の流れを作る。だけど、そこに入れない。足を踏み出せば、もしかしたら、力が抜け切って崩れてしまいそうだったし、それ以上に、さつき言われた言葉が思考を駆け巡っていて、他のものが入る余地はなかった。

土曜。この前の続きをやるつもりだ。それも、他のやつらも混ぜて。あんなものまで使って。

どれくらいやられるんだろう。骨一本、二本。いや、そんなものじゃない。血を吐くまで殴られるかもしれない。足が立たなくなるまで蹴られるかもしれない。煙草の火を押し付けられた傷跡、それ以上のものを、あのナイフでつけられるんだろう。どこに。腕、背中、顔、腹。足だけは止めて欲しいけど、そううまくいくわけがない。鼓膜ぐらい破られるだろうか。目でも潰されるだろうか。

いや、あのナイフで、本当に……。

気持ち悪くなり、口元に手を当てて何とか堪えた。そのときやつと、妹が側にやってきて、何度も呼びかけていたことに気が付いた。「兄ちゃん、だいじょうぶ……?」

さいわい、持ち手の身体に隠れていて、さつきのナイフは見えていなかったらしい。泣きそうな顔が、心配そうに見上げる。泣きたいののはこつちだ。「ああ」と、うめきながら答えた。

「さつきの人、だれ。兄ちゃんの、お友だち?」

「あんなやつら、友達なわけないだろ!」

周囲が一度振り返るような大声をマリンに叩き付けた。びくりと震える彼女を見て、後悔と腹立たしさと情けなさ、そんなものが胸の奥で混ざりだした。

痛い。胸の辺りが、ぎしぎし痛む。混ざったものに内臓をぎゅっ

と絞られているような、窮屈な痛み。だけどそれより、マリの不安げな、心配そうな声を聞いていたくなくて、無理矢理足を引き摺った。

「行くよ」

振り返りもしないで呟く。小さな気配が、小走りについてくる。あいつらといるところをマリに見られるのも、避けたいことの一つだった。見栄を張りたいわけじゃない。ただ、自分の兄があいうやつらと関係があることを知られていても、その現場を見られなくなかった。そしてあいつらにも、妹の姿形を知られなくなかった。ああ。ああもう。最悪だ。

適当なスーパールの入り口で、何でもいいよと適当に言った。買うべきものがあつたわけじゃなく、単に何か楽しませてやれたらと来ただけだから、そう強く言って、頼りないか細い背中を見送った。入り口で待っていて、胸の痛みは引くことを知らない。

傷はいつか塞がる。折れた骨も破れた鼓膜も、時間があれば元に戻る。目だって、元から二つあるんだ、今のところ両方とも割と視力はあるから、片方だけでも何とかなる。

でも、もし病院送りにでもなったら。そしたら、どうなるんだ。マリは、一人ぼっちになるのか、あの部屋で。もう、二人ぼっちではいられなくなる。なんとか、二人であそこにいることを認めてもらえないだろうか。

呆れて、少し笑う。

無理に決まってるんだろ。それが出来れば、今までこんな苦労してきた意味がなくなる。どうあがいたって、おれはただの十四歳の中学生だ。働くことも出来ないのに、どうして二人きりであそこにいられるだろう、認められるだろう。

隠し通さないと。それには、そんな怪我してる場合じゃない。

斉藤の言葉を見殺して、土曜に家に閉じこもっていいんだろうか。

だけど、そんな考えは、浮かんですぐに消えた。おれがどこに住

んでるかなんて、小学校からの同級生に聞けば、すぐに分かる。一層苛立ちを募らせて、あいつらは追いつめてくる。家には当然、マリがいる。それでもし、おれの弱点を的確に突いてきたら、標的をマリに代えられたら。

治まり掛けていた吐き気が再び込み上げてきた。駄目だ。それだけは、絶対に駄目だ。

どうしたらいい。どうしたら、あの子のところに帰ってやれる。

頭が痛みを訴える。誰に対してでもなく、おそらく自分にそれをごまかすため、髪をかき上げる振りをして、右手で頭を抑える。

ちくしょう、どうしたらいいんだよ。

混ざり合った何かが、胸の奥を握り締め、ねじ切るように力を加える。やめるよ、苦しいんだよ。なんでそんなにおれを構うんだ。

頭に当てた腕を下ろすと、自動ドアの向こうに、見慣れた姿が見えた。

瞬間、思わず身体がびくりと震え、すぐに自分を殴りつけたくなつた。あの影じゃない。少し髪が伸びたから、見間違えたただけだ。それでも、幽霊とマリの姿を重ねてしまうなんて。

なにやってんだおれは、そう人知れず苛立つそばに、親子連れに続いて出てきたマリが歩いてきた。悲しげな顔をした彼女が買ってきたのは、ポケットにおさまるようなガムの束一本だけだった。そして、無理矢理笑いながら明るい声を出す。それなのに、おれはろくに返事もしなかった。

どうしたら。それだけでいいだった。頭が痛い、胸が苦しい。やりきれなさに口を引き結び、大股で歩く後ろから、必死な足音がついてくる。

あのナイフの刃先が脳裏にちらつき、ポケットに突っ込んだ両手を握りこんだ。

あれにやられるのは、きつともものすごく痛いだろう。そして、そんなことはない、流石にそれはないと思うけど、可能性はゼロじゃない。そう、でも。

もし、相手が狙いを誤れば。もしも、タイミングがずれたら。斉藤がこれ以上なく本気だったら。

おれは、殺される。

加減なんて、考慮してくれない。一番酷い場合、刺されて、いや殴られすぎてか蹴られすぎてか、出血がひどすぎるとか、もしくは別の場合で。おれは、二度と立てなくなる。

そうしたら、おれが死んだら、マリはどうなる。

ずっとひとりで待ってるのか、あの部屋で。帰ってこない人を、帰ってくると信じて、待ち続けるのか。

やっと、ひとり、諦めだしたところなのに。耐え切れず、急に泣き叫ぶ夜が、未だに続いているのに。

あんなに一生懸命、笑っているのに。

「にいちちゃん、待って」

湿った苦しそうな声が背中につかった。

マリは、すっかり我慢強くなってしまった。それでも、追いつけずに待ってと叫ぶ。

だけど、おれは止まらず、振り返りもしなかった。胸が苦しい、頭が痛い。はちきれそうな思考の中に、マリの声が割り込んでくる。何だよ、もしかしたら、おれ、土曜に本当に酷いことになるかもしれないってのに。そしたら、マリ、おまえもこれぐらいで助けを呼べるような状況じゃいられなくなるってのに。

「あつ」声が弾けて、「待って」が聞こえなくなった。

転んだんだ。焦りすぎて。

そのときやっと、彼女の足が治りきっていないことを思い出した。昨晚も、この間皮が向けてしまった足の裏に、ガーゼを当てたんだ。つた。

足が止まりかけた。

だけど、止めなかった。振り返らなかった。

苛立ちに、不安や心配が更に入り混じる。胸の奥のもやもやが、どんどんでかくなって、頭に膨れ上がって、背中を押してくる。

すすり泣きが、服の裾をそつと引つ張った。

泣くなよ。これぐらいで、泣いてんなよ。おれだって、ずっと我慢してたんだ。マリは殆ど覚えてないだろうけど、おれは耐えられないとき、ひとりで押入れで泣いてたんだ。堂々と泣くと、ひどくぶたれてつねられるから、声を押し殺して、必死で涙を拭いてたんだ。あの埃まみれの枕はさ、それを知った母さんが、自分がいないときにおれがいつ泣き疲れて寝てしまっても、そこで眠っていられるようにって、置いてくれたものだったんだよ。マリは知らないだろうけど。

泣いても痛くないだけマシじゃんか。そう思い、裾を引くものを振り払った。

距離が開いていく。泣き声が、遠ざかる。

それだけじゃない、すすり泣きは、少しずつ小さくなっていく。圧縮されて無理に小さくしたそれが、なんとか聞こえてくる。

代わりに、小さな足音が追いかけてきた。不規則で乱れた彼女の足音が、尚もくつついてくる。

なんだ、走れないのか。

苛立ち混じりに足を止めてやっと振り返ると、懸命についてこようとする姿が、いつもよりもっと小さく見えた。

「あ……」

その顔を目にすると、彼女の小さな身体が、思い出しかけていた何かと頭の中で重なった。

必死で涙を堪えるその表情は、それでも流れる涙を腕にこすり付けて泣き声をつぶしているその様子は。

あの頃のおれと、そっくりだった。

マリが泣くのを堪えているのは、見捨てられたくないからだろう。だから今も、一心に足を引き摺って、距離を縮めようとしている。

我慢の理由は違っても、今のおれがしていることは、あいつと、親父と全く同じことだ。おれは足を引き摺る代わりに、なんとか笑って、少しでも気に障らないことを、手を上げられないことを願っ

ていた。

同じだ。あの時と同じ表情を、悲しい思いを、今はおれがマリにさせている。彼女は、何も悪くないのに。一番幼くて寂しいのは、あの子なのに。

声を震わせ、かろうじて聞き取れる声で、彼女は言った。おれがかつて、ひたすら呟いていた言葉を。

「ごめんなさい……」

何も悪くないのに。何もしていないのに。

全部、おれの八つ当たりだ。全ての落とし前をつけてやらないといけないのは、どうしようもない、おれなんだ。マリが謝る道理なんて微塵もない。それなのに。

彼女の名前を呟いて、アスファルトに膝をついた。涙の筋がついた顔が上がり、泣き腫らした目が、こつちを向いた。

一気に顔を歪ませて、力を振り絞って、駆け寄ってくる。その震える身体を、膝立ちのまま、抱き止めた。

それが、おれと親父との、かろうじての差。心底怯えきっていたおれは、もしも、ありえない話だけど、万が一こんなことがあっても、駆け寄ったりなんて出来なかっただろう。だけど、マリは来てくれた。痛む足を忘れて、抱きついてくれた。

周囲の人が、何事かと驚いているけど、誰も声をかけようとはしないし、どう見られても、どうでもいい。

だから構わず、強く抱きしめる。

「ごめんな。おれが悪いんだよ」

雑踏の中、おれはマリにそう言った。このとき、ようやく分かった。

おれにはもう、マリしかない。マリにももう、おれしかない。どっちが欠けても、もう駄目なんだって。

頬を寄せて背中を撫でる。彼女の涙が地面を濡らしていく。そうだ、おれは駄目だけど、この子は泣いたっていいんだ。そう思うと、もう腹は立たなくなった。反対に、自分を頼って生きていてくれる

命が、本当に愛おしかった。

もしも、あいつらがおれを殺すのなら。そんなことになりそうだったら。おれじゃなくて、マリに手を出すようなことがあったら。殺してやろう。

この子を一人ぼっちにさせるぐらいなら、痛い目にあわせるようなことがあれば、おれが、あいつらを殺してやろう。

素手じゃなかったら、うまくいくかもしれない。何かあったつけ、隠し持てるようなもの。包丁がある。だけど、あれは駄目だ。大きすぎる。そうだ、ナイフがあった。親父がいなくなって、まだそんなに経っていない頃、あの部屋で見つけたナイフがある。あの小型ナイフよりも大きいけど、上着があれば隠せそうなものが。

そこまで考えると、胸の奥を握っていたものがすっと出て行き、代わりにどうしようもなく悲しくなった。

「もう大丈夫だ」

それを隠すために笑って、一度頭を撫でると、やっと涙を止めたマリが微笑む。それを見て、はつきり決意した。

「おれは、絶対にどこへもいかないから。必ず、マリと一緒にいるから」

大きな澄んだ瞳が見上げ、おさまりきらない透明な水が頬を滑り落ちた。マリは、儚い笑顔のまま、もう一度強く抱きついた。

細い身体を背負って、刺す様な夕日を遠くに見ながら、家路に着く。痩せたかな、ふと思った。この前、こうして夕方、マリを背負っていたときより、軽い身体に更に隙間が出来てしまった風に思う。そういえば、あの時と同じ道だ。

「ねえ、にいちゃん」

背中、小さく身じろぎする。「つきがでてるよ」指された方向を見上げると、色の薄まった高い空に、まだ白っぽい、円を挾ったような三日月が浮いていた。

「ああ、ほんとだ」月なんて見上げたのは、久しぶりだった。

「あのね、つきつてね、どこでも見えるんだって。みんな、見れるんだって」

とても大切なことのように、繰り返す。きつと、大切なことなんだろう。嫌な奴も、大好きな人も、みんな、自分と同じ空の下にいるってことは。

「そうだ。みんな、同じとこにいるんだ」

そう返すと、マリは嬉しそうに「うん」と声を上げた。寂しくないよ、そう言ってるみたいで、胸の奥がきゅっとすばまる感じがした。

そしておれは、一度立ち止まって振り返る。

「絶対渡さねえからな」

同じ様に立ち止まった影に言い捨てた。

影はいつものように黙ったまま、じつとこっちを見つめていた。

26 ナイフ

しとしと音を立てて、目覚めたときからずっと、雨が降り続いている。水曜日、その音を聞きながら、学校に行くことを諦めた。雨だから休みます、なんて言わなかったけど。

マリは、いつも学校ではどうしてるんだろう。おれより夜中の睡眠時間は多いから、居眠りなんかで怒られたりなんかしてないといけど。どれくらい眠れば大丈夫かなんて、まだ小さいからよく分からない。心配だし、行きたがるわけでもないから、一緒に、電気も点いていない部屋の布団に転がっている。

雨の匂いが充満している。外は雲が低く立ち込めていて、そこかひたすらに、水の線が地上に引かれていく。朝になっても昼になっても、変わらずに薄暗い。

何もする気が起きず、窓を開ける気力もなく。ぼんやり天井を見上げる。雨の音だけが、この部屋で動いていた。

このままだと、どうなるんだろう。じっとして、窓も締め切ったまま。酸素が無くなって、死んじゃうかな。もしそうになったら、いつ発見されるんだろう。

なんてね。馬鹿なことを考えた。

やっと寝返りを打って、目覚まし時計に目をやった。まだ昼を少し過ぎたばかりだった。

雨音に混じって、時計の針が動く音が響いている。同じリズムで、いつまでもいつまでも、同じ音が続く。イチ、二、サン……時間が経つ。同じ速さで、時間が進む。秒針の音は、なかなか意識から離れてくれない。そうか、時間は、この部屋でも動いてるんだ。あとは、あとは、おれらの心臓。動くものといったら、それぐらい。

雨は止まないまま。暗い部屋は更に暗くなっていく。

「ごはん、何がいい」

ぼやけた声で、天井を向いたまま尋ねた。

間を空けて、雨音と共に、

「おなかすいてない」

うつ伏せで布団に顔を押し付けたまま、彼女が答えた。

「だめだって、そんなの」

返しながらも、指一本動かせず、口と喉と、あと酸素だけを使った。

そうだ、この雨が気力も一緒に吸い取って流してるんだ。そう思った。これが止めば、ちゃんと元に戻るし、窓も開けられると。

少し前に感じた、小さな身体の軽さを思い出す。痩せたかな、おれは確かに、そう思ったはずだ。

やっと、身体を起こすことができた。ずっと寝ていたのに、何もしていないのに、ひどく重く感じた。

作ったカレーは、目指していたものとは大分違っていた。味は覚えてるのに、一体何が違うんだろう。このとき自分が作ったものは、全く記憶に残っていない。何か違う、それだけが胃の底に落ち込んでいった。

意識の半分に、外の様子が流れ込む。

難民の子ども達を救うNGOの活動。今年のノーベル賞受賞が期待される人の名前。動物園で先日生まれた、珍しい動物の話。昨日起こった、交差点での交通事故の詳細。どこかの町にいる通り魔。今週のCDの売れ行き。

どうでもいい。テレビを消した。本当に、どうでもいい。

この部屋のドアで隔てていれば、この内側は、安全地帯なんだから。外の様子なんて、どうなっているでもいい。乾いた思考に、それだけが落ち着いた。

どういうわけか、夜は痛む。胸の辺りが、ぎしぎしときしんでいる。眠れない。

目を開けて暗闇を見つめ、横を向いて、規則的な寝息と共に微かに上下するマリの肩に目をやった。うすい毛布を腹にかけて、手足

を投げ出して眠り込んでいる。今のところ起きる様子は無い、ぐっすり眠っている。

それを確かめて、物音を立てないように気をつけながら、そつと布団から這い出した。廊下に出て、向かいのドアのノブに手を伸ばし、ゆっくり回す。いつの間にか、雨音はしなくなっていた。

ひと月ほど前までは自分ひとりで寝ていた部屋に入り、音を立てずにドアを閉めた。電気をつけたら、ドアの隙間から光が漏れてしまいかもしれない、そう思って、小型の懐中電灯をポケットから出してスイッチを入れ、床に立てておいた。月明かりが割と差し込んでいるから、いらなかったかもしれない。

小学生のときまで、ランドセルに入りきらない上靴や体操服なんかを入れるのに使っていた、布の袋に手を入れて、それを取り出した。

鞘に納まったままのナイフ。

二年前これを見つけたときはひどく驚き、そして、使われなくてよかったと心の底から思った。何故こんなものがあるのか分からないし、最早どんな理由であつても構わない。大事なことは、もしかしたら、おれがもうすぐこれを使わないといけなくなるかもしれないってことだ。

柄を右手で握り、ゆっくりと引き抜く。

鋭い刃が、月明かりを反射して、光る。濡れているかのように滑らかで、ああ、これならいけるな、と思った。

こんなもので刺されたら、きつと死んでしまう。使わないに越したことはない。でも、あいつ等の考えていることなんて、分からない。首に向けられた鋭い刃先、それを思い出し、更に強く柄を握り締めた。

もし、これを使ってしまったら、その後はどうしよう。ぼんやり身を任せていれば、どちらにせよ、ここにはいらなくなる。それどころか、マリとは会えなくなる。死んで、一人にさせるよりはマシだけど。

逃げよう。そうだ、どうせここにいられないんなら、一緒に逃げよう。捕まるまで、それまでは二人でいられる。一緒にいたい。手を繋いでいられたら、それでいい。

そう、できるだけこれは使わない。あくまで、最終手段なんだ。死ぬ気で我慢して、全部片がついたら、這ってでも帰って、それで自力で治すんだ。それが一番良いんだ。

でも、もしも耐えられなかったら。もう駄目だったら。あいつらが本気だったら。マリに手を出したら。

そのときは……。

ふっと顔を上げた先に、窓ガラスがあつた。少ない光源を受けて、自分の姿が、そこに映っていた。

ナイフを握って、こんな恐ろしいことを考えているおれは、びびっているはずで。怯えているはずで。少なくとも、そんな反応を期待していたのに。

向こうのおれは、平然としていた。冷たい無表情が。黙って見返してきた。

何考えてんだ。人殺しだつて。あんなに小さな子どもと手を繋いでいたいがために、人を殺すのか。お前が。そのナイフで。

急に思い出したようにこみ上げてきて、おれは声を殺して笑った。向こうのあいつも、同じ様に笑い出した。あまりの馬鹿馬鹿しさからか、それとも自分への呆れからなのか、それすらも、分からなかった。

変。ヘンだよ、お前。何笑つてんだよ。夜中にこんな薄暗い部屋で、ナイフ握って、ひとりで笑ってるなんてさ。狂ってるよ。おかしいよお前。変だつて、あの先生の言つた通りだつて、分かつてんだろ。人を殺す？ 殺して逃げる？ できるわけねえだろ。もし仮にできたとしても、どうせ最後に捕まるのがオチだ。その中で一番辛い思いするのは誰なのか、分かつてんだろ？

分かつてる。分かつてるよ。

全部分かつてる。お前が、どうしようもない程おれなんだつてこ

とも、分かつてる。

だけど、おれは弱いから、こうすることしかできないんだ。ここ
でこうしてるしかないんだ。どうしようもなく馬鹿なくせに、手を
繋いでいたいんだ。

不意に、涙が出そうになった。これは駄目だと堪えて、代わりに
肩を震わせて小さく笑う。

どうして、こうなってしまったんだろう。いつから、おれはおか
しくなってしまったんだろう。息子がこうなるって分かってたから
親父はナイフを持っていたんだろうか。知っていたから、あの日、
最後の日、首を絞めて終わらせようとしたんだろうか。こいつは、
俊也は、どうしようもない人間なんだって。

きつと、生まれたときから欠陥品だったんだ。そのまま、妹ひと
り守れない、傷つけてばかりの南俊也になってしまったんだ。

どんなに頑張っても、駄目だった。結局、こうなってしまった。

今更、どう傷つこうが、汚れようが、構わない。痛いのは慣れ
ている。でも、慣れてはいけない大切なあの子だけは、どうしても
何があっても守らないといけない。

ナイフを鞘に戻し、灯りを消した。向こうのおれはふつと掻き消
え、窓の外の暗闇が戻ってきた。

部屋に戻り、布団の上に転がった。眠れなかった。

27 最後のぬくもり

この日、初めて先生が手を上げた。いつまで経っても態度の変わらない不良生徒の頬を、指導室で一度だけぶつ叩いた。子どもが家出したとかなんとか噂のある、社会の先生だった。「先生」も、どうしようもなく人間なんだと思った。

家に帰っても、しばらく何もせずに、敷きつ放しの布団でぼんやりしていた。明日くらいはちゃんと畳んでしまおう。色々考えていると、急に気持ちが悪くなって、給食の分まで、隠れて全部吐いてしまった。もったいない、そう思った。

妹に、赤く腫れた頬を、不安げに指される。ちょっとぶつけただけだと、笑ってごまかした。

やがて、夜になる。夜が更ける。木曜が終わり、金曜に代わった頃、浅い眠りがふつと解けた。仕切りのない、廊下と四畳半の境目、そこに、黒い影が。

「うわあっ」

思わず叫んで飛び起きた。激しく暴れる心臓、それを抑えるために胸の辺りをぎゅつと握り締めながら、目をこらす。何もいない。夢現の幻だったらしい。

はあと大きく安堵のため息をつくと同時に、乾いたおかしさが湧いてくる。本当に、変になってしまった。幽霊の幻覚を見て怯えるだなんて。

横になると、また胸の奥が痛んで眠れない。誰かが握りつぶそうとしてくる。身体を丸めて深呼吸して、次々に湧き上がる悪い考えたちを頭の隅に追いやる。落ち着け、そうだ、まだ夜は明けない。うつうつとしていると、たちまち泣き声が部屋中に満ちた。ひたすら泣いているマリを、起き上がって、いつものように抱きしめる。「だいじょうぶ」と呪文のように小声で呟きながら思った。あのと

き、息子を抱きしめて「大丈夫」と言っていた。こんな気持ちで、そう言って笑ってくれていたんだろうか。ちつとも大丈夫じゃないのに、そうやって。

過呼吸にならないよう背中を撫でながら、ひたすら、温かさだけを伝える。しがみついてくるこの子の身体も、柔らかで温かい。次第に、泣き声が遠ざかり、しゃくりあげる震えも、止まっていった。そしてこれが、最後の温もりだった。

辛くはなかった。こうして精一杯生きていること自体に、何の疑問もなかったし、この生き方を恨むこともなかった。手を繋いでいる、ただそれだけでよかった。

おれは、マリと母さんが笑っていてくれたら、それでいい。ずっとそう思っているし、母さんがいなくなっただけから、それは少しも変わらない。二人が笑ってくれるなら、手を繋いでいられるなら、誰かを殺すことも殴ることも逃げることも失うことも、それで自分が死ぬことも、認められた。心の底から、それら全てを引き受けられた。

だから、そう思っていたから、この次の日に起きたことは、本当にひどい。おれにとって、これ以上ない、もう一生ないほど、ひどいこと。きっとそれで、おれは全部変わってしまったんだと思う。何か、いや、世界と、全てとずれてしまった。

それはすぐそこで、じつと息を潜めていた。

28 - 1 永訣の日

「なあ、おーい、トシ、生きてるか」

そんな声が聞こえ、緩慢に顔を上げると、また勝手に席を陣取った山本の姿が真正面にあった。

休み時間だし怒られない、ということでも机に突っ伏して寝ていたところだった。

「また寝てたんか、お前最近寝すぎじゃねえ？ オレが気付いたときはいつつもぐだーってなってるよ。まあいつつもやる気ねえって感じだけど」

「……なんだよ」

まさかそれをわざわざ言いに来たのかと思っていると、突然、山本海は、バンとおれの机を片手で叩いた。不覚にも身体が反応し、背を伸ばしてしまう。

「おお、起きた」

「だから何なんだよ」

「いや、あのさ、オレ昨日また電話したんだよ、父ちゃんに。前言つただろ、あそこで働いてたことがあるって」

そういえば、あの工事現場で働いてたことがあるって、前に聞いたような。

「前も電話したんだぜ。そしたらそんなとき、付き合いの飲み会かなんかのあとですっげー酔っててさ。全然呂律まわってねえし、わけわかんねえこと言ってる、おー海か、久しぶりだなんて。二週間前に一旦帰ったばっかなのによ、いやオレは別に普通に話してたんだぜ。そしたらいきなり、おまえの名前には本当は波って字を入れたかったとか言い出してよ」

呆れ顔で話す割には、よく覚えている。それより、よくこんなに口がまわるなど、寝起きの頭で思った。

「女の子だったらかうしようっていろいろ波のつく名前考えてたん

だよ。そしたら、次も男で、おまえが生まれて。父ちゃん焦ったんだよ。名前何も考えてなくてな、なあ」

涙声を混せて再現してくる。悲痛な電話だ。

「母ちゃんと相談してな、仕方ない、さんずい繋がりで海にしようって、そう決めたんだよ。オレさ、それ聞いて何言ってやがんだってなつてさ、じゃあそんならオレは湖とか沖とかでもよかつたんかいつて話だろ」

「ああ、河とか」

「そーだよ。そしたらあの酔っ払いさ、しばらく黙っといてから、あーそういえば最近海行つてないな、昔はおまえら連れてって……なんつってたかなあ、アライグマがどーとかわけわかんねえこと言い出すんだよ。はあ？　ってなつたら、いびきかいてやがんだよ、途中で寝だしたんだぜ。こんな切られかたねえよ、ってか切れてもないっての」

早口で喋りきり、もう一度机を叩いた。

「まあ、それはどーでもいいんだけどな」

「どーでもいいんかい」本題かと思った。

「前置き前置き、昨日はまともだった」

片手を振りながら山本は笑って言う。

「んでさ、ああ、そういえばひとり事故で亡くなってたって」

でも、と不思議そうな顔をする。

「死んだのは、子どもじゃないんだと」

「……え？」

そんな馬鹿な。だって、おれがよくあそこの前で見てるのは。

「作業中に転落死した人がいるけど、それ以外は聞いたことがないつて。おれらが生まれた年の一年前に中止になったんだと、あそこの工事」

「じゃあ、子どもは、死んでない」

「そう。死んだのは、三十過ぎのおっさん」

「うそだろ……」

「そんな疑うなよ。確かに信用ないこと最初に言ったのはオレだけど、本当に」

「うそだろ！　じゃあ……」

思わず立ち上がった声上げた直後、山本の仰天した顔と、驚いて振り返る周囲の目に気付いて、なんとか勢いだけは必死で押さえつけた。

「じゃあ、じゃあおれは、おれが見てんのは、そこで死んだものじゃないのかよ」

「お、おい、なんだよ、急に」

「なんだよ、なんなんだよ、あれは」

「知らねえよ、だから、そこで事故死したって言われてるやつじゃなかったって」

そんな。てつきり、死んだのは子どもだと思ってたのに。あの幽霊の正体はそれだと思ってたのに。

急激に悪いものが全てを覆いだして、影の姿を確かめるため、視線を周囲に巡らせた。どこにもいない。

「大丈夫か、トシ。そんなやばいもん見えてんのか」

突然落ち着きを失って声を上げた様子に、山本が不安げに口を開く。それすらも、もう殆ど聞こえず、反応する余裕なんか、とつくなくなっていった。

悪いことが起こる。とても嫌な、取り返しのつかないことが起きる。

残りの授業なんかどうでもよかったけど、眠くなんてならなかった。あの影の見当はついていて、それだけが、有利を得るためのたった一つの情報だったのに、ゼロに戻ってしまった。得体の知れない子どもの影。正体不明のあれは、おれらにもっと深いところで関係のあるものかもしれない。だとしたら。ああ、きつと、とてもひどいことになる。

いてもたってもいられない、だけど、今飛び出しても家にはまだ誰もいない。油断すると震えだす手を、両手で何とか押さえつける。

異常に動きの遅い、壊れてんじゃないかと思うような時計の針が、望んでいた時刻をようやく示した。同時に、鞆を引っつかんで、廊下を駆け抜けた。

何も起きるなと願っているのに、目は勝手に、あの影を探してしまふ。だけど、どこにも、工事現場にも見当たらない。それがかえって不安を増幅させる。あいつは今、どこにいるんだ。まさか、もう……。

自分の息が切れているのか、足は疲れているのか、鞆は重いのか、何も分からない。信号を半分無視し、背中に怒鳴り声が刺さってきた。止まれるわけがない。自分の荒い息遣いと、心臓の早い鼓動、それだけが頭に響いて、更に背中を押し続ける。もつと速く。もつと速く。一秒でも速く。速く、ハヤク。

全力で走り続け、団地の駐車場にやっと飛び込んだ。つまりいて転びそうになり。少しだけ速度を落として、苦しい呼吸を何とか治そうとする。少し薄まった悪い予感が、その裏側でじっとしている。今一番聞きたい声が振ってきて、足を止めた。顔を上げて、住み慣れた五階の角部屋の全開になった窓を見上げる。

「にいちやん！」

もう一度叫んで、窓から身を乗り出したマリが、大きく手を振った。

よかった。言葉に出来ないほどの安心が、力の抜けそうな身体中にいきわたる。

本当に嬉しそうに、顔全部で、振っている手で、マリが笑っていた。何よりも幸せで、何よりも大事な笑顔で。

笑い返して手を振ると、また彼女は飛び上がりそうに嬉しそうな顔をし、ぱっと身を翻して部屋の奥へ駆け込んだ。ドアの鍵を開けようと、玄関まで走ってるんだ。マリが帰るときや、せいぜいこのときぐらいしか、ドアを開けることを許していなかった。

手を下ろして、視線を正面の階段へ戻した。
信じられなかった。

影が、立っていた。

驚愕が、足を地面に縫い止めてしまって、動けない。身体が、凍り付いてしまったかのように、動こうとしない。いや、頭すら、少しも働こうとしない。

それでも、ぼやけた影の足が向こうへ一步を踏み出したとき、全てが溶けた。

弾かれるように、おれは駆け出した。

階段にたどり着いたとき、すでに影は踊り場まで上がっていて、角を曲がりすぐに見えなくなる。踊り場にたどり着くと更に二階まで上がっていて、三階へ足を踏み出している。

どこかで、鞆は放り投げた。

やめろ、やめてくれ。言葉にならない懇願は、届かない。

前のめりになり、段を手で押して必死で上がる。気持ちは動く、身体は思うようについて来ない。追いつけない。追い越せない。

嫌だ。そんな、やめてくれ。そっちに上がるくらいなら、いつもおれをここから突き落として、首の骨でも折ってくれ。

影は上がる。振り返らずに、階段を上る。あざ笑うかのように、ちらりと後姿だけを見せて。

心臓が激しく脈を打つ。不安、疲労、絶望、ひたすら、激しく血を巡らせる。

悲しいくらい早く、四階の踊り場にたどり着いた。駆ける視界の中に、影の姿はない。

五階の廊下に足が着いたとき、それを目にしたとき、一瞬で心臓は凍りついた。

廊下の端にある部屋のドアが、閉まっていく。そこに滑り込む、あの影。

「マリ！」

走りながら声を張り上げた。取っ手に指が触れる寸前、この部屋と世界とを遮断する冷たいドアが、パタンと音を立てて閉まった。即座に、引つつかんだ取っ手を引く。開かない。鍵がかかっている。

るのか、ガタンと音を立てるだけで開こうとしない。

爪が食い込む拳でドアを叩き、全力で妹の名前を呼んだ。手の骨が折れそうなほど、強く強く叩きつける。開いてくれるなら、手だろうが足だろうが、どこが折れたって構わないのに。

「マリ、マリ！ 開ける！ マリ！」

喉が破れそうな大声で、硬い壁の向こうに叫びながら、ドアを叩いた。向こう側は、無言のままだった。

首にさげた紐に手をやり、必死で手繰り寄せる。散々走ったせいで、鍵に紐が絡まっている。

細い紐を噛み千切って、焦る手で鍵を鍵穴に差し込み、回して差しっぱなしのまま、ドアを開け放った。

靴のまま中に飛び込み、短い廊下を駆ける。薄暗い部屋、四畳半に足を一歩踏み入れた

息を切らすおれの側を、場違いな程涼しい風がすり抜けていった。背後で、ドアの閉まる音。自分の息遣いしか聞こえない、静寂。夕方に向かっていく、ほの暗い室内。擦り切れ、ところどころ色褪せた畳。

アザラシのぬいぐるみと、青いリボンが、そこに転がっていた。他には、何もなかった。

うすいカーテンが、柔らかい風に触れられて、ゆっくり揺れる。部屋の入り口で、仕切りのないそこで、がくりと膝をついた。

からっぽの頭に。窓の外で広がっていく喧騒が流れ込む。女の高い悲鳴が聞こえる。何か、叫んでいる。聞き慣れた、呼び慣れた名前を、呼んでいる。

やがて遠くから、救急車のサイレンが、聞こえてきた。

29 手を繋いで

人が死ぬのって、こんなに簡単なことだったんだ。

今まで十四年間、人並みのものは見てきたつもりだったけど、これだけは知らなかった。知りたくなかった。

悲しいほど、南真理の葬式は呆気なかった。いや、大変だったかもしれないけど、全部宮里家の人がやってくれたから、おれはただそう思った。どこか知らない寺で、それはひっそりで行なわれた。おれが知ってる寺なんて、まず無いんだけど。

最後のこの子を見に来てくれた人は、十人にも満たなかった。家を離れて大学に通っている宮里七海、妹と違って温和で物腰の柔らかい姉が帰ってきて、久しぶりに家族全員がそろった、宮里家の人達。あと、マリの小学校の担任と、数ヶ月前まで通っていた保育園の先生。記憶にない、シンセキという三人家族。名前は聞いたけど、名字が同じ南っていうことしか、頭に入らなかった。

五歳くらいの、その南という人達の子どもが、興味を失って退屈しだしたのか、散歩を始めた。小さな足音が、木の床を移動する。タクマだったかユウマだったか、その子を見かねた母親が外へ連れ出した。

到底理解できないお経が、耳を突き抜けていく。床とは座布団で隔たれているのに、その硬さが正座の足に食い込む。

茜がしゃくりあげた。ずっと泣き続けている。今朝顔を合わせたときから、ずっと泣いている。

それと同じくらい、保育園の先生が泣いていた。おれともよく会ったことのある人で、マリがまだ本当に小さい、一歳になるかならないかという頃から面倒をみてくれていた人だった。何も知らない人が見たら母子かと思われそうなくらい、仲良くしてくれていた。

他の人は、難しい顔で、じっとしている。深い考え事でもしているかのように、黙りこくっている。

穏やかな風が吹き、線香の匂いを運んだ。蠟燭の灯りが、ちらちらと揺れる。タクマだったかユウマだったか、その子のはしゃぎ声が小さく届く。

顔を上げた視線の先に、楽しそうな笑顔がある。ただ、それは動かないし声も出さない、だって写真だから、当たり前だ。

過ぎたことは忘れちゃおう、そう言った母さんの方針のせいなのか、家に写真なんてものは殆ど無かった。だからこれはきっと、保育園で撮られた数ヶ月前のものだ。マラソン大会の日のもので、水色のハチマキをして、体操着を着たマリが、楽しそうに笑っている。走った後なのか、頬が僅かに上気して赤くなっていて、それでも、表情全てで、子どもらしく笑っている。何かおかしい、こんなところに似合わない。これ、走り終わった後の写真だぜ、ここに飾るんなら、もっと大人しいものじゃないと。

無茶な話だ。だって、彼女に遺影が必要になるなんて、誰も思いもしなかったんだから。

お経が止んだ。風まで止まってしまったような気がした。
「俊也」

隣でずっと眉間に皺を寄せていたおじさんが、険しい表情のまま見下ろした。以前見たときよりも、少し髪の毛の白さが増えて疲れているように思えたけど、何となく、父親という名前の威厳がある。ただそれさえ、ほんの少し細くなってしまったような気がした。

頷いて立ち上がり、数歩前に出て、また膝をついた。

マリが、白っぽい木の箱の中で眠っている。タンポポの綿毛がくっついていない水色のワンピースを着て、どういうわけか、胸のところで両手を組んで、いつもと同じ寝顔で、横になっている。少しだけ微笑んでさえいる。

その頭のすぐ側には、白から灰色へ毛皮の色が変わりかけているアザラシのぬいぐるみが、じっと寄り添っている。

そっか、マリ、らあちゃんが大好きなんだよな。一緒だって、言ってたよな。おばさんは何度も聞いたんだぜ、これでいいのかって

おれが持つてなくていいのかって。

でも、これがいいんだよな。ずっと、一緒なんだもん。おれには、らあちゃんの声は聞こえない。

反対側には、青いリボンがある。小さいときからよくつけていた、青いリボンが。そうだ、これも、この子のなんだ。おれのものじゃない。

ただ眠っているだけにしか見えなかった。呼べばすぐに目を覚ましそうだったし、抱きしめれば、抱きついてくれそうだった。

だから呼びたかったけど、だけど、マリはひどく疲れてるみたいだから、幸せそうに眠っているから、起こすのは、可哀相だった。口の中だけで、小さく呟いた。自分にも聞こえないくらい、小さく代わりに、右手を伸ばした。どんなときに、自分が、眠っているマリの手を握り締めていたか、思い出したんだ。

ひどく冷たくて、かたい手だった。不思議だけど、これはこの子の手だ。組まれた手をそっとほどき、ぎゅっと、右手を握り締める。後ろのすすり泣きが少し大きくなった気がしたけど、構わず、マリの手を握った。

おれの手にも納まる、小さな小さな彼女の右手。冷たい。これじゃあ、寒いだろ。だけど、どれだけ握っても、温まってくれない。握り返してくれない。

マリ、おれだよ。兄ちゃんだよ。大丈夫だから。もうおれは、覚悟したんだ。どうなっても何をしても、一緒にいるって、あの夜、ちゃんと決めたんだから。

寂しいよな、悲しいよな、こんな所でひとりで眠ってて。マリ、寂しいのは、嫌いなものにな。もう十分、そんな想いはしてきてるのにな。いいよ、泣いても。おれ、怒らないから。無理になんか笑わなくて、絶対、見捨てたりなんかしないから。

だから、だからさ、この手、握ってくれよ。これは手を繋いでるんじゃない。ただおれが、マリの手を握ってるだけなんだ。もう一

度、手、繋いでくれよ。なあ、マリ。

誰かが後ろから、あっちの世界から、俊也、と呼んだ。

そつと、小さな手を離す。そのまま動こうとしない右手を、胸の上に重ねなおした。ゆっくり自分の手を引いて、立ち上がった。

南真理を焼いて上がった煙は、晴れて澄み渡った空に、細く昇っていった。

もはや彼女はモノなんだって、残酷な現実主義者は言うかもしれない。けどおれには、冷たくて動かないあの子は南真理だとか思えなくて。たった一人の妹である、マリであつて。だから、白いそれをぼんやりと眺めていた。あれは真理じゃないとはわかつてるけど、彼女の姿形を消していく間に生まれたそれは、やっぱり真理なんじゃないかと思つた。

ああ、でも、分かつてる。そんなわけないって。どうしてあんな煙が、マリになるんだ。

隣に立つた誰かが、同じ様に空を見上げて、ぽつりと呟いた。

「高いね」

なな姉の言葉に、ただ「うん」と頷く。

「もう、あんなとこまで上がっちゃったね」

「うん」

振り返つて見たその表情は、ひどく難しいものだつた。目は今にも泣き出しそうに頼りないし、少し充血すらしているのに、微かに唇を嚙んで口を結んでいる。彼女がそうなることなんて滅多にないけど、怒っているように見えた。それ以上に、泣きそうにも見えた。勝手だけど、泣いてくれるのなら、南真理のために、泣いてほしい。我慢しなくていいから、一人でも多くの人に、泣いてほしい。そうでないと、見送る人も殆どいない、それでも七年間生きてきたあの子が、可哀相だつた。

なんて自分勝手なんだろう。一番泣くべき人間が、まだ一滴も涙を流していないのに。

なな姉、と、青空とそこに引かれる一筋の白線を再び見上げながら、呼んだ。なあにと、できるだけ優しく振り向く気配が伝わる。

「おれ、泣いた方がいいのかな」

まだ一度も泣いていない。どういうわけか、涙が流れようとしてくれない。

返事をしてくれない彼女は、微笑んだままだった。ひどく悲しうなのに、泣いてはくれなかった。

やがて、細く白い煙は、青の中に溶けて消えた。

大人たちは、俊也を呼ぶかどうかで、少し迷ったらしい。どうしてだろう。おれが、泣き崩れるとか思っただろうか。俊くん、となな姉が心配そうに尋ねる。だけど、迷う理由がないから、大人たちの方へ歩いた。

だって、これはマリじゃない。変わり果てたっていつても、限度があるだろ。面影どころか、何も無いじゃんか、手だって、握れないじゃんか。髪がさらさらしてて、手は小さくて、抱きしめたら壊れてしまうんじゃないかっていうぐらい、細くて儚くて柔らかくて笑ったり泣いたり表情全部で表してるのが、マリなのに。

あの子は死んだ。もう、どこにもいない。分かってる、知ってる。あの後目が覚めて一人で遊びに行ったとか、このお寺のどこかでかくれんぼしてるとか、ずっと、見つけてもらえるのを待ってるだとか、そんなはずはないんだって。

でも、あの、細い煙はあの子じゃない。この、小さくて細い骨だって、南真理であつても、マリじゃない。

だから、泣けなかった。まだ、涙は出てくれなかった。

外に出ると、パラパラと水滴が落ちてきた。見上げると、青かった空には、白い雲がわき始めていて、そこから雨粒が降ってくる。

ああ、雨だ。

言われるままに車の後部座席に座ると、滑るように窓の外の景色

が流れ出した。

突然、戻らなきゃ、という想いが頭に浮かんた。景色の流れが、あまりに速すぎたためかもしれない。とても大事な忘れ物をしてしまったような気がした。だけど、無理矢理飛び降りてもどうにもならないから、じっとしていた。

窓を叩く雨音が、段々激しくなっていく。静まり返った空気に、その数え切れないノックの音だけがこだまする。ときおり、大きな一滴が、とん、と天井を叩く。外の見慣れない景色は、土砂降りの中、白みがかって見えた。

30 霧中の明日

その南というシンセキの家はデカくて、和風のそれはずいぶん年季が入っているように思えた。団地にはまずない、個人の庭という所には、子どもが七、八人手を繋いで囲めそうなほどの池があり、雨に打たれる水面の真下を、目の覚めるように鮮やかな赤をした鯉が、数匹泳いでいた。寒くないんだろうか、ふとそう思った。

自分に関係している気がしない、団地のものの倍はある玄関で、靴箱の上に目をやった。子どものいる家らしく、外の鯉と同じ色をした小さな金魚が、虫かごくらいの水槽で、ふらふらと泳いでいる。タクマというらしい、この家の五歳くらいの子どもが側に来て、一匹一匹指差して、名前を教えてくれる。区別の付けかたがさっぱり分からないまま、うんうんと聞いていると、その子の若い母親が慌てて制して、愛想笑いと一緒に謝った。その理由は、分かるようでは分らなかった。

広い家全てを照らすのは難しいらしく、ところどころ、廊下や部屋の隅に、影のような闇がぼんやりと蹲っている。止まない雨音が頭から覆い被さってくる。常に、こもったその音が物音を支配し、低い雲が、外からの微かな光をも失わせる。時間の感覚がまるでなく、この家は世界から隔離された、別の場所にあるような気がした。それでも日は暮れて、雨音が更に激しさを増した頃、茜となな姉を家まで送ったおじさんとおばさんと、南の方の三人家族が、テーブルを挟んで向かい合わせに座り、おれはなんとなくの流れのまま、おばさんの横に座った。座布団の下に床が畳である分、お寺で座ったときよりも、足は痛くなかった。

大人ばかりで退屈なのか、テーブルの下を這って、しきりに子どもがこつちに来ようとする。そのたびに母親に引きずり出されて怒られているけど、五歳そこそこの子どもが、そう簡単に言うことをきくわけがない。それでも、何度目かに、不満げな顔のまま母親の

膝の上に落ち着いた。別にこっちに来てもいいのに。おれは、平気なのに。

おもむろに、南の方のおじさんが、口を開いた。ずっと難しそうな顔をしているけど、生来のものなのかもしれない。この家がよく似合っている。

交わされる世間話に、何の意味も無いことはよく分かる。場を埋める為の空気の振動を、聞くとはなしに聞いていた。

だからその中で、俊也くんと呼ばれても驚かなかった。乾いた表面がようやく剥がれ、本題が現れたんだ。それだけ理解した。

母さんがいついなくなっただのか。質問の中に含まれていた単語が自分の母親の名前であると気付くのに、少し時間がかかった。

はつきりとは分からない。もう帰ってこないんだ、そう思ったはずの日を、答える。

やっぱり、驚いていた。

「一ヶ月も、ふたりだけでいたのか」

もう、嘘を突き通す必要は無い。それなのに、申し訳なくて、答えるのが億劫で、「はい」とだけ呟いた。

「誰にも言わなかったのか」

「はい」

嘘は露呈しきっているのに、それをおばさんの横で答えるのがたまらなく苦しかった。

今になって、やっと、自分が突き通していたその重みが身体にのしかかってきた。おれは、人として酷いことを、他人の優しさを平気でねじ切る真似をずっとしていたんだ。最低だ。

「何で誰にも言わなかったんだ」

それは、おじさんたちにも言っていないことだった。みんなの視線が迫る。答えないと。

罪悪感を無視してまで、あの場所に固執していた理由。それは。

「それは……」

言葉につまって視線を落とすと、爪が白くなるまで強く握りこま

れ、膝に置かれた自分の両手が見えた。意識してその力を抜き、そつと目線を上げると、大きくて真つ黒な瞳が向かいに会った。その子も、じつとこっちを見ている。

黙っていれば誰かが答えてくれる、そんな子どもじみた発想は通うしない。改めて、おれはおれに聞いてみた。

何で、おまえはあそこに居たがったんだ。

ナイフを握ったとき、もうふたりで逃げようと、そう思った。でも、そうなるまで、限界まで、あの部屋に居たいと思っていた、そのわけは。

考えても止まらず、止まらないので、そのまま口を開いた。

「誰かにバレたら、あそこには居られないし、もしかしたら、離れ離れになるかもしれないって。それで。それで、だから、ただ一緒にいられたら、よかったんだけど、でも……」

もう、何を言っているのか、自分でもよく分からない。

「ずっと居たら、母さんが帰ってくるってマリは思ってたみたいで、おれも、普通にしてたら、普通になれる気がして、それで……」

普通でないことをさらけ出せば、別のものを受け入れなければならぬ。本当は、それが怖かったのかもしれない。受け入れる覚悟は、あのナイフを握ったときに、やっとできた。離れてしまうよりは、世界の隅を逃げ続けるほうが、ずっとよかった。世界の隅なら、おれらに似合いすぎていたから、すぐに馴染める気がした。

南の方のおじさんが、大きな溜め息をついた。呆れと同情が大半を占めているそれは、どの大人も同じみたいだった。だけど、その反応は予想が付けられたから、何も感じない。

ただ、

「誰かに言えば良かったんだ。そうしたら、こんなことには……」
その台詞が、一瞬で、全ての感情を奪っていった。呆然、これって感情に入るんだろうか。

ああ、そうか。大人に言えば、全部ばらしていれば、こんなことにはならなかった。こんなこと、つまり。

マリは、死ななかった。

助けを求めているれば、一人で解決しようなんて思わなかったら、あの子は護られていた。一緒にはいられなかったかもしれない、あの部屋には居られなかったかもしれない。でも、こんな最期には、ならなかった。

ああ、そうだ。そうなんだ。

助けを求めないって、周りに嘘をつき続けていたのは。

あの子に、嘘をつくことを強要していたのは。

……おれだ。

頭が急にぼやけてしまい、口を少し開けたまま、ぼんやりと視線を動かした。「あなた」と妻に非難の声をかけられて口をつぐんでも、こつちと相對する目は射る様に厳しい。それだけで、確信できた。この人は、おれが嫌いなんだ。

「大人なしで、君たち二人で生きることなんて、無理だとすぐに分かることだろう。普通に判断していればよかったんじゃないのか」そんな言葉が耳に届く。

無理を通そうとしたから。嘘をついていたから。だから、マリは。

おれのせいだ。

おれのせいで、死んだんだ。

「そんな言い方はないでしょう」

珍しく、おじさんが大きな声を上げた。

「一番辛いのは俊也なんですよ。そんな責める様なことを言わなくても」

「責めてなどいませんよ。ですが、そちらも似た様なことを考えはしなかったんですか」

そう返されて、思わず、といったように言葉を失くしていた。そして、そんな自分を悔いる表情をすぐさま浮かべた。

「いきなり親に出て行かれて、普通な判断も何もあったものじゃない。まだ十四なんですよ」

「それなら、彼のしたことが正しかったとおっしゃるんですか。子

どもだからこそ、大人に頼るべきだと思いますがね」

「それは私たちにとって正しいことです。こうして置いていかれた子どもの心境が、そんな単純なはずはない」

「そうですか。少なくとも、そんな素質があったから、父親にはその上虐待までされていたんじゃないですか」

おじさんが息を呑む音が聞こえた。

そんな素質。つまり、俊也は判断力のない、置いていかれても仕方のない馬鹿な子どもだと言いたいんだ。親父が殴っていたのも、二人が出て行ったのも、元を正せばおれの性質のせいなんだって。そうなのかもしれない、きっとそうだ。だっておれは、欠陥品だから。妹まで死なせた人間なんだ。

「どうしてそんなことを言うんですか！」

座卓を叩き、おじさんが声を荒げた。それを見て、女の人二人とも、どうすれば治まるのか、顔を見合わせておろおろしている。タクマという小さな子どもが、怯えた様子で、母親にしがみついている。

だけど、ありがとう、もういいんです。大丈夫だから、もう止めてください。そんなことを言い出す権利などおれにはなく、ただ黙って、ぶつかり合う言葉を眺めているしかなかった。正面で怯える子どもに、声を出さず、謝った。

あとは大人の話だからと、しばらくして、見かねたようにおばさんに言われ、追い立てられるようにそこを出た。南の方の母親は、息子を寝付かせに、別の部屋に行った。

ようやく雨音がまばらになり、雲の中から月でも出てきたのか、障子を透かして仄かな光がやけに広い畳の部屋に入り込む。枕に頭をのつけたまま、室内を見渡したけど、頭側の壁に床の間があるだけで、時間が分かりそうな物は何もなかった。

多分九時ぐらいかな。さすがに寝るには早すぎる。それでも、もう動く気力は感じられず。じっと布団に身体を横たえていた。

膜が張ったように、頭の中がぼんやりする。

どれくらい経ったのかは分からないけど、向こうの方から廊下の板の軋む音が近付き、すっと音もなく障子が開いた。

自分の上に、その人の影が落ちてるのが分かる。廊下に背を向けたまま、目だけ開けていると、その誰かが枕元に移動して片膝をついた。

「大丈夫だ。俊也は、何も悪くないからな」

確かにそう言い、おじさんはすぐに立ち上がった。

振り返ったときには、もう敷居のところで障子に手をかけていて、その後姿におじさん、と呼びかけた。

「ありがとう」

眠い声のままでそう言うと、逆光でよく見えなかったけど、照れたように笑ったみたいだった。入ったときと同じ様に静かに障子が閉まり、足音が遠ざかっていく。

普段それ程よく喋るわけじゃないし、嫌われはないみたいだけど、あまり接しようとはしない人だから、こうして気にかけてくれるのは、純粹にありがたくて嬉しかった。でも、その少し後でまた聞かえてきた口論は、嫌だった。

目をぎゅつと瞑って、寝よう寝ようとするけど、何度もその中に自分の名前が出てくるから、頭が勝手に反応してしまって、なかなか寝付けない。目を開けると、やけに高い天井が見える。暗いから余計に遠くに見える。

うちの物とは違う匂いのする布団を握り締め、足を曲げて、左頬を枕に押し付けた。胸の奥は、もう痛まなかった。代わりに、あらゆるものが、遠くに感じられた。

ああ、もう朝だ。起きなきゃ。

ご飯どうしよう。確か、まだパンが残ってたはず。もう七時過ぎてるかな、過ぎてたら急がないと。目覚ましはセットしといたのに。それより、早く起こさないと、一緒に遅刻になる。

見慣れない天井が、意識を無造作に引き裂いた。あるはずのない障子が、右側にある。馬鹿だなあ、ひとりなのに、誰を起こすってんだよ。

雨は、すっかり上がっていた。

玄関の水槽の水面には、エサである茶色い粒が幾つか浮いていて、特に争いもせず、赤い魚たちがそれをつついていた。仲が良いのか悪いのか、分け合っている風もなく、かといって互いに干渉を示す様子もない。

「あの、これ……」

着ているシャツの胸元をつまんで振り返った。

「いつ返したらいいですか」

「ああ、いえ、いいのよ。返さなくても」

「でも」

「いいのいいの。余ってたものだし」

子どもを抱いて笑顔を見せながらも、頑なに拒否するのを見て、ああ、もうここに来てはいけないんだな、と思った。

「あそぼー」

小さな、本当に小さな手が、袖を握る。濡れているようなどنگり眼が真っ直ぐこっちの顔を見ている。

「何言ってるの。タクマは幼稚園に行くんでしょ」

母親に指を外され、うーと不満げな声を出し、代わりに「またね」と小さな手を不器用に左右に振る。ばいばいと、右手を振り返した。どこに帰るのかよく分からないまま、大人用の大分身体に余るシャツの端を握り、じっと車外の景色を眺めていた。道の片側にはときおり民家が並び、反対側には青々とした田んぼが続いている。

風景が一変し、コンビニやガソリンスタンドが軒を連ねる広い道路に出た頃、

「気にしなくていいからな」

おじさんが言葉の意味とは反対に、重々しい口調で口を開いた。

すぐに、昨日のことを言ってるんだと分かった。

「うん」安心させたいのに、出てきた声は小さい。

「俊也は何もしてないんだからな」

そう言われたけど、実際、おれは大嘘をつき続けていた。だけど、こう言ってくれているのに、真っ向から否定するのもよくないと思い、視線を動かした。バックミラー越しに、前を睨んでいるおじさんの顔が見える。その目はこっちを見るのではなく、ただ進行方向だけを見つめている。

「向こうに行く必要も無いからな」

向こうというのも、すぐに分かった。澄んだ黒い瞳と、エサをつつく金魚が、頭の奥に浮かぶ。そして、おじさんは、彼らのことがすっかり嫌いになってしまったらしい。容易に想像できることなのに、そう思った途端、身体の中に重い塊が沈んだような感触がした。こんなことを言うおじさんを見るのは、始めてだった。

「何も分かっていない。分かるうともしないんだから」

「でも、あの人たちは、昨日ちゃんと来てくれたから……」

目が合ってしまったらどういう顔をすればいいのか分からないので、少し俯いて呟いた。口を閉じると、エンジンの遠い音しか聞こえなくなる。何か言うべきだろうか。普通なら、この静寂は破るものなんだろうか。そう思っていると、

「……そうだな」

おじさんがぼつりとそう呟いた。しばらくして、赤信号で一旦停止しているとき、「ごめんな」そうも言った。

「えっ」

謝られる理由が全く分からない。反対に、ひたすら頭を下げなければならぬのは、おれの方なのに。

「俊也のことは何も知らないようだったから、私が勝手に説明したんだ」

バックミラー越しに、やっと一瞬だけ目が合い、「ううん」と首を横に振った。おれはあの人たちの名字すら知らなかったのに、向

こうはおれのことをそれよりは少しだけ知っていた。特に疑問に思うこともなかったんだけど。

「俊ちゃん」と、助手席のおばさんが振り返る。信号が青に変わり、再び景色が流れ出す。

その笑顔と明るい声には、どこか切羽詰った空気があった。やっ
とタイミングを見つけた、そんな感じ。だけど、この質問は近い
ちにかけられる。何となくそんな気がしていた。

「昨日、色々話し合ったんだけど……」

くるのかな。やっぱり、これは。

「俊ちゃん、家に来る？」

遊びに来る？ そんな軽いニュアンスだけど、意味は全く違
うくらい、頭のよくないおれにも分かる。気を遣ってくれてるんだ
ってことも。

予測できていた台詞なのに、気付くと、皺が寄るほど、シャツを
強く握っていた。返す言葉が思い浮かばず、唇を少しだけ噛んで、
泳いってしまう視線を固定する為、膝の辺りまで下げる。白い服が僅
かに動いているのが視界に入り、今も自分が呼吸をしているんだと
気付く。

避けたい沈黙を避けきれずにいると、まるで準備していたかのよ
うに、おばさんが滑らかに台詞を続ける。この時のために用意され
ていた台本でも、読んでいるかのように。

大丈夫だから、そんな意味の言葉が並んでいく。だけど、それが
殆ど頭に残らない。家に来る。最初に言われた台詞が、思考の大部
分を占めて居座っている。

慣れた単語が空気を漂ってきた。ガッコウ。行かせてあげられる
って、そういう台詞の一部。「学校」と知らないうちに口が動いて
いた。沈む空気を押し上げるように、無理矢理な明るい声が返つて
きた。

それなのに、「いいです」と小さく呟いていた。拒むほうの「い
い」だった。

「もう、ドラえもんを作る必要は、なくなったから」

人に迷惑をかけてまで通う意味が、見つけれられない。

少しぐらい変なことを言っても大目に見られるほど、その時の精神状態は危ぶまれていたから、すぐ気にされてはいないみたいだった。え、と驚いた、不思議そうな返事があっただけで、台詞の意味を深く追求されることはなかった。

後でゆっくり考えてみて。

そう言ってくれたけど、答えは誰もが知っていた。なのに、答えられなかった。おれは、どうしようもなく無力な、ただの中学生だから。

31 朝が来なければ

サンダルを引つ掛けて玄関先まで出てきた茜は、

「えー何それ、だぶだぶじゃん。かつこわるー」

なんて指差して笑った。無理をしているのが丸分かりで、誰も笑わなかった。無理をしている証拠に、彼女は昨日からなのか、それをも一晩中泣いていたのか今朝だけなのかは分からないけど、その泣き腫らした瞳に、未だに水の幕を張らせていた。平気でもないみたいで、平日の八時過ぎなのに、制服にも着替えておらず、今起きたところだと言った。

「ねえ、俊也何座だっけ」

「なんで」

「いいから、ほら」

「獅子座、多分」

「多分って何それ。しーしーは、あ、七位だって、あたしなんか十一位だ。まあいっつか、今日はずっと家にいるし」

気軽そうに、テレビを見ながら茜が喋る。自然体のように見えるのに、いつものようにからかってくることはなかった。

丸一日半その家で過ごし、翌日の午後、団地の家に帰った。いろいろ話して、個人的なワガママを通してもらって、あと少しだけここに居られることになった。今は七月に入っただけ、これから終業式の日まで。

一人にしておくことをすごく心配してくれていたけど、大丈夫だとか笑った。なんて可愛くない子だろう、おれ自身そう思うのに、本当に大丈夫、と何度も念を押して、最後に、窓には気をつけてと言いくそうに言って、彼らは玄関のドアを閉めた。

本当にひとりになって、四畳半にひとり分だけ敷いた布団に転がる。暗い部屋を照らす月光、それを受け入れている窓から、涼しい風が流れてくる。何度も自分に尋ねてみたけど、その窓を越えられ

るほど身体が動きそうになかったから、わざわざ閉めることはしなかった。ひどく、重い。動きたくない。

数日離れていただけなのに、この場所から何年も遠ざかっていたような懐かしさと、それにくつつくよそよそしさと、それでもどこよりもおれを受け入れてくれる何かがあった。生まれてからずっと住んでいるんだし、当然なのかもしれない。「帰ってきた」そう思える。

高くない天井を見つめて、伸ばした素足にひんやりした風が触れていくのを感じる。

どうして、おばさんたちはあんなに優しくしてくれるんだろう。来られるときは、できるだけ来てくれるって。何で構ってくれるんだろう、心配してもらえるんだろう。血の繋がったシンセキだからだろうか。それだけで。

もしかしたら、罪悪感を避けるためかもしれない。優しくすぎるから、一人ぼっちになったシンセキの子を放っておくことが出来ない。見捨てた後の自分を、許せなくなるのかもしれない。

力を振り絞ってうつ伏せになり、バスツと音を立てて自分の頭を布団に押し付けた。

ああもう、何でこんなこと考えてるんだよ。ひどすぎる。どうしても人の優しさを何も考えずに受け入れられないんだ。あの人たちは、何か見返りを求めているわけでもない、ただ、おれのことを心配してくれているのに。だからおまえは馬鹿なんだ、どうしようもないんだ。欠陥品のくせに。迷惑ばかり掛けてるくせに。この大嘘つきめ。何も反省してねえじゃんか。バカトシ。

声には出さず、ただ頭の奥だけで叫んだ。身体は微動だにせず、ただただ自分に精一杯の暴言を吐き続けた。嫌だ。嫌なのに、これだけは、自分からは逃げられない。

分かってる。そう、分かってるよ。

おれは、怯えてるんだ。優しくされるのが、怖くて堪らないんだ。優しいもの、そう信じていたものに背を向けられる瞬間、それが、

何よりも怖い。優しくされるだけ、それに比例して、不安は大きくなる。興味を失われた直後、もう立てなくなってしまうんじゃないか、そんな気がして。想像するだけで、叫びたいぐらい怖くなる。震えそうなほど、恐ろしくなる。

朝が来なければどれでもいいだろう。ありえないことを願った。

もう、何も考えたくない。考えたら、止まらなくなる。おれに、何かを変えられる力なんてないのに。

横を向いて、投げ出した手が、あるものを求めているのに気が付いた。

宙を彷徨う手で、代わりに反対の腕を握り締める。ぎゅっと、温かいその腕を。

考えたくなかった。瞼を閉じた。

32-1 疑惑

まだ休んでいてもいいといろんな人に言われたけど、行くなどか来るなどとは言われていないので、学校に行くことにした。家のこととか複雑そうなこととか、手伝おうとしても、いいからと大抵断られてしまう。何もしないでいるのが一番嫌だ、だって、考えてしまいうから。

雨の日がよく続く。細い雨が、廊下の窓に吹き付ける。水滴が伝って落ちる。

一時間目の前、その廊下で、大柄な担任の前に呼び出された。もう全ての事情が知られているはずだから、先生は気分が悪いだろうと思った。特にシーサーはよく気にかけてくれていたから、さぞ、おれのことを扱いにくい生徒だと思い直しているはずだった。

「全部聞いたんだけどな、大変だったな、南」

心が重い。目を合わせ辛くて、項垂れたままぼっと足元を見つめる。制服の黒色と、スーツのグレーの色が、視界のこっちとあっちにある。

「転校は、二学期からだったか」

登校してきた割には声を出す元気がなくて、はいと小さく返事した。なんとか顔を上げると、大きな手が伸ばされた。

それが、力強く肩をたたく。

「頑張ったな」

太い声が聞こえる。見上げたその顔は、目じりの辺りに皺を作って笑っていた。先生、怒ってないんだ。靄がかかった思考の中でそう思ったけど、笑い返せない。瞬きをしながら、このクラスでよかったと、担任がこの先生でよかったと思った。ただ、もう少し早く、それに気付きたかった。

授業中は全く眠くならないけど、真剣になる気力も出てくれない。ただ、前を向いて黒板の方を見ている。

先生たちは気を遣って、当ててくることは一度もしない。普段少しぐらい話す周囲の席の何人かも、変に視線をやってしまったくないよう、ずっと前を向いている。

おれはここに居ないんじゃないか、ふと、そんな気がした。代わりに、殆ど話したことのないクラスメイトが、終始にこにこしながら、二言三言何か言った。ただ、話の内容が頭に届かず、自分がどんな反応を示しているのかも、ぼやけてしまつてよく分からない。後で思い出した。ああ、あいつは学級委員だ。

「よお、あれ、おまえ珍しく起きてんじゃん、どしたんだよ」
ただ一人だけ、対応が違った。

「トシ、知ってるか。あのさ、最近よく雨降ってるよな。そんで、お前が休んだときに運動場の木に雷落ちたんだぜ。プールの脇の、あのでっかいやつ。幹んところがバサッって裂けてて。後で見てみるよ」

うんと返したのか、分かったと言ったのか、反応していないのか、すごく曖昧で分からない。それでも、山本の必要以上にでかい声は続いた。

「オレこの前さ、兄ちゃんにも電話してやったんだよ、夏休みは帰ってきやがんのかって。そしたらさ、あ、おまえ海か、まじで親父かと思つたつったんだぜ。ひでえだろ。冗談にしても嫌だろ。似てねえよな。なあ、分かるよな、似てねえよな」

真面目に大きく目を見開いて、なあなあと身を乗り出す。

声を出すのが、ひどくしんどかった。喉の奥が潰れてしまったよう、で、言葉を出すことが重い。だから、せめて表情だけでも笑おうとした。うまく頬が上がってくれず、笑えなかった。

それでも、山本はいつものように笑って、「だろ」と話を続ける。周囲は、一人語りに近いそれを明るいついで張り上げる山本海に、あまりいい目を注いではない。彼らにどこまで知らされたのかは分からないけど、不幸を背負った同い年に対する態度としては非常識なものだと、その目には映ったんだろう。

でも、おれは、山本がいてくれてよかったと思った。

ろくに反応できない。微かに笑うか、うんとかああとか、喉を震わせるだけで精一杯だった。それでも与えられる「普通」のものが、本当に嬉しいと思ったけど、表面まで、それはなかなか伝わってくれなかった。

遠い。おれが遠い。少し離れたところで動いている自分を眺めているみたいに、入れ物と中身が少し距離を置いている。ぼんやりしたまま、南俊也が生きる為に動いている。寝てるのか起きているのか分からないそいつを、ただおれが見ている。

なんてね。そんな馬鹿な。

すっかりしろよ、ちゃんとしろよ。おれは、ちゃんとしている。起きてる。目を開けてる。ほら、つねれば腕は痛い。アザまでできた。今は家、ここに。ここに、ちゃんという。

数日経って、家に来たなな姉が、言いにくそうに眉間に皺を寄せ、

「あのね、俊くん。一度、警察まで行ってくれないかな
そう言った。

「そこまではまだしてないと思うけど、多分、きっと」

「やだなあ、俊くんが何かしたってわけじゃないよ」

姉妹でよく似た大きな目を細め、手を振って笑う。

「ただ、ほら、ここって最近……自殺、とか多いじゃない。だから、もしかしたら関係あるかもしれないってね、もしよ、そんなわけないんだから、ちょっと話してすぐに帰れるから」

明るい照明の下、いつものように笑おうとする彼女を眺めて、頷いた。率直過ぎて、逆に拍子抜けしたみたいだった。

「あれ、どうしたのそれ、アザ？」

内奥にちよつとした戸惑いを秘めた瞳が、不意に一点で止まる。

これ、と右手で左腕をつつくと、そうそうと返事がある。

「できるよ、これぐらい」

「まさか、転んだりでもしたの」冗談を言う時の、子どもっぽい声。
「こうしたら、ほら」

右手で左腕の一部をつまみ、思い切り指に力を入れる。強くねじると、沈黙し続ける身体が、痛いと声を出した。それでも無視してつねる。爪が食い込む。声が、少しだけ大きくなる。

「止めなさい」

え、と見上げたなな姉の顔は、少し引きつっていた。その瞳が、真っ直ぐ見下ろしてくる。

「やめて、そんなこと」

少し悲しさが混じっていて、右手を離した。つねられていた部分は、赤くなっている。

だって、もうひとつの方もこうしてできたのに、不思議になって見上げた。滅多に怒らないはずなのに、厳しい顔をしている。

「そうやってつくったの」

「そう」

「どうして」

「どうしてって……」

そんなこと聞かないで欲しいと思ったけど、なな姉はじっと黙って、諦めてくれそうにない。

「こうでもないし、おれが振り向かないから」

離れてしまった俊也は、これぐらい呼びかけないと、はつきり目を覚まさない。だからこうして近づけるのに。

理解し難い答えに、彼女の悲しさは内側で濃度を増していた。さっきの行為全てを憎んでいるらしかった。

「なな姉、怒ってる？」

「怒ってる」

その顔のまま、淡々と口を開いた。どうしよう、嫌われたかもしれない、こんなに優しい人にまで。

「もうそんなことしないで約束して、ね」

許してくれるみたいに笑っていたから、分かったと頷いた。

絶対よ、といつも通りの柔らかい笑顔で、俊也の赤くなった腕を、
細い指で撫でた。

それすら、おれには、離れたもののように見えた。

32 - 2 疑惑

日下、とその熊っぽい人は名乗った。

大柄で、目つきの厳しい風貌は、動物でいうと熊っぽい。警察と
いうところのイメージにぴったりで、妙に納得してしまう。その横
のひとまわり小柄な、つまり標準体型の人は、野田というらしく、
運動部的な短髪の、ハリネズミを思わせる髪形をしている。

それ専用の部屋じゃないみたいで、会議用の長い机が四角形を作
って並んでいる、閑散とした部屋だった。ブラインドが上がった窓
の外の空は灰色で、いつ雨が降ってもおかしくないような天気だっ
た。

「事件性は薄いと思うんだがね。不運な事故にしては不可解な点がある。妹さんは、窓から落ちるぐらい、普段から情緒不安定だったのかな」

横に長い会議用の机の正面から、熊っぽい日下が尋ねた。

「そんなわけじゃない」

おれの隣、ハリネズミの向かいで、代わりに返事がされる。

「真理ちゃんは、そんな危険なことをするような子じゃない」

付き添いの茜が、じっと熊を睨む。本日何度目かの台詞には、
敵意に近いものが漂っていて、彼女はそれを隠そうともしていない。
「だから、何度も言っているが、きみじゃなくて南君の考えを聞い
ているんだ」

「そうだってことは俊也が一番よく知ってる。ね、俊也」

視線がこっちにスライドして、流れのままに、「うん」だか「ん
ん」だか声を出した。ほら、というように茜が満足げな顔をし、相
対する感情は更に悪くなる。それでもおれは、その空気をを壊すた
めの声でさえ、出す気力がなかった。相変わらず、喉が詰まってし
まって、言葉を空気に浮かべるのが、ひどくしんどい。

「でも、このままだと不可解なままで終わってしまうんだ。あやふ

やなのは、嫌だろう」

二十代後半ぐらいの、野田が諭す様に言った。この人たちは、事件に結び付けたいんだろうか。

「だから、そんなの……」

言いかけた茜が、じろりと熊に睨まれて、流石に口を閉じた。反対に、その隣では無理矢理な笑顔が作られていて、何とか張り詰めた空気を和ませようという努力が滲んでいる。

「何でもいいんだ。何か、気付いたことがあれば」

特殊なカメラで見たら気まずい汗が見えそうな笑顔で、野田が言う。不名誉な事故か、事件性のあるものか、どちらかにしないとけないらしい。

そうじゃないのに。

でも、本当のこと。幽霊が、何て言葉を出せば、全く信じてもらえないまま、次は病院に送られるだろうということはすぐに分かった。言えるわけがない。霞んだ思考がそう判断した。

「なら、一つずついこう」

乾いた咳払いと、低い日下の声。

「このことは、ひと月前の母親の失踪と関係があると思うかな」

やっとまともに顔を上げると、探るような視線と真っ直ぐぶつかった。もしかしたら、本当のことが引きずり出されるんじゃないかと思い、机に視線を落とした。

どうなんだろう。

あの影が、母さんがいなくなるのを見計らって存在を増したんなら、限りなく関係はある。そうじゃないんなら、直接的な関係はそうない。

分らない。

胸の奥が重苦しい。無骨な鎖でも何重に巻きついているみたいで、重い。

黙ったままでいた。声まで、腹の奥に引き摺り倒されてしまっていた。

「そのことも搜索するべきなんだがね、どこに行ったのか、心当たりは全くないのかい」 何か言いそうな茜の視線を黙殺して、更に続ける。

母さんが、どこに行ったのか。多分、分かつてる。ほぼ間違いない。

「……知らない」

久々に出した声は、少しかすれてしまっていた。

「二年前に父親も行方不明になっているみたいだが」手元にある紙の束に一度目を向ける。「その時も搜索願すら出されていない」パラパラと紙の触れ合う音。

どういうことだと、空気が語る。机の下でそつと右手の甲に触れたのには、こつち側に座っている茜だけが、気付いたみたいだった。声が出しにくい。「わからない」小さく呟いた。

「何でもいいんだよ」

この場で許される精一杯の明るい声。

「それを元に、どっちか一人でも探し出せるかもしれない」

ハリネズミっぽい髪型の野田は、そう言ってくれる。

見つけなくていい。でも、そう言つと、もっと怪しまれそうだった。

ふたりを見つけたら、どうするつもりなんだろう。家族だから、一緒に暮らせて、言っただろうか。責めるんだろうか。

そんなことしないでいい。ここまできたら、もう二度と、本来の形には戻れない。ふたりが、あの部屋を出て行ったことは、どうしようもなく本当のことなんだから。

「ひどいことだよ」取り成すような。同情を土台にした表情。「自分の子どもをおいていくななんて」

そうかもしれない、みんな、そう思うんだろう。

でも、責めないでほしい。どんなに好きでも嫌いでも、血の繋がった親なんだから。どちらかがいなかったら、おれはここに存在しないんだから。顔すら会わせたことのない人が言う悪口なんて、聞

きたくない。

もういい。ふたりは、出て行っただ。親父は分からないけど、母さんは、何かと考えた結果のはず。あの夜に流していた涙は、躊躇いだっただと思いたい。それでも、捨てていったんだから。その方が、マシだと思っただから。

どこかで、それなりにやっているんなら、それでいい。自分の生きたい人生を見つけたんなら、それを変えてはいけない。おれんのか、邪魔してはいけない。

あいつは大嫌いだけど、親父よりも、一番嫌いだけど、母さんが、自分の子どもよりそっちの方がいいと思っただんなら、そこにいてほしい。

「いなくなっただじゃない」

声はまだかすれていた。やけに遠くて、自分の声だと思えなかった。

おれは、どこかにいる、ふたりの邪魔になっただはいけない。きっとそれは、二人にとって不幸なことだ。親父も母さんも、どこか知らないところで少しでも幸せになれているんなら、それでいい。

「出ていったんだ」

溜め息が聞こえてきそうだった。ただのひねくれた言葉の綾だと、失望されたみたいだった。

上げた視線の先、窓の向こう、まだ雨は降っていないかった。としや、と茜がただ一度だけ呼ぶ。どんな意味に続いていたのか、結局分からなかった。

「要するに、関係はないんだな」面倒な仕事をさっさと終えようとする、呆れを越えた目下の声。「先日のことには」

遠く、聞こえた。それでも黙っていた。

「不幸な事故にしても、最も引かかるのは、近所の人君の叫ぶ声を聞いたということなんだが」

鋭い視線が向けられる。

「ドアを叩く音と、妹さんの名前を呼ぶ大声が何度もしていた。ま

さにその時に、だ。君は、何が起るか、何が起きているのか、知っていたんじゃないのか」

思考も、何もかも、突き通そうとしている。しんとした中、ぼやけた頭の中、その台詞が反響する。

知っていた。

そう、おれは。

「知らない」矛盾した言葉が零れて、堅い床に落ちた。気の効いた台詞が、思いつけない。けれど嘘をついても、すぐにばれてしまうことだった。

鋭利な探求者の目を、見られない。横で、茜が珍しく戸惑っているのが感じられる。

「間違いなく、君も被害者だ」

そう言われるけど、その言葉も、心に矛盾している。

「数日前に兄弟げんかをしたりとかは、なかったかな」

喧嘩。ケンカ。おれが、マリと。

まともに喧嘩になるわけがない、八年分も歳が離れてるし、あの子は弱い女の子だ。何か食い違いがあっても、しばらくすればふたりして忘れてしまう、それぐらいなのに。

意識が、ようやくはつきりした。

そうか。この人たちは、疑ってる。

つまり、こう言いたいんだ。

おれが、あのとき。

あの部屋で。

おれが。

おれが、マリを……。

殺したんだって。

「信じらんない！」

茜が声を荒げ、勢いあまって立ち上がる。「ありえない」と相手に向かって怒鳴りつけた。

「俊也と真理ちゃんは、すごく仲が良いんだから。喧嘩なんてす

るわけないじゃない！　ばっかじゃないの、絶対ありえない！　そんなこと」

驚いて、見上げた。だって、茜は、いつも馬鹿にしてくるのに。バカトシって、よく蹴ってくるじゃんか、何で茜がそこまで怒ってるんだよ。

そう思っていると、

「ムカつく。さいってー。帰ろう、こんなところ、いなくていいよ。さっさと帰ろう」

そっつい捨てて、こっちの右腕を掴んだ。力の入ったその手が、強く引く張った。

帰りのバスでも、茜は隣で終始文句を言い続け、時折同意を求めた。結局、そう簡単には帰れなかったし、おれがまともに反応できなかったから、長引いたそれが終わったのは、夕方を迎える頃だった。相変わらず、天気は悪い。朝も昼も夜も、よく分からない。

バスを降りて先導しながら、「あーもー腹立つ」とぼやいている。彼女が、道端のポストを親の仇のように蹴りつけたとき、後ろに慣れた気配を感じ、おれは足を止めて振り返った。

いつもの影が、少し向こうに立っていた。

増していたはずの禍々しさは、すでにそこにはない。ただ、儚い子供の影。風に吹かれれば掻き消えてしまいそうなその子が、ただこっちを見つめている。ぼやけている表情は、やっぱりよく分からない。曇天の下、じっと立ってこっちを向いている。

なんだ。おまえ、まだいたのかよ。

もう、あの子を連れていっただろ。おまえは、そうしたかったんだろ。

まだなにか、不満なのか。

あの子じゃ、足りないのか。

「俊也、なにやってんの、行くよ！」

ポストを少し過ぎたところで声を張り上げる茜を振り返り、もう一度だけ視線を戻した。

影の消えた場所に背を向けて、また歩く。

「あ、雨」

茜が天を仰いだ。

見上げた低い雲の中から、細い雨が降り始めていた。

33 うそとほんと

松川家、もとい現在の南家に、近所付き合いというものは、十何年も団地に住んでいた割に、殆ど存在しなかった。

あの親父に、そんなものを考える気は毛の先程もあるはずがないし、母さんは忙しくて、夕方の井戸端会議に出席する暇なんてなかった。おれは近所の同年代の子と遊ぶことはあっても、愛想が良いわけではないから、その親に好かれるということはなく、かろうじての望みであるマリには、仲の良い子はいたけど、他とは違って少数派である保育園に通っていたから、その深さには限界があった。

かといって、その関係に何か問題があったわけではないし、逆に面倒ごとが少なくて良かったのかもしれない。向こうだって、五階の角部屋には子供連れの家族が住んでいるという程度の情報があれば、それ以上気にすることなんてない。

誰だって、自分と他人との関係、その境にどれだけの太さの線が引かれているのかさえ分かれれば、それでいいんだ。おれのところは、その線が比較的濃くて太かっただけ、それだけなんだ。

気付かないはずがなかった。おれが、泣けば余計にぶたれることを理解していなかった頃に、迂闊に上げてしまった泣き声が、彼らに聞こえていないはずがなかった。数年後から取って代わった、それを見て泣き出す小さな女の子の声が、聞こえていないわけはなかった。それをかき消す男の怒声や、時折激しさを増す夫婦の口論、人が人を殴る音に、少なくとも、隣と上下の部屋ぐらいには聞こえているはずだった。

だけど、その部屋の長男が毎晩どんな目に合っているのか、何が起きているのか、知っていても知らないとか決め込めば、気にする必要はない。いつまで経っても絶えない痣と包帯には、気付けないまま、適当な挨拶で距離を保てば良い。気付かないはずがなくても、気付けないと信じれば、気付かない。

知らないのは、気付かないのは楽だから。
当たり前だ。

だから、誰も助けなかった。わざわざ関わろうとする人なんて、
いるわけがない。そんな必要も義理も、どこにも存在しない。

だって、仕方がないんだ。ろくに親しくもない相手に無闇に親切
心を起こして、理不尽に逆恨みでもされたら、もし自分の大事なも
のが傷つけられれば、道理に合わない。それぐらい誰だって考える
こつちだって、申し訳が立たない。逆に、下手に手を出されるほう
が、恐ろしい。

おれだって、誰かに関わる気なんて全くないんだから、期待する
権利なんてないし、そもそもそんなことを思ったことがない。これ
はうちの問題なんだ。

無関心は便利だ。面倒ごとを起こさない。その共通した気持ちだ
けを奥底に持つて、大人が自分に接していることには、随分前に気
付いてしまった。だから、おれも、気付かない振りをした。誰にも
おれの姿は見えていないはずだった。

ある夜、そろそろ寝ようとして気がついた。
あれ、何でおれ、ふたつも敷いたんだろう。

布団を二組も出した記憶が全く無い。労力も二倍だったはずなの
に。

しまい直すのも面倒だから、そのまま眠った。

ある朝、茶碗にご飯をつぎながら気がついた。

あれ、これ何に使おうとしたんだ。

テーブルの上に、使うつもりのない茶碗が乗っている。無意識の
うちに出していたらしい。

急いでいたから、学校から帰って片付けようとそのままにしてお
いた。昼間、おばさんか誰かが来ていたらしく、放課後に帰ったと
きには、綺麗に片付けられていた。

何事もなく、ここに帰ってきて一週間が経った。

梅雨明けしたらしいのに、まだ雨はよく降る。昨日からの雨がようやく止んだ、湿気の高い、暑さがまとわりつくような日曜日の午後。

「あー疲れた。足痛あ」

必要以上の大声をあげながら、部活用の水色の鞆を肩に掛けて、茜がドアを開けた。髪を束ねているから、どっかの学校で部活でもあったんだろうと思っていると、

「さっきまで川越行つてたんだよね。練習試合でさ」

靴を履いた足を玄関に投げ出したまま、廊下に仰向けに倒れ込んだ。川越高校は、中学へ行く方角を二倍ほど歩いたところにある。

「お茶ちょーだい、おちゃ」

「水筒持つてねえの」

「全部飲んだ」

寝転んだままあっけらかんと言う。本当になな姉と姉妹なんだろうか、と生涯何度目かの疑問を抱いた。

しかたない、と台所に引っ込むと、少しして茜もやってきた。

「はい、どーも。……あれ、俊也飲まないの」

え、とテーブルの上を見ると、もう一つコップが置いてある。わざわざ中身まで入っている。

「おれ、出したっけ」

「なにそれ。さっき自分でお茶ついであじやん」

もしかして新手のギャグかと尋ねる彼女に、まさかと返して首をひねった。無意識だったから、何も覚えてない。

「おーい、しっかりしろよ」

もったいない、と飲んでいる最中に背中をはたかれた。危なかった。

「で、何しに来たんだよ」

「そりゃー決まってんじゃない」空になったコップを流しに置く。

「俊ちゃんがひとりで 寂しがってたらかわいそーだなーっていう
優しさよ、優しさ」

「ちゃんつけんな」

「いいじゃん、減るもんじゃなし」

よいしょと、未だに肩に掛けていた鞆を床に下ろした。けっこう
中身がつまっているようで、勢いよく降ろされたそれは、重そうな
音を立てる。

「麦茶飲みたかっただけだろ」それを見ながら呟いた。

「うわー、それを言うか」大げさに目を見開いてこっちを向いた。
相変わらず、テンションが高い。「人の優しさを無にしやがってー、
この子は」

茜の場合、ちょっと違うと思う。

その証拠に、

「まあ、それもあるけど」

そう付け加えた。

「あつ、そうだ。電話させて」

わざわざしくと両手を打ち合わせる。やっぱそれが本題か。

「茜、携帯持ってなかったっけ」

「忘れた」

じゃあその鞆には何入れてんだよ。そう思ったけど、言い争う気
も起きなかったから、電話台の前から離れた。

隣の四畳半に移って、ひとりで寝転がる。どうやら家にかけてい
るらしい茜の声が、響いてくる。

じっとしていると、考えてしまう。あれは、嘘だったんだろうか。
そんなことを、ずっと、いろいろ考えて、いろんなことが無意識に
なってしまう。おれが、遠くなる。

「ありがと。って寝てるし」

気付くと、部屋に入ってきた茜がどさりと鞆を降ろして、その横
に腰を下ろしていた。

「しんどー。そういえば、あんたは今日何してたの」

「いや。なにも」ぼんやり口を動かした。

「なにもって、ずっとそんな風にしてたわけ」

「うん」

「もったいな。日曜なのに、不健康なやつ。ちょっと走ってきたら、そこら十周くらい」

「いい。疲れるし」

まったく呆れたといった、大げさな溜め息が聞こえた。

「つまらないなあ。ほら、男ならもつとしゃんとしろよ。走ってこい、ほら、立て」

体育会系の台詞と共に、足を軽く叩かれる。だけど全く、走る気になんてなれない。やめろよ、と手で払う仕草だけ返した。

「せっかく来てやったんでしょ。あー、そうだ、洗濯ぐらい手伝ってあげようか」

「それは終わったから」

「ちゃんとやったんだ。えらいえらい」

せっかくか。それなら、せめて起きてないといけないな。

そう思い、身体だけ起こした。窓のある壁にもたれると、反対の壁に背を預けている茜が、髪を束ねているゴムを外して、軽く頭を振っていた。肩を越す真っ直ぐな髪が揺れる。

「あーあ、やっぱ河高は強いわ」

「負けたんだ」

「まーけーまーしーた。僅か二点差で。もうちょっとだったのになあ」

試合の様子を、まるで今行なわれているものを見ているかのように、茜が細かく話す。

聞いてないと。

そう思うのに。

その声が、だんだん遠くなる。

やっぱり、あれは嘘だったんだろうか。

「シュートがさ、やっぱ焦ってるとなかなかのよね」

今までずっと、嘘をついていたんだろうか。
ずっと、ずっと。

「練習だしさ。次勝てばいいよって、みんなで言って
それなら、おれはずっと、騙されていたんだろうか。
そうだとしたら。それは、すごく。」

「美沙とかもさ、どっか行ってくつて誘ってくれたのに、ここに来たん
だからね」

「すごく。」

「だから」

「悲しい。」

「しつかりしてよ！」

びくりと身体が震え、意識がようやくはつきりした。話を聞いて
いなかったのは、すっかりバレてしまっている。

「あ、ごめん」

咄嗟に謝ったけど、きつと、ちゃんと聞け、なんて頭ぐらいはた
かれるだろうと思った。

だけど、何秒経つても、力どころか言葉の制裁もない。茜の顔を
見て、驚いた。

「なにぼーつとしてんだよ」

そう呟いた表情は、彼女の姉によく似ていた。おれが自分の腕を
自分でつねったとき、傷つけたときに見せた、なな姉のどこか悲し
そうな顔。茜は、怒るというより、そんな顔をしていた。さっきま
でのテンションが、嘘みたい霧散してしまっていた。

「あのさ、ほんとに何も知らないの」

「知らないって、何が」

「だから、もう、にぶいなあ」

片手で自分の頭をかき、苛々しながら言う。だけど、そんなこと
を言われても、主語がないからよく分からない。

「あんた、ずっと知らないとか分からないとかしか言わなかったじ
ゃない」

知らないとか、分からない。

頭にかかるうとする靄を何とか振り払って、記憶をたどる。なんとなく、それっぽいものを見つけ出す。

「ああ、警察んときの」

思い出した。あそこでかけられた台詞への返事を、おれは大抵その言葉だけでやり過ごしていた。

「本当はどうなの」

「いいだろ、もう」

その言葉に、茜はすこしムツとしたようだった。

「教えてくれたっていいじゃんか。なに、あたしもあの人たちと同じだと思ってるの」

やっぱり、気になってるんだ。そして、それを問う権利は、彼女にはある。

「ねえ、俊也は本当に何も」

「幽霊って信じる」

「は？ 幽霊？」

真剣な顔が、予想外の質問にぽかんとする。数度瞬きをし、仏頂面で、

「いるんじゃない。見たことないけど」

不満そうに呟いた。

「じゃあ、あんたはどうなの」

「さあ。多分、いる」

「さあつて、ちよつと、なにそれ」

調子狂うわ全くと、不機嫌な顔で、こっちに視線を向ける。

「なに話はぐらかそうとしてんの。逆効果だつての」

「してねえよ」

「してんじゃない。わけわかんない」

そう言い切って、はあと息を吐いた途端、意識していないみたいだったけど、そこに不安と、なんだろう、寂しさのようなものが、おれには少しだけ見えた。自分の鞆を脇に寄せてちよつともたれか

かっているのは、なんでもない自然な様子を作るための動作。ぼんやり霞んでいるのに、それだけはよく分かった。

おれも、向かいの壁にもたれたまま、なにを見るわけでもなく、天井に顔を向けた。

「あの人たちが言ってた、あんたが、あの時ドアを叩いて呼んでたって、あれって」

「うん」

「……じゃあ、わかってたんだ」

茜が口を閉ざす。おれも喋らない。

夕方に向かつていく時刻、強い西日が窓から突き刺さる。

「何で、分かったの」声が、微かに揺れている。

「さあ、なんでだろう」

「いつから」

「直前まで分からないといえば分からなかったし。もしかしたら、ずっと前から知ってたかもしれない」

「なにそれ」

力のない台詞。茜らしくない。

「それなら、もっと早くにどうにか出来てたんじゃないの」

「気付いたときが、遅すぎた。頭悪いから、上手いこと考えられなかった」

比較的、長い沈黙。

おれは、茜を苦手としているけど、今は彼女の思考が手に取るように分かる。疑念も葛藤も、全部。迷いも、躊躇いも、抱いているはずの、恐ろしさも。

「それなら」最後の躊躇。「事故じゃ、ないの」

天井から目線を落とすと、奥の方に恐れを含めた彼女の視線とぶつかった。それでも、さつきまで故意に向けなかったそれを、今度は全く反らさないのが、彼女らしい。

言わないといけないときに誤魔化していたことを、どうしてあっさり言えてしまったのか。相手が、宮里茜がシンセキだから、見知

った人だからだろうか。だから、おれは。

まあ、いいや、どう思われても。

「なんて言ったら、信じてもらえる」

そう言ったおれは、少し笑ってさえいたらしい。それが夕日の逆光と相まって、初めて俊也が怖いと思ったと、後で言われた。もちろんおれは、自分がそんな顔をしていること自体、全く分からなかったんだけど。

それでも、茜はそんな気持ちは微塵も顔に出さず、

「ばっかじゃないの」

と、そっぽを向いた。それが最も優しい対応だった。

「ちよつと確認してみただけじゃん。そんなこと本気で疑ってたら、ひとりでわざわざここまで来られないって」

そう言いながらも、茜はその話を打ち切った。おれも、これ以上深く喋りたくはなかった。

「ねえ」

「ん」

「お母さんのことも、分かんないの」

「あれ、嘘だから」

「やっぱり」

互いに視線を交わさず、短い言葉だけが交錯する、視界の隅で、茜は興味なさげな顔付きで、鞆についたこぶし大の小さなイヌのぬいぐるみをいじっている。CMにも使われている、何か名前のついたキャラクターのはずだけど、それぐらいしかそのイヌについては知らない。垂れた茶色の薄い両耳を、茜の指が触れている。イヌの黒い両目は、畳の方を見つめている。

「居場所、分かってんの」

「だいたい。誰のどこにいるのかは、多分分かってる」

「多分って、自信ないんだ」

「間違いないはずだけど」

「連絡とか」

「しない。もういい」

「怒ってる」

「違う」

淡々と、無感動な声だけが消えていく。気だるく、再び天井の方へ目をやった。

「俊也はさ」行き違いになるみたいに、茜がちらりとこっちを見たのが感じられた。「怒ってもいいよ」

おれは、黙ったままにいる。

「だれが悪いとは言いたくないけどさ。少なくとも、あんたは怒ってもいいんだと思う。だからどうしろとは言わないけど」

さっきよりも夕日は姿を潜め、部屋も少しずつ薄暗くなる。

「よく分かんねえんだ」

見えにくくなったのか、茜は表情を読み取るうとはっきりこっちを向いた。知っていたけど、目は合わせなかった。

「怒るって感覚が、よく分かんなくなった」

「いつ頃から」

「さあ。思い出すのもめんどい」

「なまけもん」

「うるさい」

「今怒った？」

「怒るまではいかない」

腹が立たないから、わざわざ連絡してまで文句を言う気が起きない。

「なんか、どうでもよくなった」

「ふうん。フクザツ」

外の、風のような喧騒だけが静かに流れ込み、その中で、おれは目を閉じた。世界が真っ暗になり、聞こえる音、触れる空気だけが、世界の全てになる。漠然とした、崩れてしまいそうな、そのまま消えてしまいそうな不安定さが、存在を飲み込もうとする。それでも目を閉じている。大丈夫、目を開けさえすれば、全部元に戻ってく

るんだから。簡単なことだ。

「さーて、帰ろっかな」

世界に、その声が届く。目を開けた。おれはここにいた。

「よいしょっと。んじゃ、あたしもう帰るわ。明日学校だし」

「うん」

鞆を肩に掛けながら茜が立ち上がる。それを見て、同じ様に腰を上げた。もう、相手の表情がかなり読み取りにくい、薄闇が部屋一体に漂っている。

玄関で靴を履いた彼女が振り返る。

「なにしてんの、早く靴履いて」

「え」

「え、じゃない。ほら、さっさと出て、行くよ」

「どこに」

「あーもう。俊ちゃんはこんな御時勢に女の子を一人で帰らせるつもりですか」

自分で言うか。

「茜、強いじゃんか」

「何の基準だよそれ。強くないですー。夜道は危険ですー」

口を尖らせながら言った。いや、いざとなったら茜は強いと思う。いざとならなくてもだけど。

「いや、イメージとかさ」

「知らないっての、そんなの。ひとりでもいい、ずっと寝てる気ですよ、ぼけっとして」

そんなら駅まで来てよ、というのが、彼女の意見。ようやくそれを理解して、おれはやっと頷いて窓を閉めに部屋に戻った。裸足の裏に、擦り切れた畳のざらついた感覚が残った。

アスファルトの道には、ぽつりぽつりと街灯が灯り始めていた。だいぶ弱くなった西日が、ほとんど夜の影に取り込まれていく。それでもまだ、明るさを失おうとしない空に、群青と小さな星が混じ

っていく。

隣で屈託のない話を並べていた茜が、ふと思いついたような顔を
した。

「そういえばさあ」本当に何気ない。「俊也さ、お父さんのこと知
らないって言ってたじゃんか、あれも嘘？」

「ううん。あれは本当」

「そっちは違うんだ」

なんだ、と何度も頷いている。通りすがりの自転車とすれ違い、
一瞬だけ、蒸し暑い中に涼しい風が生まれる。

「全然分かんないの」

「居場所とか」

「そう」

「全然。別にどうでもいいし」

外は暑い。服の襟を掴んではたきやりながら風を送る。それで
も、肌にくつつくような暑さはなかなか離れてくれない。

親父のことなんか、本当にどうでもいい。今更知ろうとも思わな
い。

「でもそれってさあ。なんとなく寂しくない」

「んなわけねえじゃん」

「ふうん。そういうもんか」

「最低だぜ、あんなの」

視線を下げて、自分のサンダルを履いた足を眺めた。早くないテ
ンポで、一步、また一步と前に踏み出されている。こうして見ると、
自分の身体じゃないように思えるから、不思議だ。

「きつと、弱いひとだったんだ」

おれが自分で出した、幾つかの結論。そのひとつを呟いた。

「弱いつて。どういう意味、それ」心底理解できないという風に、
茜が振り向いた。

「おれにも、好かれない素質があるんだと思う」存在するだけで許
されない、そんな性質。「でも、向こうもそれを許せないぐらい、

弱かった」

横目で見ると、茜は難しそうな顔をして首を傾げていた。理解しにくい言い回しだと自分でも思う。

「黙ったままで自分の整理をつけられなくて、イラついて、弱いものを殴るっていう逃げ道を見つけちゃったんだ。おれが嫌いだっていうのが、まず第一なんだろうけど」

「んー。分かんないような……わかんないような」

「分かんない方がいい」

なら言わなかったらいいじゃんか、自分でそう思ったけど、言っ
てしまったものは仕方ない。

「そんなら、あんたもそういうの考えないほうがいいよ」

「うん」

分かっていると返事をした。そのくせ、その後の茜の話、家のことや学校、小学校時代の思い出が続いているとき、どうにもおれの意識はそんな方へ向きかけて困った。

話聞けよと、どつかれるより、あんな寂しそうな顔だけされるほうがどうにもやりにくいから、なんとか自分を自分に結び付けていた。気付かれていたとは思うけど。

「俊也も一緒に帰る？」

駅の入り口まで来ると、茜がそう言って立ち止まった。

「いきなりすぎるだろ」

「べつにー。あんたなら勝手知ってるし、構わないけど」

「いいよ、おれはこっちで」

サンダルを履いた足を動かしてみせた。まさに着のみ着のままだ。明日も学校だし。

そうとあっさり納得し、茜は駅の構内の方を向いた。日曜だとい
つても、この日暮れ時は帰宅ラッシュなのか、たくさんの人が行き
交っている。

「じゃ、行くわ」

「ん」

人ごみへ向かって歩き出し、少しして振り向いた。

「またね」

「うん」

茜の右手に、ばいばいと左手を振り返す。姿勢の良い背中は一
度鞆を肩に掛け直した後、すぐに見えなくなった。

少しの間、ガードレールにもたれて、あっちからこっち、ここか
らあそこへと流れていく人たちを眺めた。おれも帰らなきゃ。だ
ん、そう思えてくる。

空を見上げると、すっかり群青色に染まったそれが、視界いつば
いに広がっている。無造作に散らばった星。その間にたった一つだ
け、他とは異なるものがある。

いわゆる、上限の月というやつ。半月が静かに光っていた。

それを見ていると、ざわめきが少しずつ遠ざかっていく。自分の
瞳が、それしか映していないのが分かる。自分の上に、月がある。

あの月の下にいない。唯一の例外。

みんな、見れるんだって。

そう言ったあの子は、あの月の下には、いなくなってしまった。

もっと高いところからでも、月は見えるんだろうか。同じものを、
見られているんだろうか。

首を振って、考えるのをやめる。考えたって仕方ない、結局分か
るわけないんだから。

ガードレールから背中を離して、わざと大きく一步を踏み出した。
サンダルとコンクリートの間で、ぺたりと音がした。

34 - 1 せかい

彗星のごとく現れたその噂は、団地内の無駄に細かい伝達網によつて、あつという間に広まった。

南俊也は、妹を殺した。

あくまで噂に過ぎないそれは、口にされることに信憑性を増して、次の誰かに届けられた。

そうじゃないと、説明がつかないんだ。何故おれがその瞬間に、部屋の扉を全力で叩いて、必死に名前を呼んでいたのか。単なる予測不能な事故なら、そんな行動を取れるわけがない。窓から落ちるのを見ていたのなら、わざわざ五階まで上がってくる必要は無い。滅多に出さない大声は近所にも筒抜けだったし、階段の途中に放り投げた鞆を見た人もいる。ちょっと考えれば、おかしな点に誰だつて気がつく。その上、警察が聞きこみなんかしたら、予測の域を超えてしまう。確信する人がいたって、おかしくない。

母親が出て行って一ヶ月、そのことを誰にも知られないように二人は過ごしてきた。だけどある日、どうしたことが、その兄妹は喧嘩をした。不安と疲労でストレスを溜めすぎていた兄は、幼い妹の言動に腹を立てた。そして、カツとなった彼は、わけがわからないまま、妹を窓から突き落として殺してしまった。さて、しかしどうしても彼は疑われてしまう。そこでとつた不可解な行動は、焦りの中で思いついたごまかし。だけど所詮は中学生の浅知恵、大人の目はごまかせなかった。自分は殺していない、強盗が、なんて真実なら、さっさと言ってしまえばいいのに、彼は何の弁解もしない、ということとは……。

こんなもんだと思う。日々どこかで誰かが囁いていることだから、その口からこんな空想が流れているんだってことぐらい、当事者にはピンと来る。

ピンと来て、そしてどうする。本当のことを言うのか。幽霊が殺

したって、誰に言うんだ、誰が信じてくれるんだ。逆の立場なら、おれはきつと信じない。不安定な子どもの言うことだと、そいつ病院に連れてった方がいいんじゃないかと、きつとそう思う。

自分が出来ないことを、他人に望んではいけない。

目を開けた。朝が来ていた。学校、行かなきゃ。

バレたら怒られるかもしれないけど、空っぽの胃には水だけ流し込んでおいた。今日、何曜だっけ。そういえば、ここにはカレンダ―というものがなかった。

外に出るため、ドアを開け、少しそのままにしておく。子供が一人通り抜けられる時間だけそうして待つ。

待つ。誰を。誰を待ってるんだ。待ってるのか。どうして。どうして。

ドアを閉めて、首から下げた真新しい紐を手繰り寄せ、その先にくつついている鍵を使う。階段を下りて、一階に溜まっている小学生に手を振り返し、駐車場のコンクリートに置かれている、薄桃色の花束の側をすり抜けた。

嘘だつたら。

あの言葉も。

あたたかさも。

優しさだと思ってたものも。

全部。

全部。

嘘だつたら、あの存在が、ごまかしだつたんなら。最初から無いものだったんなら。

それを信じていた、おれというものは。

何なんだろう。

ないものになる。

消えてしまう。

嫌だけど。本当に、消えてしまつほど悲しいけど。涙も出ないくらい悲しいけど。

仕方ないんだ。
だっておれは。

やがて、チャイムが鳴り。時間が経ち、放課後になり、急いで帰ろうとする。

「なに急いでんだ」そう聞かれた。だって、待ってるから。

そう、返事が出来なかった。

待ってる。誰が。だれが。どこで。だれが。どうして。待つてないのに。誰も、待つていない。待つていないんだ。そう、いない。

引き摺りたくなるほどに重く感じる鞆を肩に掛け、朝と同じ道を通つて、団地へ帰る。俯き気味な視線を少し上げると、夕方の気だるい空気の中、駐車場内を駆け回っている子どもたちと、それを見ながら立ち話をしている数人の母親の姿が目についた。

そのひとりの方に、小さな女の子が駆け寄っていく。まだ幼稚園児ぐらいのその子は、母親の手を両手で握り、身体をくっつけて甘え出した。思い出した、あの子は確か、三階の佳奈ちゃんとかいう子だ。なかなか思い通りに構ってくれない母親にじれったくなつたのか、ねえねえと声を張り上げている。

ふと、彼女の視線がこつちを向き、そのぱちりと開いた目と目が合った。おれは、同時に気付いた周りの大人に、形式的な挨拶を小さな声で返して、構わずに側を通り抜ける。

彼らに背を向け、昼なお薄暗い階段に、足を向けた。

「佳奈、知ってるよ」そんなあどけない声が、後ろから追いかける。

「真理ちゃんね、おにいちちゃんが、ころしちゃったんだよ」

無邪気な言葉に、身体の芯が、凍りついた。

振り向いちゃいけない、そんな理性も間に合わず、反射的に振り

返ってしまった。

「こらっ」思わず叱る声を上げて、母親がまるで恐ろしいものでも目にしたような顔で、幼い娘の口を塞いでいる。幼い子は、突然の剣幕に怯え、今にも泣き出しそうな顔をしている。

一瞬だけ、子供たちの明るい声も意識から消え去り、その光景だけが目の前に突きつけられた。

何か言いたくて、おれは口を少し開いた。だけど、唇が震え、頬が少し引きつっただけで、言葉も声も出なかった。出せなかった。何が言いたいのかも、分からなかった。

その間はほんの数秒だったけど、ひどく長く感じられ、おれはそのまま聞こえなかったふりをして段に足をかけた。

おれの姿は、誰にも見えていないはずだった。はずだったのに……。

ああ、やつぱり。

そう、思った。

暗い四畳半。畳の上で、腹に薄い毛布をかけて目を閉じている。

静寂の中、かろうじて時計の音が響いてくるけど、今何時か、目を開けて部屋の隅に転がっている時計をひっくり返しにいく気にもならない。

静か過ぎて、心臓の音が聞こえてきそう。でも、じっとしてても耳にまでは届かない。もしかして、止まっているのかもしれない。おれはもうどこにもいなくて、この目を開けても、真っ暗なまま。そんな場所に、ひとりで転がっているのかもしれない。

そう期待して、目を開けた。

朧月夜を切り取る窓が、見えてしまった。投げ出した自分の腕も、まだそこにあった。

近いそれらが、遠く見える。世界は遠いのに、おれはその中にいる。

嘘みたいな、本当のこと。

もう一度瞼を閉じて、朝が来ない世界に潜り込んだ。諦めながら手を当てると、胸の奥で心臓が動いているのが、嫌でも分かってしまった。

どこにいるんだろう。

おれは、どこにいるんだろう。

暗い世界に、静かな音が紛れ込む。雨の音。開いた窓から、雨の匂いが漂ってくる。あとは何も無い。自分の手が、足が、畳に触れていること、それすら感じられない。雨が降る。世界には、それしかない。

不意に、その、世界から隔絶された世界が破壊された。瞼を開けて、自分と呼ぶ音確かめる。

六回目のコールが終わり、留守電に切り替わる直前、受話器を握った。予想通りの明るい声が、鼓膜を震わせる。

ご飯、ちゃんと食べてる？

学校はどう。そっちも、雨降ってるの？

そうそう、昨日、七海が大学の方に帰ったのよ。

電気の点いていない台所で、電話機のディスプレイだけがぼんやりと光っている。その側の壁にうずくまって、返事を繰り返す。うん。うん、はい、大丈夫。大丈夫。落とした視線の先には、自分の膝と、裸足。冷たい床。大丈夫と、乾いた声が、自分の喉から滑り落ちていく。

受話器を戻し、少しすると、その僅かな光も消え去り、真っ暗に近い闇が全てを包み込んだ。壁に背をつけて、脇の電話台に少しもたれかかったまま目を閉じて、本当に何も無い世界に、再び紛れ込む。不思議なことに、身体を小さくしていると、どこかの路地裏の景色が、ふと浮かんできた。思い出してしまいう代わりに、顔を膝に埋めた。

34 - 2 せかい

嘘だったのかな。嘘だったのか。そうかもしれない。やっぱり、嘘だ。

きつと、寂しい。だから、おれが。

「ちよつと、ねえ！」

大声がして、やつと気がついた。

「またぼけつとして。いいかげんしっかりしてよ！」

やけに茜が突っ掛かる。手にした団扇で頭をはたいてくる。瞬きをしながら見返すと、まったく、という風に、団扇を遠ざけた。

この前のように、窓際に座り込んでいるおれと向かい合う側に茜がいる。前と違うのは、あのやたら重そうな鞆の代わりに、初夏らしく団扇を握っていることと、壁一枚隔てた向こうの部屋に彼女の両親がいて、難しそうな話をしていること。あと、今がすっかり陽の落ちた夜であること。

「あんたさあ、ちよつと痩せた？」

どこかの生命保険の広告が描かれた団扇で自分を扇ぎながら茜が言う。

「痩せたっていうか、なんか薄くなったっていうか。なんだろ」

「体重なんて計ってないし」

「痩せりゃいいってもんじゃないっしょ」

「一日一回じゃしょうがない」

しまったと、咄嗟に左手で口元を押さえた。だけど、やっぱり茜は聞き逃してくれていなかった。

「なに、それって一日一食ってこと。給食しか食べてないの」

「迷いながら、決まり悪く頷くと、

「ほんとにもう。何やってんだよ」

これ見よがしに、大きく溜め息をついた。

「そんなんじゃ、いつか倒れるよ」

「大丈夫。だから」

「だからって、なに」

両手を合わせて、目をぎゅっと閉じた。
少ししてそつと片目を薄く開けると、

「わーかった。お母さんには黙つとくから」

納得いかない顔のまま、茜はひらひらと片手を振り、「その代わり、倒れても心配してやんねーから」そう付け加えた。

よかったと肩の力を抜くのを、明るい照明の下、難しそうな顔で彼女が眺めてくる。意味が分からず見返すと、ふいと視線を逸らされた。何も言わない。珍しい。

何か言つてほしい、聞いて欲しい。おれはそう思つたのかもしれないし、ただ、この空気を埋めたいだけなのかもしれない。ひとりごとだと思われてもよかった。

そのまま、畳に倒れこんで横になった。驚いたようにこつちを向く視線。おれは、畳の縁を見つめたまま、声を出す理由も分からないまま、口を開いた。

「母さん、嘘ついてたのかな」

茜の驚きが、更に大きくなったようだった。

「最初から、こうするつもりだったのかもしれない」

「なに、いきなり」

「出て行くつて、ずっと前から決めてたのかな」

母さんは、こうなることを知っていたんだろうか。

「決めた上で、優しくしてくれてたんなら」仰向けになり、眩しい天井を見上げる。

「おれらはずっと、騙されてたんだ」優しい人だって、信じていたから。

おれ「ら」というのが誰のことなのか、茜なら分かっているはず。それでも、彼女らしく戸惑いを隠し、強がる。

「そついうの考えるなつて言つたじゃない」

「分からないから、しょうがないんだ」

答えがないから、自分で出すしかない。でも結局分かるわけないし、考えるだけ無駄だってことも知っている。だけど、どうしてもそれは、付きまとう。悔しいくらい離れてくれない。

「過ぎたことは忘れようって、いつも言ってたんだ。だから、おれらのことも通過点だって、もう忘れちゃったのかもしれない」

「そんな人だったって、俊也は思ってたんの」怒ったような口調。

「思いたくない」こんな予想が外れてくれれば、どれだけいいだろう。「だけど、おれはやっぱ、母さんのことは何も知らなかったんだ」

知ってたら、ちゃんとあいつにも懐こうとしていた。こっちに必ず帰ってくるなんて、軽々しい思い込みはしなかった。

「忘れようとしたんだ。母さんのこと、全部」

「あんたには、できないよ。そんなこと」

「できないんだ。どうしても」

忘れられることなんて、何もない気がする。例え忘れていっても、最後に残るものは、一生消えないと思う。忘れるには、その存在は、あまりにも大きすぎる。

「おれをかばって親父に殴られたのも、よく笑ってたことも、好きだって抱きしめてくれたことも」あの夜、大丈夫だと言って流していた涙も、ぼんやりしててよく料理を焦がしていたことも、息子がリレーのアンカーで一位になったとき、自分のことのように喜んで褒めてくれたことも。

「出て行くって決めてたのかもしれないけど、全部、本当のことなんだ」

本当は笑えてなかったのかもしれない。嬉しくなんてなかったのかもしれない。そう考えると、胸が潰れてしまうほど、辛くて苦しくて、息が出来ないくらい悲しい。でも。

代わりに受けてくれた傷も痛みも、大好きだという台詞も、あたかさも、焦げてしまった料理も、嬉しそうな笑顔も。全部。全部。

この世に存在していた、本当のもの。

「ずるいよな」力が抜けて、顔だけで小さく笑う。「そういうのだけ、ちゃんと残してくんだ」

嘘を土台にしている事実であつても、存在していたのは確かなんだから。なかったことになんて、できない。

「おれ、どうしたらいいんだろう」

小さく呟いた。茜が同じ様に、小さな声で尋ねた。

「どうということ」

「信じたほうがいいのかな。母さんは、仕方なく出て行つたんだつて。いつも、本当に嬉しくて、笑えてたんだつて」

「ずっと近くにいた俊也が、嬉しそうだったつて思うのなら、嬉しかったんでしょ。あたしよりもよく知つてるはずじゃない」

「でも、そう思い込んだら、逆にもつと不安になるんだ。実は違うんじゃないかつて。無理矢理信じてたら、ときどき、ふつと思うんだ。全部違うんじゃないかつて。おれは、それを信じてるんだつて思つたら……」

言えない。

この両手で自分の首を絞めなくなるなんて、とても言えない。

「……信じたほうが楽なんなら、信じた方がいいし。俊也が一番しんどくない方法にするしかないよ」

右手の団扇を軽く動かしながら、できるだけなんでもない風に、茜は口を開く。「きつとさ、何か事情があつたんじゃない」

そう言つてくれた。

ああ、気を遣わせてる。ぽつりと、そんな思いが染みのように浮かび上がった。多分、茜もしんどいだろうな。こんなことを言われたら、誰だつて返事に困るよな。

自分が言い出したことなのに、今更ながらそう気付いた。

「だったらいいから。せめて、おれは忘れない」

閉じたくなる口を精一杯こじ開け、喉の奥で詰まる声を押し出す。「母さんはもう忘れてるかもしれないけど。どっちにしても、おれ

は、忘れない。もう、誰もいないし」

みんな、ここを出て行った。おれが知ってると思っていた人たちは、おれの知らない世界に、いつてしまった。いつの間にか、ひとりになっていた。

この手は、繋がらない。

「俊也だけじゃないよ」言いにくさを、茜は飲み下す。「あの子もさ、ちゃんと覚えてるよ」

似つかわしくない、無理矢理な彼女の笑い顔。ああそうか、あの子のこと、言ってるんだ。

「今、どこにいるんだっけ」

「死んだ」あの子は、今どこなんだろう。

「へ、だれが」

「あいつ、どこいったんだっけ」

茜が目を見開いて、じつとこっちを見てくる。その奥に、不安の片鱗が姿を表している。

「ねえ、俊也」

「なに」

「あんた、分かってるでしょ」

「なにが」

不思議と、彼女は少し怖じているみたいだった。滅多にないこと。今日の茜は、いつもとちょっと違うらしい。

「あの子はさ」言葉を切る。おれが喋らないと分かると、ゆっくり声を出した。

「真理ちゃん」様子を窺うように沈黙し、やがて、小さく呟いた。

「……死んだんだよ」

なんだ。そういうことか。

「知ってるよ」

「じゃあ何でそういうこと聞くのよ」

「なんでって」

おれはただ、どこにいるのか聞いてるだけなのに。何でこんな怒

った声を出すんだろ。首を傾げる。向こうの茜も、理解できないといった顔をする。

「何が言いたいのか」

「だから、どこにいるのかって」

「どう言って欲しいの。それより、あんたはどうしたいのよ」

団扇をいじる手も止めて、苛立つような、何だか不安そうな目を向けた。どうしたい。どうしたいっていうのは、つまり。

「あいつ、ひとりじゃなにもできないんだ」

そんな顔は、あまりしてほしくない。だから、精一杯明るい声を出せるようにする。

「もの食べるのも。ひとりじゃ、ちゃんと寝ることも出来ないんだ」
これで分かってくれると思ったけど、茜はその表情のまま、何も言ってくれない。

「だから、おれがいつてやらないといけない」

「何言ってるのよ!」

突然彼女は声を荒げた。怒りに、次は悔しさのようなものを混ぜて、胸倉でも掴みそうな勢いで詰め寄る。その目は、はつきりこちを向いていた。何でこんなに怒ってるんだろ。

「だって、今、ひとりぼっちなんだぜ」

その剣幕に押されながら、治まってくれるのを願って声を出した。
「ひとりじゃ何も出来ないのに。きつと泣いてる。誰もいないからきつとひとりでおれを探してる」あの子にはおれしかいなくて、おれにはあの子しかいなかった。まだ小さいから、どうしようもなく泣いているはず。

ひとりぼっちで。知っている人なんていない、知らない場所で。たったひとりで。

「だから、おれが側にいてやらないと」

「この馬鹿! バカトシ!」

茜は、叩きたいのを何とか我慢しているようだった。何で怒ってんだよ、おれはただ、あの子のここに居てやりたいだけなのに。何

がそんなにいけないだろう。

「しつかりしてよ！ あんたまでそうなる必要なんて無いでしょ！
なんで。どうして。どうして俊也が、こんなこと言わなきゃいけないのよ！」

この騒ぎに、何事かと隣の部屋から茜の両親が姿を現した。それでも彼女は少しの間声を荒げていて、やがて、それを深く沈ませた。

35 二度とない最後

最後の日は、朝から雨が降っていた。低い灰色の雲が空一面に広がって、しとしとと雨を降らせていた。

今日が、あの家でのサイゴの日なんだ。朝起きたときから、それが頭にぽつんと残っていて、そのままいつも通り部屋を出て、鍵をかけた。

終業式の日ということで、教室、いや、学校中が騒然としていた。毎回同じ内容の繰り返しである校長の話、恒例の大掃除、最後にクラスに戻ってからの担任による通信簿返却の儀式。年三度のこれは、毎度もの凄い騒ぎだ。おれはまず、どうせよくないだと成績を気にしない論外の位置にいるから、そこに加わったことがないんだけど。良かったのか悪かったのか、教室によつては、叫びを上げる者さえいる。

「きみら三年生にとつて、この夏は天王山だ。ちゃんと計画を立てて……河村、折角つけたんだから折り畳まんでくれよ」

「えー、見たくないですもん」

丁寧に、折る必要のない通信簿に折り目をつけていた河村が顔を上げた。周囲がさつとそれを取り上げ、「うわ、ひでえ」と好き放題言い出し、教室のあちこちで笑い声が上がった。夏休みという一大イベントではちきれそうな空気は、なかなか収まらなかった。

二年と四ヶ月歩き続けた通学路は、結局行きも帰りも傘をさして歩くことになった。帰りは、更に雨脚が強くなっている。天気予報によると、夜には嵐になるらしい。

影はいない。工事現場の前で立ち止まり、わざと振り返ってみたけど、待ってみたって現れはしなかった。サイゴなんだぜ、そう思ったけど、やっぱりいなかった。

その足で帰ると、部屋の鍵が開いていて、おばさんがご飯を用意してくれていた。

ひとり分の、冷やし中華。

座って、大人しく食べていると、ドアの開いて閉まる音とやけに大きな声が聞こえてきた。

「だー、雨めっちゃ強くなってきた。かんべんしてよまったくー」
茜だ。分かりやすい。

「あ、帰ってる。そうだ、ねえねえ、通知表見せてよ、通知表」
廊下から顔を出し、にやにやしながら寄ってくる。

「やだ」何か嫌だ。

「なによー、いいじゃん別に」

「じゃあ茜の見せろよ」

「持ってきてるわけないじゃんそんなの。鞆どこ、探してあげるから」

「いや」

「何でよ。けち」

頭をパシとはたかれる。理不尽だ。

「そついえばさ、中学生って夏休み四十日もあんのよね。あたしなんか夏季補習ばっかで全然ないのに。フコウヘイだ」

真顔で腕を組んで言う。

「何言ってるの。茜の方が二年早かっただけでしょ」

向かいの部屋から返事がされた。

「だってえ、十日と四十日じゃ大分違うじゃんか。お姉ちゃんなんかもっと長いのに」

そう言って、彼女は口を尖らせた。「大学生ってさ、夏休み二ヶ月もあるんだって」

「帰ってくるの」

「お盆ぐらいに一旦帰るって言ってた」

そうか。なな姉は大学生なんだな。頷きながらなんとなく納得した。

それから午後は、いるものといらないものを分ける作業だけが繰り返された。といっても、どちらかに分ければ、この家のものは殆

どがいらぬ物になる。だって、たった一人が引き取られるんだから、それにくつつく付属品も少ないに決まってる。そう、自分に言い聞かせる。

だけど、

「俊ちゃん、この枕どうする？」

再び押入れから出された、半月前には埃まみれだった枕を掲げられたとき、すぐには返事が出来なかった。

ぼろぼろの枕だ、当然捨てるものだと思われていたみたいで、おばさんは不思議そうな顔をした。

「いるんだったら、別にしておくけど」

「いや、いいです」

「いいのよ、持って行っても」

「いいです、捨ててください」

「捨てて」という言葉が喉の奥でからんだけど、必死で笑顔を作った。もう何年も使ってなかったんだ、今更持っても使わない。いるものだけ。あれは、いらぬ。いらぬんだ。声に出さず、呟いた。

よく見ると、この家は傷だらけだった。襖の一部には破れているところがあるし、壁にも薄い線のような傷がある。畳は大分擦り切れてるし、洗面所の電球は切れ掛かっている。

押入れに入ったついでに、傷の一つを指でなぞっていると、
「なにやってんの」

と、呆れ顔をした茜が、片手を突き出した。

「これなに」

「見りゃわかるっしょ。麦茶」

「ありがと」

コップを受け取った。彼女は一つしか持っていなかった。

元から物の少ない部屋は、更にすっきりしてしまった。でも、まだ住める。なんて思った。

窓の外では、予報通り雨脚が激しさを増している。夕方なのにも

う真つ暗で、街の明かりも遠くに霞んでいる。

「明日の午前中に迎えに来るから、そのとき一緒に帰りましょう」
実質上、今日は最後じゃなかったんだけど、ここで一日中過ごすのは、もうサイゴだ。今まで十四年以上何も考えず暮らしてきたのに、あと二十四時間も残っていない。

頷いた裏側で、ひっそり首を傾げた。

帰るって、どこに帰るんだろう。ここがおれの帰る場所なのに。
サイゴだって、言葉は知ってる。でも、帰る場所なんて、ここに
しかないのに。

さつさと布団を敷いておいた。ひとり分しかなかった。

「あつ、これ小学校の教科書じゃん。薄いし軽い」

ひと月前から殆ど使わなくなっていた、おれが寢床にしていた部屋で茜の明るい声が響く。壁の足元に座り込んでいると、その声に
雨音が混じって、遠いものに聞こえる。

「字でかいなあ。あたしんときと同じやつだ、この話知ってる」
処理を手伝ってくれているはずが、古いものを見つけて彼女はは
しゃいでいる、ように見える。おれ自身は、何だかよく分からなくな
って、ぼんやりしている。

これで朝が来て、それで、どうなるんだっけ。

そうだ、出て行くんだ。

どうして。ここが帰る場所なのに。もう帰れない。二度と、この
部屋に居ることは出来ない。この部屋でものを食べることも、眠る
ことも、帰ってくることもできない。「おかえり」を言ってくれる
人は、いない。

本当に？

本当だ。

これが、最後なんだ。

でも、そんなことをしたら、帰って来れないじゃんか。

誰が。

それは。

ひとり分しかなかった冷やし中華。ひとり分しかなかったコップ。ひとり分しか敷かれていない布団。ふと、それらが湧き上がる。

そうだ。

あの子は。

死んだんだ。

茜の声が遠くに聞こえる。その声が、かろうじて、おれと現実とを引き合わせる。繋げてしまう。だから、知ってしまった、気付いてしまった。思い出してしまった。

南真理は、団地の五階の窓から転落死した。第一発見者が悲鳴を上げたときには、すでにその心臓は止まっていた。即死。アスファルトに広がった血の跡は、二週間以上経っても、いくら雨が降っても、まだ残っている。だけど、彼女は恐怖を感じてはいなかったらしい。自分の体が硬いコンクリートに叩きつけられる現実に、間に合わなかっただけかもしれないけど、でも、微かに笑っていた。遺体の破損箇所も、驚く程少なかった。だから、あの箱に入れるときも、微笑ませるのは簡単だったんだと、誰かが話しているのを聞いてしまった。

あの子はシンダ。いや、マリは、死んだ。二度と、会うことは出来ない。兄ちゃんと呼んでくれることも、ふざけて跳びついてくることも、結んでと青いリボンを握って付きまとうことも、二度とない。苦手なハウレンソウを残そうとすることも、得意気に縄跳びをすることも、綿毛の咲いたタンポポを握って走り回れることも。

泣くことも怒ることも笑うことも我慢することも怯えることも喜ぶこともない。できない。

温かくて小さな身体は、もうどこにも存在しない。

それでも、瞼を閉じても見えてしまうのは、泣くことの出来ないマリが、一人ぼっちで泣いている姿。アザラシのぬいぐるみも、青いリボンも持っていないあの子が、寂しいのが嫌いな彼女が、ひとりでどうしようもなく泣いている。ここからでは、おれは抱きしめてやれない。触れることも、声をかけることも出来ない。

泣いている。

死んだあの子が、泣いている。

どうして死んだんだ。あんなに小さな子が、どうして死なないといけないかったんだ。おれよりずっと優しく素直なあの子が、何故先に死んだんだ。

「雨、すごいね」

ガラス窓の向こうの暗闇に視線を投げかけ、茜がぼつりと呟いた。窓を閉めていても、激しい雨音が鼓膜に届く。ひたすら水が地面へ落ちていく、滝の様な大雨だった。

「うん」

ぼんやりと声を返す。

「梅雨明けなんて全然嘘じゃなか」

愚痴をこぼしながら、彼女はごそごそと辺りを探っている。その近くで、何もする気が起きず、力なく目を閉じた。ガタンと小さな音がする。「うわ、何もないじゃん」そう言う声。

「俊也あ、何もないよここ……あれ？」

いじったことのない小さな戸棚、きつとそれが数年ぶりに開けられた音。中身のないそれが、何でずっと置かれていたんだろう。

「これって、真理ちゃんがよくしてたやつだね。ほら、起きろって」

声がかつちを向き、やっと気だるく瞼を開けた。茜が、一番下の引き出しから取り出した、なにか短い紐のようなものの端を握っている。

いや、紐じゃない、あれは。

「二本あったんだ、知らなかった」

違う。あの青いリボンは、二本も必要なかった。それに、あの子が持っていた唯一のリボンは、あのとき一緒に、この世から消した。真ん中で千切られてもしたかのような、やけに短いリボン。

確信を持ったばやけた考えが、頭の中に湧くと同時に、ぴたりと確立する。

影の正体が。

突拍子もない思いつきで、しかもそれを間違いないと信じるなんて、まずあり得ない。　だけど、それは真実だ。

見えない何かが、そう、示唆する。

あの影は、ああ、そうだったんだ。

だから、マリを連れていったんだ。

そうだ、あいつが。

あいつが、殺した。

あいつが。

あの影が。

ぱっと立ち上がり、茜の手からそのリボンをひつたくと、ドアにぶつかるように部屋を出た。壁に立てかけてあったバットの柄を握り締めたのは、殆ど反射だった。

「ちよつ、ちよつと、なに、何なのよ！」

茜の声が追いかける。リボンとバットを左右の手に握ったまま、玄関へ飛び込んだ。

「俊ちゃん、どうしたの。外、すごい雨よ」

台所からおばさんが驚いて出てきたのが、気配と言葉で分かった。構わず、履き慣れた靴に足をはめ、そのまま床を蹴ってドアを開け、部屋から跳び出した。途端、横殴りの雨が、身体に吹き付けてくる。

「俊ちゃん、どこ行くの、戻りなさい。俊ちゃん、俊也！」

初めて、おばさんがおれを俊也と呼んだ。

五階の廊下を駆け抜けながら、その事実だけが、頭の片隅にぼつ

ねんと残った。

36 影の正体

あいつが、マリを殺した。

あいつが。

殺した。

あいつが。

あいつが！

走るのに邪魔になるリボンを、制服のズボンのポケットに押し込んだ。誰もいない夜の道、土砂降りの中をひたすら駆ける。耳は、雨がアスファルトを打つ音だけをひっきりなしに捕え、水滴が全身に体当たりを繰り返す。ばしゃりと、地面のくぼみにできた水溜りを勢いよく踏みつけたときだけ、一際大きな音がした。

右手には、強く握り締めた野球のバット。かつて、これはボールではなく、おれの頭を打って、中の骨を酷い目にあわせた。だけど、それよりずっと前。野球まがいのことを、これで親父とやって遊んだような、そんなふざけた記憶が、うつすらと浮かぶ。もしかしたら、それはおれが無意識のうちにでっち上げた嘘の幸せなのかもしれないし、実は本当の思い出なのかもしれない。

だけど、もういい。そんなこと、今更どうだって。

幽霊相手に、こんなものが効くなんて思わない。だけど、こうしていないと、すくんでしまいそうだった。強くこれを握っていることが、おれを走らせていた。

暗い夜道、すれ違う人も追い越す人もいない。ぼつりぼつりと突っ立っている街灯が、かすんだ光を空気へ投げかけているだけ。激しすぎる雨のせいで、景色に靄がかかっている。

誰も通らない横断歩道の端で、信号が意味のない点滅を繰り返している。

もしかして、この街の人は、みんな死んでしまったんじゃないだ

ろうか。そう錯覚してしまうぐらい、誰もいない。

息を吸って吐く口に水滴が紛れ込む。身体中を水が伝う。目に入ろうとするそれは、瞬きで追い出す。

あいつが、殺した。

ちくしょう。

何でおれにしてくれなかったんだ。

あいつが殺した。

殺したんだ。

久々の全速力で、駆け抜ける。吸い込まれそうな闇を目指して、直走る。雨が、全てを包み込む。

やがて、忘れ去られた工事現場を囲む、高い塀が遠くに現れた。

縦横に吹きすさぶ酷い雨の中、ぬかるんだ地面の土で、汚れることもなく、雨に濡れることすらなく、いつもの影は、おれを待っていた。

右側に、錆の浮いた、巨大な生き物の死骸のような鉄骨の塊。左側には高い壁。雨に打たれて泥になろうとしている地面。どこか遠くに落ちた雷の音が、雨音に混じって聞こえた。

バットをきつく握り締める。手とそれとの間に水滴が入り込み、更に強く握った。

そうだ、こいつが。

「おまえが」

殺した。

「殺したんだ」

単純な肉体疲労のためだけではない、おそらく緊張のせいで切れる息の中、水の筋の向こうへ、そう投げかけた。

対峙して、こっちを向いている影は、じっとしたまま。やっぱり、

表情はぼんやりしていて、分からない。はかなくてたまらないくせに、その影は動こうともせず、じっとそこにいる。

「そうなんだろ」

肯定も、否定もない。

こいつが、この影が。

マリを殺した。

あの子を、この世から奪い去った。

殺した。

殺した。

……ころした。

かろうじて引つかかっていたものが、断ち切れた。

自分が、何を言いたいのか分からない。声を振りたて、何かを叫んだ。言葉ではない絶叫と共に、ぬかる地面を蹴り飛ばした。

一気に影の元に走りこみ、両手で握ったバットを振り切った。
いない。

振り返ると、少し離れたところから、今にも雨にかき消されそうな細かい影が、じつとこつちを見ていた。嘲ってなどいない、見下してもいない、ただ、ぼつんと、寂しそうに。

再び、咆哮を伴いながら地面を駆け、バットを地に叩きつける。

水を含んだそれが弾け、泥が飛び散った。

視線を巡らせる先に、影は姿を見せた。

声を上げ、水と泥を服に吸わせながら、駆けずり回る。バットは宙を裂き、水溜りを破壊する。影を見つけ、猛然と攻め寄る。繰り返す。

いつの間にか、腕が上がりにくくなっていた。叫び続ける喉が、絞り出す声が、次第に掠れていく。髪を滑る水が瞼を通り、視界を悪くする。

荒い呼吸の中、顔を上げた。

影はたたずんでいる。

何が言いたんだよ。

おれに、どうしてほしいんだよ。

おれが解ってやれなかったから、あの子をつれていったのか。
どうすればよかったんだ。

なんで、おれじゃだめだったんだ。
どうして。

地面を蹴り、出ているのかどうか分からない声を張り上げる。繰
り返す。

ずるりと、足が滑った。

泥を踏みつけた足が、大きく身体の後方へ流れる。

胸を激しく地に打ち付けると同時に、口の中に溶けた土が入り込む。だけど、それを吐き出す余裕はなく、只激しい呼吸だけが続けた。右手は何も掴んでいない。バットは、転倒した拍子に、どこかへ飛んでしまった。

限界まで低くなった視界の向こうに影がいる、その更に奥。ここに似合わない色が見えた。呼吸の度にぶれる視線が、その正体をはつきり捕える。地面からはえる錆びた短い鉄骨に、細い、まるでリボンのような何かが、結び付けられていた。

震える、泥だらけの左手を、無造作にポケットに突っ込み、引き抜いた。鮮やかな青と、向こうのくすんだ青。それでも、妙に短いこれら二つは、同じだ。

動悸が激しさを増し、あの部屋で首をもたげていた予測が、再び、沸き起こる。

途端、鋭い痛みが、頭を突き抜けた。

小さな記憶の断片が、脳裏をよぎる。

誰かが、頭を切り裂くような痛みの中で、訴えるのが聞こえる。

捨てないでと、その声は、悲鳴を上げた。

痛烈な、苦しみだった。

その心は、悲鳴を上げていた。

「ああ……」

言葉にならない呻き声が、喉の奥から漏れた。右手で地面を掴み、俯いた身体を起こす。

「ああ、ああ……」

へたり込んだまま、左手を目の高さまで持ち上げた。指に絡まっているのは、マリが持っていたのと同じ、青いリボン。そして、影の側に突き立っている一本の鉄骨、その足元に結ばれているのも、大分色褪せて破れてしまっているが、同じ、リボン。

手からそれが滑り落ち、泥にまみれた。雨が、すぐに地面へ打ちつけた。

影は、動かない。

「おまえは……」

開いた口へ、雨粒が流れ込む。

痛みを伴う、辛い記憶が、教えてくれた。

あの影は。いや、あの子は、本当は。

同じなんだ。

「双子、だったのか」

途中で墮ろされた、三つ下のきょうだいなんて、初めからいなかった。だから、そんなことを覚えているはずなんて、なかったんだ。いつもおれの前に姿を見せていたのは、同じ親を持つきょうだいだからだ。髪が伸びたマリと見間違えてしまったのも、限りなく背格好が近い存在だから、当然のことだった。

あれは、マリと同じ日、同じときに生まれた双子の片割れ。妹の影だ。

急に吐き気がこみ上げ、必死でそれを堪えた。

マリが生まれたのなら、あの子も同じ様にこの世に生まれていた、

それなのに、片方だけが、ここに。

頭が痛い。眩暈がする。それなのに、事實は容赦がない。

あの子だけが、捨てられたんだ。

この、誰もいない場所に。半分にされた、あの青いリボンと共に。ひどすぎる。

途方もない現実が覆いかぶさり、愕然と頂垂れた。信じたくないけど、全部本当のことなんだ。

こんな寂しいところに、誰もいないところに、ふたりは、あの子を捨てた。名前も二度と呼ばれることのない、いや、名前があるのかどうかも分からない自分たちの子どもを、犬のように、猫のように、捨てていった。

どうして、そんなことをしたんだろう。できたんだろう。ふたりは、そんなにひどい人間だったんだ。いつも優しく笑ってくれていた母さんは、そんなひどいことをして、ずっと嘘をつき通せる人だった。我が子というものは、彼らにとってそんな存在だったんだ。どれだけ怖かっただろう。ひとりぼちで死んでいくのは、どれだけ寂しかっただろう。だから、知ってほしかったんだ。誰にも知られず、この世から消えた自分の存在を、せめて自分のきょうだいに、知って欲しかった。

それなのに、おれは。

ごめんなんて言えない。とてもじゃないけど、足りない。今更何を言っても、彼女の苦しみには代えられない。

衰えることを知らない雨が、全身に叩きつけられる。暗闇から降り注ぐそれが、全ての音を遮断する雨音をつくり上げる。月もない夜。それなのに、あの影の姿を、きちんとこの目で認識できているということは、最早不思議に思わなかった。

音もなく、小さな素足が一步踏み出す。見なくても分かった。

ほんの少し前まで抱いていた凶暴な感情が、嘘の様に流れていった。

何も言えないのが、どう頑張っても救ってやれる言葉を見つけれ

れないのが、悔しくてたまらない。自分の髪から地面に滴り落ちる水滴を見つめながら、齒を食いしばった。

もう一步。小さな歩幅で、もう一步。

「辛かったんだな」

頭の悪いおれは、そんな当たり前の台詞しか言えない。

影の歩みが、ふと止まった。

「なにも、してないのに。なのに、親に捨てられて、ひとりで、死んだのか」

声が震える。張り上げて震えを止めようとして、思い出した。いくらこの雨が強くても、どれほど近くに雷が落ちても、この声はかき消されず、あの子に届いているんだって。

「寂しくて怖かったのに、全部なかったことにされて。だから……。だから、気付いてほしかったんだろ」

忘れられるというのは、実は最上級の悲しいこと。

「だから、ずっとおれにくっついてたのに、おれは……」

喉が詰まった。泥まみれの両手で、地面を握り締める。

おれは、何もしてやれなかった。気付いてやれなかった。

おれは、何もできなかった。

いつもいつも、それが通り過ぎるのを待つことしか出来ない。

それに抗おうと馬鹿な真似をした瞬間、とても大事なものを、失った。

「ごめんな……」

声と共に、身体まで小さく震わせながら呟いた。こんな言葉、今更何の役にも立たない、だけど、言わなければならぬ。

「おれが、兄ちゃんが、悪いんだよ」

胸の奥で堰を切ったものが溢れ出し、申し訳なさにたまらなくなつて、顔をゆがめて声を絞り出した。

「おれは、ずっとどうしようもないんだ。だからきつと、親父は……きつと母さんも、子どもが嫌になっちゃったんだ。おれがちゃんとしてたら、お前は、こんなことにならなかった。おれが馬鹿だか

ら、親父は家族に手をあげて、それで、出てったんだ。あいつにも
どうにか懷けてたら、母さんも、いなくならなかった。つまらない
意地を張らなかつたら、そしたら、マリは。……マリは、死なな
った。全部……。全部、なかつたのに……」

何も起きなかった。誰も、いなくならずにすんだのに。

ずっと、家族で、いられたのに。

どうしておれは、こんなはどうしようもないんだろう。失くした
くないくせに、失くしてしまうんだろう。

ただ、手を繋いでいたかっただけなのに。全ての手と、離れてし
まった。

豪雨にかき消されていて気付かなかった。頬を伝う水滴は、雨だ
けじゃなかった。

おれは、泣いていた。

「ごめんな……。全部、おれのせいなんだ……。おれがいなかつた
ら、その分、お前は、生きられたんだ」

後から後から涙が溢れ、ぼたぼたと零れ落ちる。自分がいなかっ
たらよかった、そう思うのに、どうしてもそれが苦しくて、そのく
せ、捨てられたあの子が悲しくて、申し訳なくて、涙が止まらない。
「辛かったんだろ。双子なのに、大事にされて、生きてるあの子が、
憎かったんだろ。同じなのにな。おれが。おれが、代わってやれた
ら、よかったのにな……。ごめん。ごめんな……」

ひとりぼっちで、どれだけ寂しかっただろう。

嗚咽が漏れ、震える泣き声で、謝った。顔を上げられないその向
こうに、影はじっと立っている。泣くこともできず、雨に濡れるこ
ともなく。

「でも……」

声が震える。

「おれも、悲しかったんだ」

捨てられ、死んでいったあの子とは比べものにならないけど。そ
れでも、やっぱり。

「親父に殴られるときも、母さんが、帰ってこないって分かったときも、マリが死んだときも。ずっと、ずっと悲しかった。悲しくて、悲しくて潰れるんじゃないかって、すごく、恐かった。どうしたらいいのか、どうしてこうなったのか、何も分からなくなった」

前のめりになり、へたり込んだまま、泥の中に泣き伏した。ばしやりと地面が音を立て、泥が飛び散る。額をぬかるんだ土に押し付けても、涙はいくらでもこみ上げて、溢れる。

「親父に殴られるのは、すごく悲しかった。他のやつにはどれだけやられても痛いだけなのに、親父に殴られると、胸の奥まで潰れて、苦しいんだ。堪らないんだ。どれだけ頑張っても許してくれなくて、何も分からなくなっても、殴るんだ」

いくら雨が降っても、涙との区別はつく。熱を持ったそれが、冷たい雨に混ざっていく。本当に、苦しかった。あの時流せなかったものが、実は身体のだこかに溜まっていて、今頃になって流れ出したのかもしれない。

「だけど、憎めないんだよ」

雨と泥の絡んだ喉で、かろうじて、そう絞り出す。

「憎んで嫌えたら楽かもしれない。でも……。でも、おれは二人を憎めないんだ。憎みたくないんだ！ ふたりとも、おれの親なんだ！」

よく言われる。恨んでいないのかって、子どもに手をあげて置いていくなんで、ひどい親だなんて。ひどいってことは知ってます。たし、出て行かれなかったら、マリはたった七歳でこの世を去ることにはならなかっただろう。

それでも、憎めない。

どれだけ離れても、何度痛い目に合わされても、二度と会うことがなくても、絶望させられても、この手を離してしまっても、憎まれているとしても。

憎めない。

だって、ふたりがいなかったら、おれは存在自体、始めからなか

った。

親なんだ。もう戻ることのない、家族なんだ。

口では何とでも言えるけど、憎み切ることなんて、出来ない。

おれはきつと、愛してほしかった。怒鳴り声ではなく、感情の消えた冷めた声でもなく、神経をすり減らして聞く必要の無い声で、名前を呼んでほしかった。その大きな手を、殴ることではなく、一度でいいから、ただ、頭を撫でることに使ってほしかった。特別なことなんて何もいらない、息子として、愛してほしかった。手を、繋いでほしかった。

だけど、それが叶わなくても、でも、やっぱり親なんだ。

うーともあーともつかない、小さな声が、聞こえた気がした。

濡れることのない小さな足をこっちへ踏み出し、両腕を力なく前に伸ばしながら、あの子が近づく。顔を上げなくても、分かる。

「お前も、憎めないんだろ」

自分の声すらよく聞こえない土砂降りの中、細い腕を伸ばす影に語りかけた。この気持ちを、彼女は痛いほどよく知っているはずだった。

母親を探す、子どもの手。暗闇で泣きじゃくり、ひたすら出口を求める、小さなはかない、その子の腕。

「親だもんな」

たとえ自分を捨てても、自分を形作ってくれた、人たち。だからこの子は、ふたりを連れていくことは、しなかった。

「きょうだいに気づいてほしくて、知ってほしくて。ひとりだけ捨てられなかった、いろんな人に愛されてるマリが、羨ましかったんだろ。どうしようもなく憎くて、寂しくて、連れていったんだろ」

ああ、この子も、一度でいいから、愛してほしかったんだ。

同じなんだ。

捨てられたんだ。

涙で滲む、狭い視界。俯いた正面に、あの子の足が入り込んだ。薄暗いその影の奥に、細く薄い裸足。ぼろぼろで、今にも崩れてし

まいそつな、七年前に死んだ、妹の影。

涙も雨も、止まらない。

この子は、とつくに向こうにいつてしまった。あの子も、同じところへつれていかれた。

「……もういい」

何もない。

「おれも、つれてつてくれ」

ずぶ濡れの声を、かろうじて張り上げた。

「もういいんだ。おれには、何もできなかった。もういい。もういいんだよ。おれも、つれていつてくれよ」

胸の奥が苦しくなり、絞り出されるように、一層涙が溢れる。身体中を伝う雨と共に、地面を打つ。

泣きながら、顔を上げた。

幼い子供の影が目の前に立つて、じつと見下ろしていた。相変わらずはかなくて、消えてしまいそうで、やっぱり、こんなに近くでも、その顔はよく分からない。

それでも分かった。

この子も、泣いていた。

「あげるよ。なんとか、できるだろ」

冷たいものと熱いもの、水滴がそれぞれ頬を伝う。泣きながら、おれは笑いかけた。

一番マシな方法を、見つけた気がした。

「おれはもう十分だから。もういいよ。おれは本当に、どうしようもないんだ」

代わりに、ここをずっと、一人ぼっちで彷徨うことになるかもしれない。だけど、この子は、たったひとりですつと耐えていたんだ。「だからさ、頼む。生きてくれ」

兄妹としてできること。してあげられること。おれに、唯一残されているもの。

生きているのも、辛い。だけど、かけがえのない、大事な世界。

この子には、少しでも、綺麗なものを見てほしい。

代わろう。お前はもう、十分頑張ったんだ。

「あげるよ」

この、命を。

家族を探す両腕が、暗闇でひたすら出口を求める子どもの腕が。

誰かと繋がっていたい、小さな手が、伸ばされる。

細い足が一步前に出て、そのまま倒れ掛かった。

抱きつくように、その子が重なる。

その子を受け入れながら、自分の身体が傾いていくのを感じた。
薄れる意識の中、懐かしい声が、聞こえた気がした。

エピローグ：そして

馬鹿は風邪を引かないという。

その言葉は正しいのかなんのか、おれは風邪をひくことなんて滅多にない。元が丈夫らしく、これといった病気になったこともない。だから、四十二度の高熱なんて、これまでの人生における最高記録のはずだ。

あの夜、巡回中の警備員が倒れているおれを見つけて、そのまま病院送りにした。風邪を通り越して肺炎まで起こしていて、もう少し見つかるのが遅かったら、助からなかったらしい。豪雨の暗い夜、誰もいない工事現場で暴れまわった後、雨と泥と汗と涙に塗れて気絶していたんだ。全くいいことじゃない。命が助かっても、その後何日かは面会謝絶のままで、ああ、本当にやばかったんだと思った。
たぐいまれ類稀な高熱で死に掛けてるとき、夢を見た。

久しぶりに見た夢には、離れてしまった人達がいた。落ち着いた雰囲気は、あの団地の部屋なんだと思う。

母さんとマリと、あと親父までもがいて、笑っていたような気がする。あいつの笑顔なんて見たことがないけど、もしかしたら思い出せないほど昔に見ていたのかもしれないし、勝手につくったものなのかもしれない。少なくとも怒ってなんかいないくて、当然おれは、それだけで嬉しく思えて、笑った。

母さんはいつもと同じで、いつも通りの優しい笑顔で。おれの知っている母さんそのものだった。

マリもやっぱり、普段の表情いっぱい嬉しそうな顔で、肩までの茶色がかった髪に青いリボンを結び、片手でアザラシのぬいぐるみを抱いて笑っていた。らあちゃんはやっぱり、彼女の親友だった。そして、その反対の手。その手は、もう一つの手に繋がっていた。マリとおそろいの水色のワンピースを着て、少し長い髪に青いリボンをつけている女の子。二人の背格好はすごく似ていて、もし同じ

髪型で後ろを向いていたら、どっちがどっちなのか、おれにも分らなくなってしまうそうだった。顔まで似ていたんだろうか、それだけが、はつきりとは分らない。

でも、あの子も間違いないと笑っていた。ふたりはしっかり手を繋いで、寄り添っていた。

目が覚めても、自分がどこで何をしているのか見当もつかず、ぼんやりしていると、向こうから誰かが近付いてきて何かを言った。その人が着ている服で、ここは病院なんだと知った。

急に全てを思い出して、さっきまで見ていた夢を頭の中で反芻した。

それはひどく幸せなもので、もうこんな夢を見ることも二度とないんだと思った途端、景色が歪んだ。涙が溢れた。

知っている人がその場にいなかったから、余計に泣くことができたんだと思う。半身を起こしたまま、看護婦の白衣の裾を掴んで、声を上げて泣いた。幾らか事情を知っていたその人は、ただ優しく、背中を撫でてくれていた。

もう、誰もいない。

なかなか現れてくれなかった全ての実感がこみ上げて、これから自分はどうなるんだろうという不安に襲われて。

ただひたすら、全てを取り戻したくて。

枯れることがあるのか疑わしい涙がいつまでも溢れ、おれは、泣き続けた。

あの子は、おれを殺そうとはしなかった。命を受け取って、生きようとはしなかった。マリの双子だ。やっぱり、優しすぎる子どもだった。

八月の半ば、一日だけつくられている登校日に学校に行き、いわ

ゆるお別れの言葉を言った。とはいっても、どうしていいか分からず、今までありがとうございました、なんてありふれた台詞しか言えなかったんだけど。その後で、何で転校すること黙ってたんだよと、山本海がわざわざ怒鳴りに来てくれた。嬉しかった。

帰るときに、一度だけ校舎を振り返ると、不思議なことに、校門をくぐりたくなかった。もうおれの席はなくなるんだと分かっている、それでも出たくない。雨の日も風の日も、毎日毎日ここに来てたんだ。変なとこだな、学校って。

そう思いながら、ようやく背を向けた。二度とくぐることもない門を過ぎた。

そういえば、斉藤らはわざわざうちにまで殴りこみに来ていたらしい。でもそのときは、とても悲しいことがあって、いろんなところを行ったり来たりしていて、一ヶ月もしないうちに入院することになったから、結局やつらと鉢合わせすることは、なかった。トシヤは、行方不明になったんだ。

そして、夏も終わりを迎えるころ、思い出した。

おれは、十四歳ではなくなっていた。

エピローグ：ありがとう

なあ、マリ、元気か？ 元気か、なんて、おかしい気がするけど。あのさ、おれ、おまえが死んで、生まれて初めて、死にたいって思ったんだ。今まで一度も、そう思ったことなんてなかったのに。二度と会えないって、もう呼んでくれることもないんだって、本当に一人ぼっちなんだって気付いたら、死にたくなっただ。

おまえが生きていてくれるんなら、おれは死んでもよかったんだぜ。どっちみちひとりになるんなら、おれなんかよりずっと素直で、みんなに好かれるおまえの方が、未来があっただ。

おれ強がりだからさ、あんまり言わないし、認めたくないんだけど、いろいろ悲しいことがあった。その度に、本当に悲しくて辛かった。だけどおまえが死んだとき、まだこんなに悲しいことがあったのかって思った。これぐらいなら、もう生きていたくないって、思った。

ごめんな。おれなんか兄ちゃん。守ってやれなくて。いつつも寂しいことばっかだったよな。泣くような目にばかり合わせてたよな。手すら、繋げなくなった。

マリは、おれが兄ちゃん。幸せだったか。辛かったか。

優しい子だから、きっとそう言ってくれるかもしれない。ごめんなんて言ったら、怒るかもしれない。

ごめんな。

あの子といるんだろ。おれ、知ってたぜ、今、手繋いでるんだろ。これからも、ずっと。

大丈夫だよ、双子なんだ。だからおまえも、怖くなかったんだろ。あんな幸せそうな寝顔で、向こうにいったんだろ。

おれは、おれだけは、何があっても、絶対に忘れない。二人が、この世にちゃんと生まれてたんだってことは、絶対忘れない。

だから、二人とも、消えることはない。

おれが、ずっと覚えてるから。

もう遠くになっちゃったから、おれの声は、届かないかもしれない。

だけど、もしも一言だけ伝えられるなら、喉が潰れるまで一言だけ叫ぶことができるなら。だったら、おれは、こう言うよ。

ありがとう。

生まれてきてくれて、一緒にいてくれて、おれの妹になってくれて。

本当に、幸せだった。

おれはまだしばらく、そっちにはいかない。あの子が許してくれるから、代わることは選ばなかったから、だからもう少し、おれはここにいます。だけど、またいつか会おうな。

今度こそちゃんと、手を繋ごうな。

ここからは月が見えるけど、二人には、見えてるのか。

ああ、もう帰らないと。

なんていうのが一番正しいのかよく分からないけど、こう言えたら、間違いじゃないんだと思う。

せっかく繋げたんだから、ふたりはもう、その手を離さないで。

繋いでいて。

それじゃあ、またな。

エピソード：ありがとう（後書き）

一年前の受験真つ只中の七月に仕上げた作品です。何やってんだって話です。

精神力と体力と時間とやる気さえあれば、今後続きを作るかもしれません。もし、もしも興味をもたれる方がおられたら、見てやってくださったら嬉しいです。

少しでも目を通してくださった方、読んでくださった方、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2877g/>

もういちど、手を繋いで

2010年10月8日14時49分発行